

新津市文化財調査報告書

八幡山遺跡Ⅰ

遺 構 編

1994

新津市教育委員会

例 言

1. 本書は、新潟県新津市金津丘陵埋蔵文化財発掘調査事業の一環として行われた、八幡山遺跡に関する報告である。
2. 八幡山遺跡は、当事業に伴う隣接遺跡の調査によって発見されることとなり、この発見を含め、範囲確認調査と一部本調査を含め7次に亘る調査が行われた。

ここでの報告は、この内第3次確認調査と、第6次の南地域の一部本調査の報告である。

3. 当調査は、昭和62年9月の第1次確認調査にはじまり、第3次調査は同63年6月23日から9月16日まで行われ、南地域の調査は平成2年5月26日から7月9日の間に行われた。
4. 当調査は全て新津市が実施するものであり、八幡山遺跡の第3次調査は川上が担当し、荒木繁雄、杉本恵子、田中順子が補佐して行った。

その後8月2日、「金津丘陵埋蔵文化財発掘調査団」が結成され、現在に至る。

第6次の南地域の調査は川上が担当し、杉本恵子、佐藤友子が補佐して行った。正式の調査体制に関しては、本文に記す。

5. 整理作業の機会を得たのは諸般の事情により、平成5年3月に入ってからであるが、出土遺物に関しては調査主体者が直接これに当る。従って本編は「遺構編」として早期に刊行するものである。
6. 本文の執筆は川上が担当した。
7. 発掘作業から報告書作成に至る過程で、多くの方々の御指導、御教示及び御支援を賜った。記して謝意を示す。

笹神村教育委員会 笹神村郷土資料館 甘粕健 小野昭 石川日出志 岡本郁栄 小川三夫
奥村隆男 金子拓男 川村浩司 小島正己 小林昌二 坂井秀弥 片岡道夫 寺崎裕助 中川成夫
箱岩定雄 藤巻正信 秋葉建設興業KK テック新東KK

凡 例

1. 遺構番号は現地作業終了後に一部整理を加えたもので、「現地説明会資料」の番号とは一部が異なっている。
2. 遺構の記号は次の如くである。
SD=環濠、SI=住居址、SB=建物址、SK=土坑、SX=その他
3. 遺構全測図(第21~27図)に記した数字は、ピットの深さを示す(単位cm)。
4. 住居址、その他の遺構などのピット深度表の数字の単位はcmである。

目 次

I はじめに

1. 調査にいたる経過	1
2. 調査と整理作業の経過	1
A. 第1次確認調査と概要	1
B. 第2次確認調査について	2
C. 第3次確認調査について	3
D. 第4次・第5次確認調査について	4
E. 第6次調査について	5
F. 第7次確認調査について	5
G. 整理作業について	7

II 遺跡とその周辺

1. 遺跡の位置と環境	8
2. 周辺の遺跡	8

III. 調査の経緯

1. 八幡山遺跡の全容	12
2. 調査体制	13
3. 調査の方法と経過	15
A. グリットの設定と調査位置	15
B. 調査の進め方	17
C. 地形測量より	18
D. 遺跡の層序	20

IV. 遺 構

1. 遺構の概要	29
2. 北区域と南区域の遺構	33
A. 環 濠	33
B. 住居址	37
C. その他の遺構	57
D. 前方後方墳	60

3. 時代の異なる遺構	63
A. 土坑	63
B. 焼土坑	63
C. 古代の遺構	65
D. 近世の遺構	67

V ま と め

1. 八幡山高地性環濠集落とその時代	68
2. 八幡山遺跡の諸問題	69
A. 遺跡の広がりと環濠	69
B. 住居址について	71
C. 前方後方墳について	71
D. 古代の遺構について	73
E. S K11号焼土坑と狼煙台	73
F. 焼土坑と簡易炭焼	73
3. おわりに	74
引用参考文献	75
調査関係者	77
報告書抄録	78
写真図版	79

挿 図 目 次

第 1 図	八幡山古墳平・断面図（第一次確認調査八幡山報告より）	3
第 2 図	八幡山トレンチ位置図（第一次確認調査八幡山報告より）	3
第 3 図	第 4 次確認調査結果（「新津市 F・H 地区遺跡確認調査報告書」より）	4
第 4 図	第 5 次確認調査結果（「八幡山遺跡南地区確認調査報告」より）	4
第 5 図	第 7 次確認調査結果（「八幡山遺跡南地区・西地区確認調査」より）	5
第 6 図	八幡山遺跡全測図及び発掘調査範囲図	6
第 7 図	遺跡と周辺の遺跡分布図	9
第 8 図	調査区域及び主要遺構位置概念図	12
第 9 図	開発予定地域内地形実測図	15
第 10 図	北区グリット設定及び発掘調査範囲図	16
第 11 図	南区グリット設定及び発掘調査範囲図	17
第 12 図	北区調査区域内地形実測図	18
第 13 図	南区調査区域内地形実測図	19
第 14 図	南区遺構・遺物出土範囲図	19
第 15 図	土層断面図Ⅰ（A トレンチ北西壁）	20
第 16 図	土層断面図Ⅱ（A トレンチ北壁）	21
第 17 図	土層断面図Ⅲ（B トレンチ北西壁）	22
第 18 図	土層断面図Ⅳ（D トレンチ西壁）	21
第 19 図	土層断面図Ⅴ（南区 H-26 区東壁）	23
第 20 図	土層断面図Ⅵ（H-23 区）	23
第 21 図	遺構全測図Ⅰ（A トレンチ）	25
第 22 図	遺構全測図Ⅱ（B トレンチ）	26
第 23 図	遺構全測図Ⅲ（C・D トレンチ）	27
第 24 図	E トレンチ S I 21 号住居址位置図	28
第 25 図	F トレンチ S D 4 号環濠位置図	28
第 26 図	遺構全測図Ⅳ（南区 I-23 区域）	28
第 27 図	遺構全測図Ⅴ（南区 J-24・25 区域）	29
第 28 図	遺構全測図Ⅵ（南区 H-26・I-26 区域）	30
第 29 図	遺構全測図Ⅶ（南区 I-23 区域上層部）	31
第 30 図	S K 11 号・12 号位置図	32
第 31 図	S D 1 号環濠平断面図	33
第 32 図	S D 2 号・4 号環濠平断面図	34

第33図	S D 3号環濠平断面図	35
第34図	S D 3号環濠内土器出土位置図	35
第35図	S D 5号環濠上層部平断面図	36
第36図	S D 5号環濠下部確認図(第7次確認調査結果)(「八幡山遺跡南地区・西地区確認調査」より)	37
第37図	S I 1号住居址平断面図	38
第38図	S I 2号住居址平断面図	39
第39図	S I 2号住居址内貯蔵穴平断面図	38
第40図	S I 3号住居址平断面図	40
第41図	S I 3号住居址内貯蔵穴平断面図	41
第42図	S I 4号住居址平断面図	41
第43図	S I 5号住居址平断面図	42
第44図	S I 7号住居址平断面図	43
第45図	S I 8号住居址平断面図	44
第46図	S I 8号住居址内貯蔵穴平断面図	45
第47図	S I 9号住居址平断面図	45
第48図	S I 11号住居址平断面図	46
第49図	S I 12号住居址平断面図	47
第50図	S I 13号住居址平断面図	47
第51図	S I 17号住居址周溝平断面図	48
第52図	S I 18号住居址炭化物実測図	48
第53図	S I 6号・S I 19号住居址平断面図	49
第54図	S I 20号住居址平断面図	50
第55図	S I 21号住居址平断面図	50
第56図	S I 22号住居址平断面図	51
第57図	S I 23号住居址平断面図	51
第58図	S I 24号住居址平断面図	52
第59図	S I 25号住居址平断面図	52
第60図	S I 26号住居址平断面図	54
第61図	S I 26号住居址内貯蔵穴平断面図	54
第62図	S I 26号住居址上層ピット群残遺	55
第63図	S I 27号住居址平断面図	55
第64図	S I 28号住居址平断面図	56
第65図	第7次確認調査遺構図1(「八幡山遺跡南地区・西地区確認調査」より)	57
第66図	第7次確認調査遺構図2(「八幡山遺跡南地区・西地区確認調査」より)	57

第67図	S B10号小型建物址平断面図	58
第68図	S K 1号土坑平断面図	58
第69図	環状ピット遺構	59
第70図	前方後方墳平断面図	60
第71図	前方後方墳平面図	61
第72図	土坑平断面図 (S K 5・13号)	63
第73図	焼土坑平断面図 (S K 2・3・4号)	64
第74図	S K11号焼土坑平断面図 (烽火台) (「新津市F・H地区遺跡確認調査報告書」より)	65
第75図	S X 1号遺構平断面図	65
第76図	S X 2号遺構平断面図	66
第77図	S X 3号遺構平断面図 (S D 5号上層部)	66
第78図	S K12号近世土壌平断面図	67
第79図	新潟平野における弥生時代後期の遺跡分布図 (新潟大学考古学研究室資料) —一部加筆—	68
第80図	八幡山遺跡範囲予想図	70

図 版 目 次

- 図版1 発掘調査前 1 遺跡遠景 2 発掘調査前
- 図版2 調査スナップ 1 Aトレンチ 2 Cトレンチ 3 南区
- 図版3 トレンチ完掘 1 Aトレンチ 2 Dトレンチ 3, 4 Bトレンチ 5 Fトレンチ
- 図版4 南区全景 1 北側台地 2 中央尾根部 3 南側頂部
- 図版5 環 濠 1 SD1号 2, 3 SD2号
- 図版6 環 濠 1~4 SD3号(1 完掘 2 土器出土状況 3 土層断面 4 発掘スナップ) 5~6 SD4号
- 図版7 住 居 址 1 SI1~3号住居址 2~3 SI1号住居址
- 図版8 SI2号住居址 1 住居址と周溝 2 遺物出土状況
- 図版9 SI3号住居址 1 住居址 2 遺物出土状況 3 貯蔵穴内の土器
- 図版10 SI4号住居址と遺物出土状況
- 図版11 SI5号住居址と遺物出土状況
- 図版12 住 居 址 1 SI6・19号住居址 2 6号住居址出土遺物 3 SI7住居址
- 図版13 SI8号住居址 1 住居址 2 遺物出土状況 3 貯蔵穴内の土器
- 図版14 住 居 址 1 SI9号住居址 2 9号住居址出土の石鏃 3 SI11号住居址
- 図版15 住 居 址 1 SI12号住居址 2 SI13号住居址 3 SI17号住居址周溝
- 図版16 住 居 址 1 SI18号住居址 2 18号住居址遺物出土状況 3 住居址群 4 SI20号住居址
- 図版17 住 居 址 1 SI20号住居址遺物出土状況 2 SI21号住居址 3 21号住居址遺物出土状況
- 図版18 住 居 址 1 SI22号住居址 2 SI23号住居址 3 23号住居址遺物出土状況
- 図版19 住 居 址 1 SI24号住居址 2 SI25号住居址 3 25号住居敷床
- 図版20 SI26号住居址と遺物出土状況及び石鏃
- 図版21 住 居 址 1 SI27号住居址 2 27号住居址周溝内遺物出土状況 3 SI25号住居址(未完掘)
- 図版22 1 SB10号小型建物址 2 SK1号土坑と土器 3 Aトレンチピット群 4 南区ピット群 5 環状ピット遺構 6 SK2号焼土坑 7 SK3号焼土坑 8 SK4号焼土坑
- 図版23 前方後方墳
- 図版24 1 SX1号遺構 2 SX1号遺構出土土師器 3 SX2号遺構出土土師器 4 SK5号土坑 5 SK11号焼土坑床面 6 SK12号近世土壇
- 図版25 1, 2 SX3号遺構(SD5号環濠の中間層) 3 SX3号遺構出土土師器

I はじめに

1 調査にいたる経緯

昭和62年、新津市古津・蒲ヶ沢と割町・塩谷・金津の間にひろがる通称金津丘陵に、土取りを目的とする総合運動公園計画（仮称）がおこった。これは新潟平野を横断する磐越自動車道建設に伴う盛土用の土砂を供給するものであり、新津市にとっても歴史的事業となるものであった。この開発範囲は、南北1100m、東西600mの内の約263,070㎡に及ぶものであり、この地域内には八幡山城址をはじめ、縄文遺跡である埋葬地遺跡、神田遺跡、鳥撃場遺跡をはじめ、古代又は中世の製鉄関連遺跡である大入沢遺跡、居村遺跡が存在し、さらに未知の遺跡を含めて多くの遺跡が存在する可能性を含んでいた。

この総合運動公園計画に伴う遺跡確認調査の始まりとして、昭和62年9月、埋葬地遺跡、八幡山城址、鳥撃場遺跡などの調査が県教育庁文化行政課主任を調査担当者として行うこととなった。この調査の内、八幡山城址と言われていた遺跡が、後述するところの県内最大規模の古墳であったことが確認され、さらにこの盛土の下に弥生時代の住居址と弥生時代の遺物の包含層とが発見されるに至った。これこそ八幡山遺跡の発見である。この発見を第1次確認調査とし、その後一部区域の本調査を含めて、平成2年7月の第7次調査にまで発展することになった。このことは、稀に見る大規模な遺跡であることと同時に、この遺跡が、弥生時代後期の高地性集落と言う特異な遺跡であり、さらにこの位置が日本海側の北限であると言うことなど、様々な要素を加味し、さらに遺跡の保存、開発問題ともからみあい、迂曲を重ねる結果からであった。以上の結果をふまえて、八幡山遺跡はほぼ大方が遺跡公園として保存されるに至った。

2 調査と整理作業の経過

A 第1次確認調査と概要

第1次調査に至る過程に関しては前項で記述した通り、この遺跡の北端部に当たる旧八幡山城址の確認調査に始まる。この結果八幡山城址は円墳であり、その盛土の下から南方の山頂に向かって弥生時代の遺跡が広がっていることが確認され、報告された。この報告は幸いなことに、調査担当者の御好意によって、すでに『新津市史』（資料編第1巻）に掲載されている。これはあくまでも八幡山城址と古墳に関するものだが、当八幡山遺跡に係わる部分を記載させて戴く。なお、調査期日、調査担当者などは次の通りである。

- 1 調査期日 昭和62年9月28日～10月9日（10日間）
- 2 調査主体 新津市教育委員会

3 調査担当 戸根与八郎（新潟県教育庁文化行政課主任）

調査員 坂井 秀弥（同課 文化財専門員）

柳 恒雄（同）

肥田野弘之（同）

……………中 略……………

「このトレンチで、堀の内側の高い部分に厚さ1mちかくの盛土がなされ、その盛土の下に弥生時代中期～後期の遺物包含層と竪穴住居跡を確認した。

盛土と遺物包含層を追求するために、堀と反対側の東側から北側にトレンチ（No.3、No.4、No.5）を設定した。その結果すべてのトレンチで盛土と遺物包含層が確認された。盛土下の遺物包含層のレベルが北側から東側に向かって傾斜し低くなる。……………（第1図）。」

……………中 略……………

「弥生時代の遺物包含層の広がりを確認するために、堀の南側の尾根上に2m×3mのトレンチを7ヶ所（No.6～12）設定した。トレンチNo.6、No.9、No.11、No.12から土器が出土し、トレンチNo.9からは竪穴住居跡と思われる遺構を検出した。これより南側にも遺跡が広がることが予想されたが、発掘の同意を得ていないため、0.3m×0.3mの小穴（No.17～25）を掘り、土層を観察するにとどめた。しかし、2ヶ所から遺構と思われるものと土器が見つかり、尾根のピークまでは遺跡が広がることを確認した（第2図）。

……………中 略……………

「古墳造営前（盛土をする前）には、この丘陵尾根上に弥生時代中期～後期の集落跡が存在する（仮称：八幡山遺跡）。遺跡の広がり今回の調査では確認できなかったが、尾根のピークまで延びていたことは確認された。土器は東北地方南部に分布する天王山式土器で、県内では数少ない例である。なお、丘陵尾根上に立地することから、一般的な農村ではなく、特殊な性格をもつものとかんがえられる。第1図の斜線部分Bは確認調査の追加が必要である。」……………後略

この文末の第1図の斜線部分と指摘しているのは、正に八幡山遺跡の南地域にまで及ぶ山頂部一帯をしめている。

B 第2次確認調査について

第1次調査の結果、この新たな発見となった弥生時代の遺跡について、その範囲の把握と一部周辺に所在すると思われる他の遺跡の確認調査を行うことになった。調査は新潟市教育委員会が実施し、筆者川上が調査の依頼を受けて担当した。

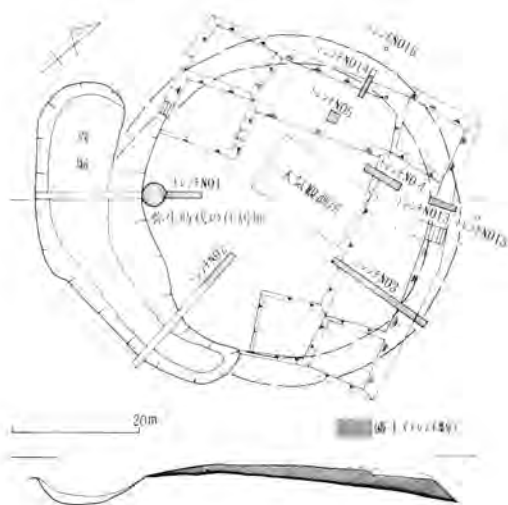
調査は第1次調査の行われた同年昭和62年11月24日から12月10日までに実施し、八幡山遺跡の北地区及び鳥撃場遺跡、神田遺跡などを合わせて調査した。これらについてはそれぞれの報告を提出したが、ここでは八幡山遺跡に限って再報告を行う。

調査範囲は第1次確認調査における試掘坑のNo.11、No.12の南側及び東側に主体を置くことになったが、現況は日中でも薄暗い杉の大森林であり、樹間を見て大小38箇の試掘坑或いは溝を以て調査した。この結果15か所に弥生時代の遺物と溝状或いは穴状の遺構が確認出来た。これら遺構及

び遺物が検出された試堀坑は山頂付近に集中しているが、東側斜面のかなり高度を下げた位置でも確認された。この山林が杉の樹木の密度が多く、全体の地形を把握することは困難であることや、それぞれの位置や方角の把握が出来ず迷子者の続出する有様であった。これらの試堀坑を地形図上に当て嵌ると、その範囲は南側は後述する大グリットI-23区(南地区北端)にまで達していたが、遺物・遺構の検出範囲は、大グリットG-20-40に位置し、東側はG-14-32に及んだ。この結果、山頂部の標高54.5mから東側での標高40m地点の比高14.5mの斜面に展開することが分かり、遺跡の範囲は第1次確認調査範囲であった、大グリット12列以北を除外して、12,537㎡と推定した。しかし、この推定範囲は第3・4次確認調査でみごとに打ち砕かれ、遺跡はこの数倍の広がりを見せることになった。

C 第3次確認調査について

第2次調査の範囲確認に基づき、翌63年に入って遺跡のより正確な把握、特にその性格等に関する確認調査を実施することとなり、川上はその依頼を受けた。調査に先行して遺跡範囲内の立木の伐採、搬出、残材の焼却などが行われ、それらの作業の終了を待って、調査を開始した。調査は6月23日から9月16日までであった。この第3次調査の結果が、当報告書の主目的であり、次章以降に再記するが、与えられた時間の中で最大限の調査を行うことが出来、多大の成果を見るに至った。この調査は前述した如く遺跡の性格の把握を主とすることから、川上独自の考えで幅員最大15mの調査幅を用い、主として10m幅のトレンチを用いて行った。この大型トレンチによって種々の好結果がもたらされたものであるが、「確認調査らしからぬ調査」と言う批判を受けた。



第1図 八幡山古墳平・断面図
(第一次確認調査八幡山報告より)



第2図 八幡山トレンチ位置図
遺物・遺構の有無
●=あり ○=なし
(第一次確認調査八幡山報告より)

調査の結果は断片的ではあるが、二重の環濠、多数の住居址、前方後方墳などを見、この遺跡が「高地性環濠集落」と呼ばれる弥生時代の大集落址である。そして、その時代は弥生時代後期前半に中心をもち、後半まで存続したものであることが分かった。また一部分には奈良時代と推定される土師器、須恵器を伴う小規模な遺構も検出された。

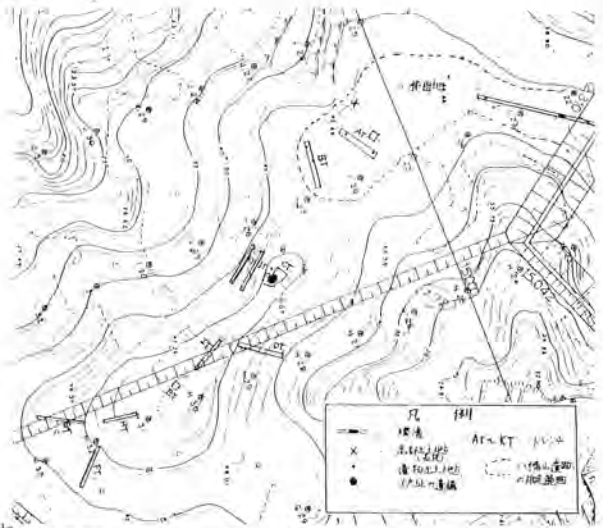
この調査では遺構によっては完掘を控えたものもあり、トレンチ外にまたがる遺構も大方は拡大調査を控えた。一方、ごく僅かな拡大調査で完掘出来る住居址の他、その性格を確認しなければならなかった前方後方墳の前方部分を拡大調査した。またこの調査中に行った、より南方に続く山稜地点（後述する南地区）の果樹園で、弥生土器の表面採集が出来たことなどから、遺跡はさらに拡大する可能性が実感として把握出来たことから、予定外の尾根上に細いトレンチを延ばし、住居址や環濠などの検出を見るに至った。

此の調査における遺構は全て川砂を搬入して覆い、トレンチ共々埋戻しが施され、土砂の流出を防ぐため、クローバーの種子を蒔いて保護された。

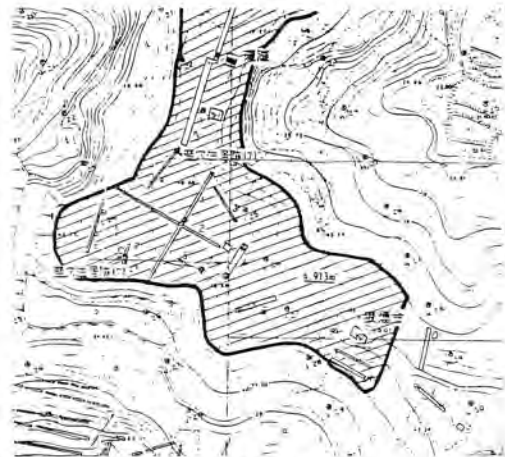
D 第4次、第5次確認調査について

第3次確認調査直後の昭和63年9月21日から10月3日にかけて、第4次確認調査と、やや時間をおいた11月に入って第5次確認調査が行われた。

第4次調査は、第3次調査の山頂より約250m南寄りの尾根部が対象であり、荒木繁雄氏がこれを担当して実施された。この地は山林原野であり、細いトレンチ調査が行われた。その結果、表採遺物を始め、少量の土器が出土し、一部で「炉址」が発見された（第3図参照）。これらのことから八幡山遺跡は丘陵の南限まで広がる可能性が強くなった。また、ここで発見された炉址遺構は、その後になって烽火台などと一部マスコミや保護団体などによって持ち上げられ、問題となったが、この件については本文のSK11号焼土坑で報告する。なお、第4次調査の結果は、「新津市F・H地区遺跡確認調査報告書」として報告されている。



第3図 第4次確認調査結果
（「新津市F・H地区遺跡確認調査報告書」より）



第4図 第5次確認調査結果
（「八幡山遺跡南地区確認調査報告」より）

第5次調査は、第3次調査と第4次調査区域に広がる柿団地内の果樹園が対象である。そのため柿の収穫後の昭和63年11月になって調査が行なわれた。調査担当者は伊与部倫夫氏である。調査は数10cm幅のトレンチ調査によるもので、複数の住居址の存在の可能性が報告された（第4図参照）。なおこの調査結果は「八幡山遺跡南地区確認調査報告」として報告されている。

E 第6次調査について

第6次調査は、第4次・5次確認調査結果に基づいて、南地区及び南東地区における全面調査（本調査）として実施することとなり、川上が依頼を受けてこれを担当した。調査は、平成2年5月26日より開始した。

南地区は柿団地造成時点でその主要部の多くが壊滅していたが、住居址や瘦尾根を切る濠を検出し、一部を完掘した。

ところで第4次調査で確認された「炉址」は、この南地区に所在するものであったが、当調査が行われることになった1年数ヶ月の間に、隣接する周辺の山林の伐採や、更に谷を隔てた南側丘陵の立木の伐採、搬出作業における索道の基点が近くに設置された。そしてこの年の冬から春にかけての木材搬出作業中に不慮のことから、この「炉址」が破壊される結果となった。この事件を契機に担当者等にその理由の説明もなく、ある日突然「本日限りにて全ての調査を打切る様に」との通達があり、翌7月9日全ての器材・用具を撤収して一切の調査を終えた。

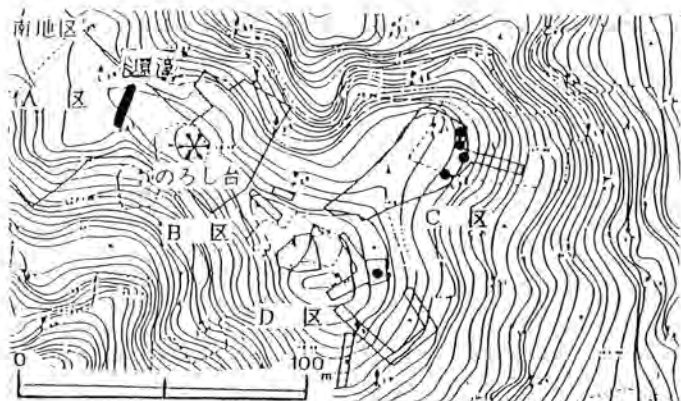
9分通り進行していた南地区の調査は完掘目前において埋戻される結果になり、また調査記録、遺物共全てその場で調査主体者へ引き渡した。

一方、南東地区の調査は4本のトレンチを荒掘削したのみで終了した。これら第6次調査結果は、一部分が半端であるが、本文で報告するものである。

F 第7次確認調査について

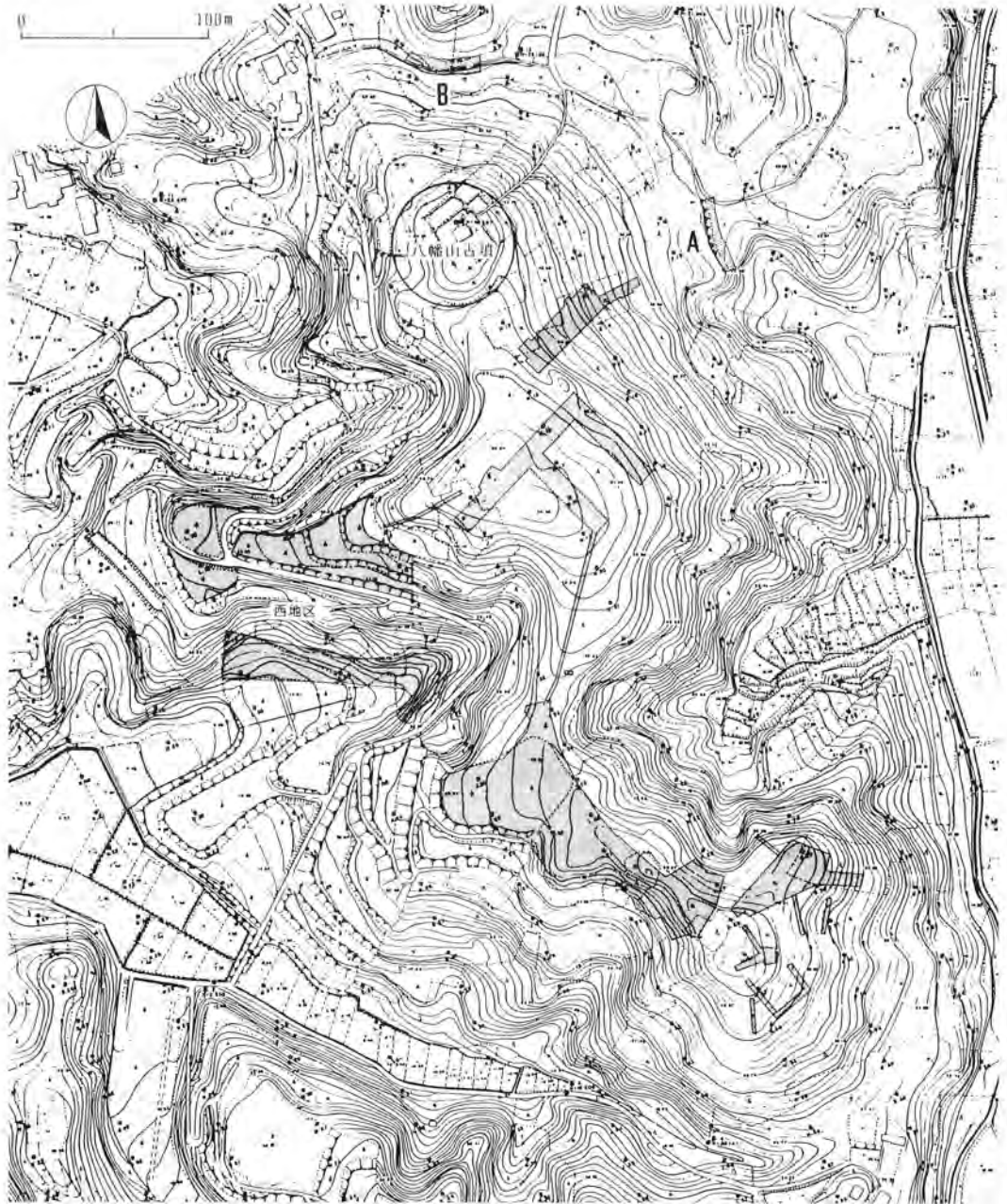
平成2年7月9日、筆者等が途中で中止することになった直後、第6次本調査予定地内と西地区の調査が行われているが、その詳細に関しては不明である。調査はなぜか坂井秀弥氏（新潟県教育庁文化行政課）、渡辺明和氏（新津市教育委員会教育課主事）が担当した。これらの調査結果の報告〔渡辺1990〕に依れば、第6次調査区域における環濠などの調査を追加し、さらに西地域における調査で5基の住居址と多数の遺物を検出している（第5図参照）。

なお、ここで言う南地区は、第6次調査で言う南地区と南東地区を加えたものである。



第5図 第7次確認調査結果
（「八幡山遺跡南地区・西地区確認調査」より）
□ 確認調査範囲 ● 竪穴住居

以上、第1次調査から第7次調査において発掘調査を行った範囲は、第6図に示した区域である。なお、第6図中、A・Bで示したものは踏査によってほぼ確実に推定される環濠の跡であり、遺跡は八幡山古墳の範囲も含めた広大なものとなること明らかとなった。但し、第7次調査による西地区は、柿団地による地形の変動もあろうが、いまここで八幡山遺跡の範疇に入れることは早計と思う。



第6図 八幡山遺跡全測図及び発掘調査範囲図

G 整理作業について

八幡山遺跡の整理作業は、これまでその機会が得られなかった。それは筆者等に、その時間が得られなかったことにも原因があるが、調査主体者との間に調整がつかなかったことにも起因する。平成4年10月になって、調査主体者と、整理作業についての打合せが行われた。その結果筆者等の作業は遺構に関するもののみに限られ、遺物は全て市教育委員会がその整理を行う事になった。従って、発掘調査に携わらない者による遺物編が分離されて出来ることになった。

整理作業は、平成5年2月22日から5月29日までの間を要した。なお、諸般の都合により、笹神村郷土資料館の研究室を借用して整理作業を行った。

II 遺跡とその周辺

1 遺跡の位置と環境

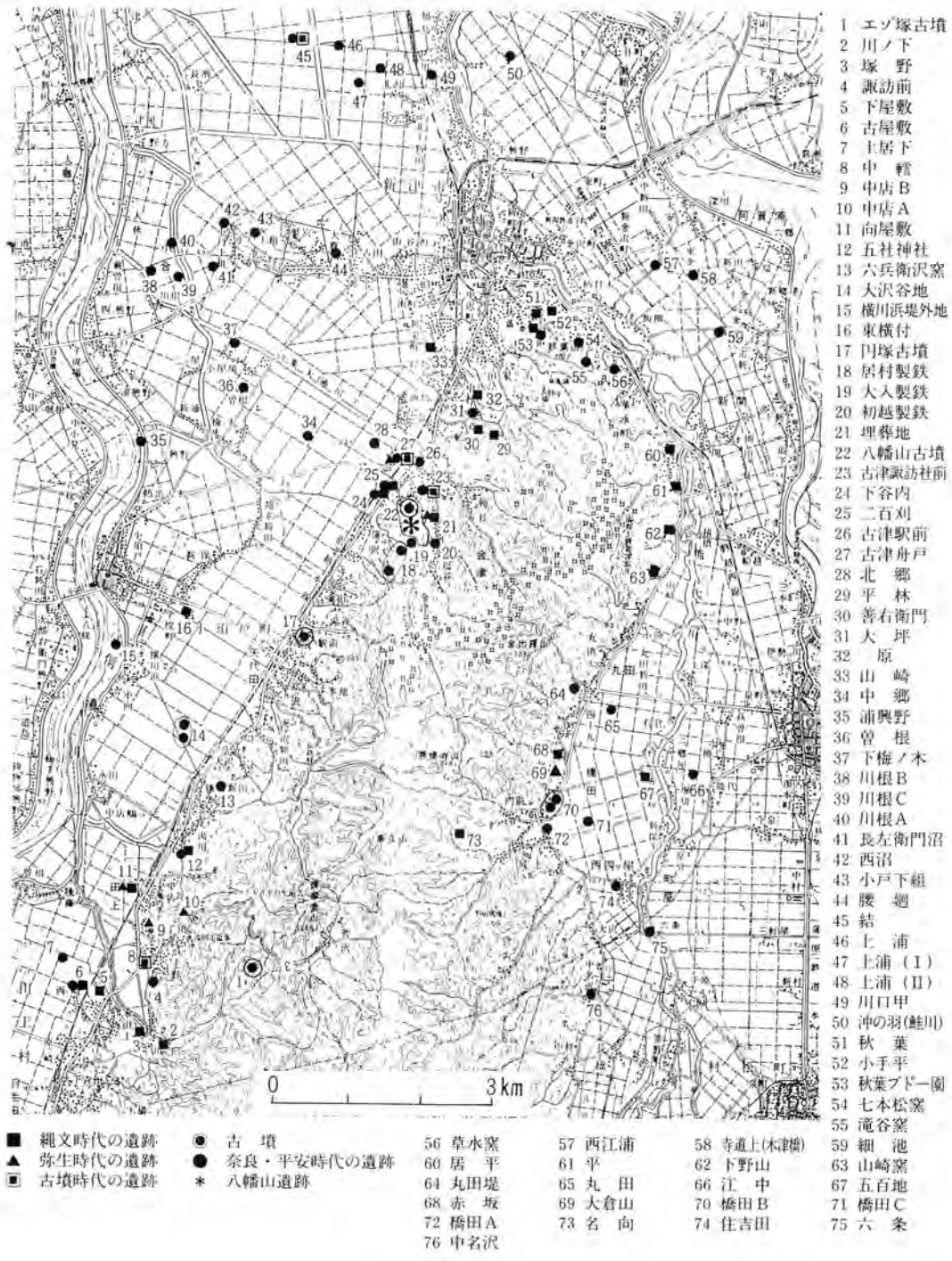
八幡山遺跡は、新津市大字古津字外畑及び初越に所在する。新津市は、全国第二位の広がりを持つ新潟平野のほぼ中央部に位置し、新津丘陵の北端部にある。東は阿賀野川、西は信濃川と、日本有数の二つの大河に囲まれている。新津丘陵は市の東南部に位置する越後山脈の一小支脈で、北北東から南南西に連なり、その南限は加茂川である。標高300m以下の平坦な山地で、高立山(276m)を最高とし、菩提寺山(248.4m)以北では急角度に高度を下げ、市街地に近い秋葉山付近では70~80mとなる。八幡山遺跡が所在する丘陵は、この新津丘陵の本陵より西側へ分離したかに見られるもので、東側の背後には金津川、朝日川などが流れる低地が発達しており、支脈となる。この支脈は標高60mのお茶山を最高にして、北に向かって高度を下げる。一般には金津丘陵と呼ばれている。

八幡山遺跡は、前章でも記した如く、この金津丘陵上の南北に約600m程の広がりを見るものであり、北地区の頂点は54m、南地区は53mの標高を保ち、全体に平坦な頂部を多く見る。いま大雑把に遺跡を、北地区、南地区、南東地区と三分するが、それぞれが細い瘦尾根によって分離される立地条件を有する。北地区は、東、北側がやや緩やかな斜面を保ち、西側は急斜面となる。南地区は、頂部が西向きの平坦地で四方が急斜面で落ち込む。南東地区は、西、北に急斜面を見るが、やや東寄りの頂部より下がった位置に中心を置くかに見られる。遺跡全体の東側は、割町、塩谷地区の低地を隔てて新津丘陵の主脈が横たわり、その後方に朝日が登る五頭山脈(北蒲原郡)が見える。遺跡の西側は広大な越後平野を眼下にし、遠くに夕日の沈む角田山、弥彦山(巻町、弥彦村)を望む。

2 周辺の遺跡

新津丘陵を中心とする遺跡は、近年、急速にその数を増している。新津市内における原始時代の遺跡数は、昭和48年の調査で8遺跡が知られていたに過ぎなかった。その後、新津市史編さん事業に伴う調査や、昭和60年に行われた新潟県教育委員会による当地域の詳細遺跡分布調査によって18遺跡に増している。また近年の急速な開発事業に伴って、これまであまり注目されなかった平野部の低湿地帯にも奈良・平安時代の遺跡が次々に発見された。そしてこれらの幾つかが発掘調査されている。

第7図は、八幡山遺跡を中心にした周辺の遺跡分布である。この分布図では群を成す遺跡の一部を省略し、また、新津市古津周辺に所在する鳥撃場遺跡、神田遺跡、高矢A・B遺跡(共に縄



第7図 遺跡と周辺の遺跡分布図

文時代) など、正確な位置が確認出来ない遺跡も省略した。

旧石器時代の遺跡 分布図では旧石器時代の遺跡を明示していないが、数ヶ所で旧石器の報告がある。2) 川ノ下遺跡の遺物は1958年八百板茂氏によって、寺村光晴氏に照会されたが一部に不安もあったが、現在では旧石器と推定している。川ノ下遺跡に連続するかと思われる3) 塚野遺跡よりナイフ形石器や石刃など5点の遺物が採集され報告されている〔田中1989〕。56) 草水窯は1993年夏、草水町2丁目窯跡と改名して発掘調査が行われているが、周辺より石刃が出土している〔渡辺1993〕。草水窯は新津丘陵の末端部に当たるが、この末端部周辺で出土した旧石器を、1954年、加藤晋平氏が確認しているが、その正確な出土地は不明である〔川上1993年〕。また当八幡山の調査においても、北地区より旧石器の石刃が検出されている。これらの立地は、いずれも丘陵上に位置し、一部は丘裾部にある。この様にごく少量ではあるが、旧石器時代の遺物が報告され、この時代の遺跡が確実にありつつある昨今である。

縄文時代の遺跡 縄文時代の遺跡も丘陵端部を主体に分布する。これらは丘陵裾部の標高5mから集落背後の30m程に立地する。縄文時代の遺跡のうち前期に遡るものは、新津市内ではやや不確定だが60) 居平遺跡があり、田上町の3) 塚野遺跡、6) 古屋敷遺跡がある。同じく中期の遺跡としては、32) 原遺跡、53) 秋葉ブドー園遺跡、61) 平遺跡の他、68) 赤坂遺跡、67) 五百地、6) 古屋敷遺跡がある。後期の遺跡は、32) 原遺跡、51) 秋葉遺跡、53) 小手平遺跡、61) 平遺跡、2) 川ノ下遺跡、3) 塚野遺跡、12) 五社神社遺跡がある。この様に平、原、塚野遺跡は中期・後期の複合遺跡、あるいは継続した遺跡である。また原遺跡は一辺が300mを越す大規模な遺跡で、さらに丘陵の頂部から低地にまで広がる特異なものである〔川上1989、1991〕。これらの内平遺跡、古屋敷遺跡が発掘調査され、それぞれ報告されている〔川上1982、中島1976A〕。なお晩期に相当する遺跡は発見されていない。

弥生時代の遺跡 弥生時代の遺跡は非常に少ない。これは新津丘陵周辺に限るものではなく、新潟県内全体に見られる現象である。新津市内での弥生遺跡は、当八幡山遺跡が偶然の発見であったが、これまで知られていたのは、27) 古津戸遺跡、21) 埋葬地遺跡があったが、前者は古墳時代から奈良時代に中心を置く遺跡であり、後者は縄文時代後期が主体であるが、近年弥生土器の検出を見ている〔菅森1990〕。また後者に関しては、遺跡確認調査による弥生土器の出土報告もある〔坂井1987〕。一方、正確な採集地は不明であるが、原遺跡の範疇と考えられる中村地区での弥生土器の出土もある。

新津丘陵南西部の田上町では、丘陵頂部の10) 中店A遺跡と丘陵裾部の9) 中店B遺跡がある。前者は湯田上カントリー倶楽部建設によって発掘調査が行われ、祭祀遺跡と報告されている〔中島1976B〕。

丘陵の東側に当たる五泉市の69) 大倉山遺跡は平野部に突出した如き山頂を呈する特異な立地条件にあり、この山腹から山頂にかけて弥生土器が散布している。弥生後期に中心を持つもので「高地性集落」と推定される遺跡である〔川上1994A〕。

古墳時代の遺跡 古墳時代の遺跡も少ない。新津市内では、八幡山古墳の眼下に所在する23) 古

津諏訪社前遺跡、27) 古津舟戸遺跡があり、北方平野部の低湿地帯に45) 結遺跡がある。丘陵南部には8) 中懸遺跡が知られているに過ぎない。一方、古墳そのものは、八幡山古墳は言うまでもなく、中懸遺跡の東方頭上に1) エゾ塚古墳があり、矢代田市街地に17) 円塚古墳がある。エゾ塚古墳は平野部との比高約117mの山嶺に円墳2基、方墳1基が造営されている〔川上1994B〕。円塚古墳は台地上に営まれた円墳である。円塚古墳はともかく、八幡山古墳やエゾ塚古墳が、それぞれ隣接する遺跡との関連が注目されよう。なお、八幡山古墳は測量調査が行われている〔甘粕1992〕。

古代の遺跡 古代即ち奈良・平安時代の遺跡は、集落址の他、生産遺跡と呼ばれる製鉄関連遺跡や須恵窯址などがある。集落址は主として丘陵裾部に発達するが、丘陵北・西側平野部の低湿地帯に延びる自然堤防と考えられる微高地上に発達する。この地域における遺跡は、今後なお多くが発見されるであろう。生産遺跡は、その性質上から丘陵裾麓部に立地する。そして製鉄・須恵窯址共に幾つかの群を成す。18) 居村製鉄遺跡群、19) 大入製鉄址、20) 初越製鉄遺跡群がある。一方秋葉山北東麓に点在する須恵窯址は、七本松窯址群と一括して呼称しているが、やや離れた63) 山崎窯址をも含めたものである。

これらの遺跡は、この数年間に発掘調査が進み、多くは整理作業中である。発掘調査が行われた遺跡には54) 七本松窯址〔中川1956〕、63) 山崎窯址〔川上1981〕、14) 大沢谷地遺跡〔川上1991〕、49) 川口遺跡〔川上1992A〕、47) 上浦遺跡(確認)〔渡辺1992〕の他、46) 上浦遺跡〔北村1991〕、47) 上浦(Ⅰ)遺跡、48) 上浦(Ⅱ)遺跡、50) 沖の羽遺跡、56) 草水窯址、58) 寺道上A、B遺跡、59) 細池遺跡、18) 居村A～E製鉄址、19) 大入製鉄址などがある。

中世の遺跡 中世以降の遺跡は、第7図では省略したが、集落址と製鉄遺跡がある。前者は、古代と同様に低湿地の微高地にある。新津市内では浄楽遺跡(大字栗宮)や発掘調査が行われた江内遺跡〔日本道路公団新潟建設局編1992〕があり、後者は古代の18) 居村製鉄址と重複するものである。

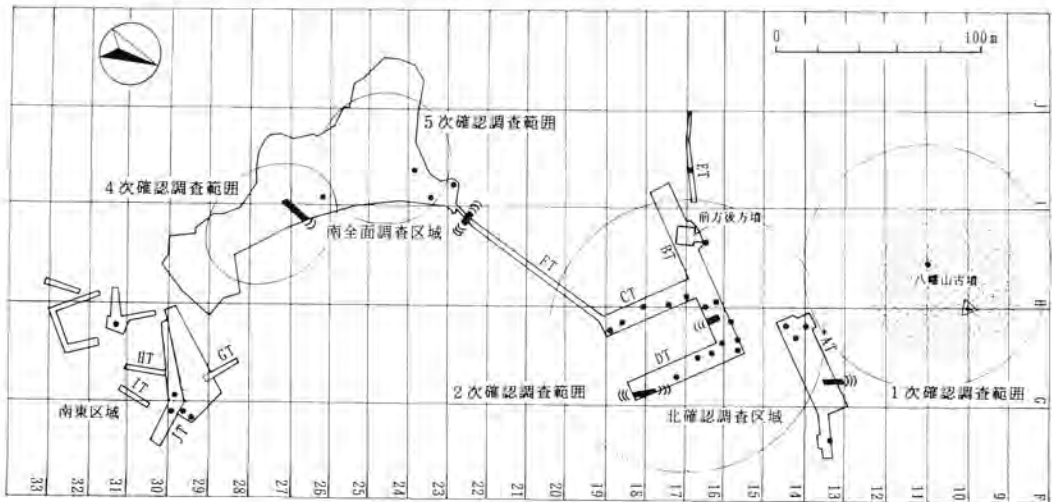
Ⅲ 調査の経緯

1 八幡山遺跡の全容

これまでの確認調査などによって明らかにされた八幡山遺跡の全容については、すでに1-2で逐次明記したが、ここで改めて整理しておきたい。

第8図は、南北20m、東西50mピッチを持つグリッド内に、これまで調査を行った内の第三次、第6次、第7次調査の掘削範囲を示したものである。また第1次調査、第2次調査の大雑把の範囲をそれぞれ円で囲んだ。また第4次調査、第5次調査も同様であるが、ここは南全面調査区域(第6次調査)の範囲に入るものである。これらの発掘調査に加え、周辺の踏査によって、遺跡は第8図の北側及び北東側へさらに広がり、全長南北500mを越えるものであることが分かった。

ここに報告する第3次調査は、昭和63年7月であり、第6次調査は、平成2年5月である。なお南確認調査区域における第7次調査による遺構については、その調査の担当者に依って別途に報告されることであろう。また、第1次確認調査で確実となった八幡山古墳は、図示した如く遺跡内の最も北側に位置している。この古墳に関しては別途に測量調査を終え報告書が刊行されている〔甘粕1992〕。



第8図 調査区域及び主要遺構位置概念図

●印 住居址 (■)印 環濠

2 調査体制

発掘調査体制は次の通りである。但し昭和63年8月2日、「金津丘陵埋蔵文化財発掘調査団」が設置された。この調査団に見る調査員、調査補助員等は、それぞれ開発地域内の各遺跡を分担したものであり、八幡山遺跡は例言に明示した通りである。

昭和63年度 金津丘陵埋蔵文化財発掘調査体制

団 長	川 瀬 絳 夫	(教 育 長)
副 団 長	大 塚 克 夫	(県文化行政課長)
”	斎 藤 勇	(社会教育委員)
”	真 柄 慎 平	(文化財審議会委員長)
”	小 川 重 蔵	(文化財審議会委員)
理 事	榎 本 英 一	(教 育 次 長)
”	伊 藤 敏 男	(総 務 課 長)
”	中 村 博	(企画調整課長)
”	石 川 昇	(財 政 課 長)
”	黒 井 三 夫	(建 設 課 長)
顧 問	中 島 栄 一	(県文化行政課副参事)
”	木 村 宗 文	(県立中央高校教諭)
主任調査員	川 上 貞 雄	(日本考古学協会会員)
調 査 員	渡 辺 朋 和	
”	伊与部 倫 夫	
調査補助員	荒 木 繁 雄	
”	杉 本 恵 子	
”	田 中 順 子	
事務局長	湯 田 幸 永	(社会教育課長)
事務局員	田 中 均	(社会教育課長補佐)
”	榎 本 泰 伸	(”)
”	長谷川 勇 一	(社会教育課係長)
”	上 沼 茂	(社会教育課主任)
”	大 杉 克 行	(社会教育課主事)
”	山 口 啓 介	(建設課参事)
”	石 井 通 夫	(企画調整課長補佐)
”	砂 原 一	(財政課長補佐)

平成2年度 金津丘陵埋蔵文化財発掘調査体制

団 長	川 瀬 毅 夫	(教 育 長)
副 団 長	奥 村 隆 男	(社会教育委員議長)
“	真 柄 慎 平	(文化財審議会委員長)
“	小 川 重 蔵	(文化財審議会委員)
理 事	古 川 富士男	(教 育 次 長)
“	榎 本 英 一	(総 務 課 長)
“	中 村 博	(企画調整課長)
“	赤 塚 誠 也	(財 政 課 長)
“	黒 井 三 夫	(建 設 課 長)
顧 問	乙 益 重 隆	(国学院大学名誉教授)
“	大 島 圭 己	(県文化行政課長)
“	中 島 栄 一	(県文化行政課副参事)
	木 村 宗 文	(県立中央高校教諭)
主任調査員	川 上 貞 雄	(日本考古学協会会員)
調 査 員	渡 辺 朋 和	
“	小 田 由美子	
調査補助員	杉 本 恵 子	
“	佐 藤 友 子	
事務局長	阿 部 忠 夫	(社会教育課長)
事務局員	田 中 均	(社会教育課長補佐)
“	保 科 正 旭	(社会教育課長補佐)
“	石 崎 義 郎	(社会教育課係長)
“	上 沼 茂	(社会教育課主任)
“	山 本 英 二	(社会教育課主事)
“	阿 達 哲 二	(社会教育課技士)
“	中 村 昭 吉	(能代川・国道整備対策室)
“	榎 本 泰 伸	(企画調整課長補佐)
“	宮 崎 敏 彦	(財政課長補佐)

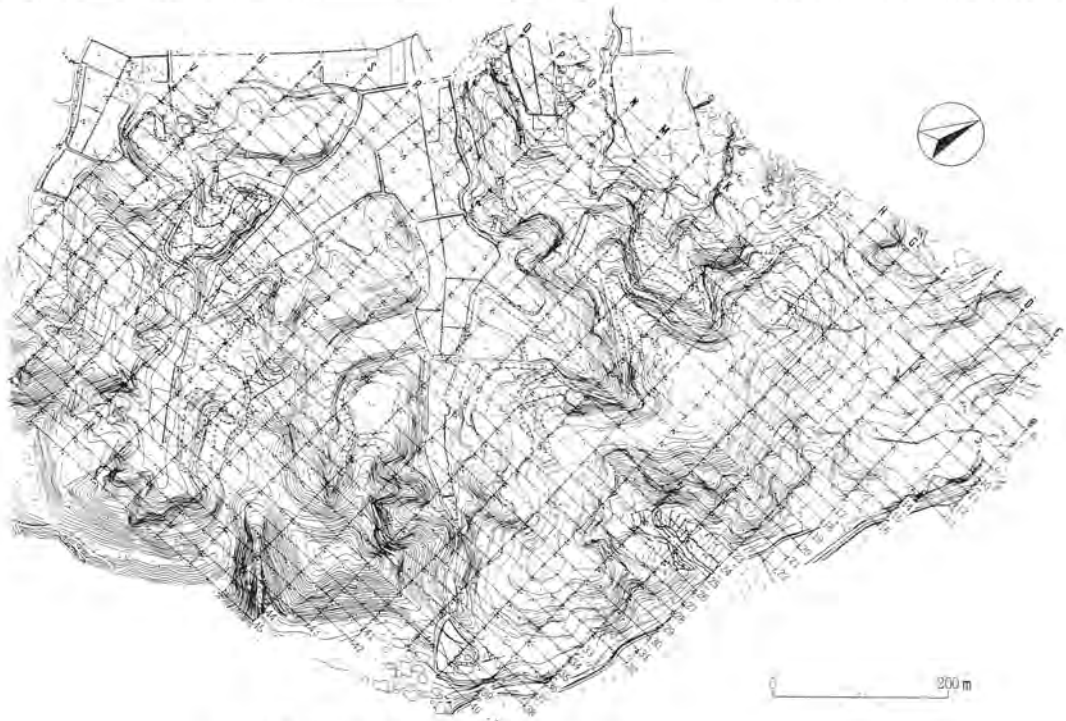
3 調査の方法と経過

A. グリッドの設定と調査位置

八幡山遺跡を含む開発予定地は、古津の廣大寺裏から金津の高厳寺裏山にかけての丘陵部のほぼ全てである。この地域は、すでに開発者側によって綿密な測量が繰り返されており、東西50m、南北20mピッチのメッシュが組まれ、その全域に打杭が施されている。八幡山遺跡での調査の基準は、このメッシュをそのまま利用することにし、これを「大グリッド」と呼称する（第9図参照）。

この大グリッドは、八幡山古墳上に施設されている三角点を基準とし、N21Wを短軸の20mピッチで北から南へ1～45区、東西（N69度E）の長軸50mピッチで東から西へB～V区を設定している。そして三角点上はH-10杭が当たる。調査では、杭の西南区域をそれに当てはめ、例えばH-10区とした。この50×20mの大グリッドをさらに5×5mの40グリッドに細分し「小グリッド」とした（第11図中央下部参照）。

第11図に参考として図示した如く、小グリッドの数は東から西へ1～10、北から南へ1～30台へと進む。従って●印はG-26-24区となる。一方、第10図に示した北確認調査区域は、トレンチ形式の調査上、その地形的関係から、前記の小グリッドの設定が不都合であり、地形に合わせた任意の5m×5mグリッドを設定した。この設定に当たっては、三角点から延びるH-16号杭



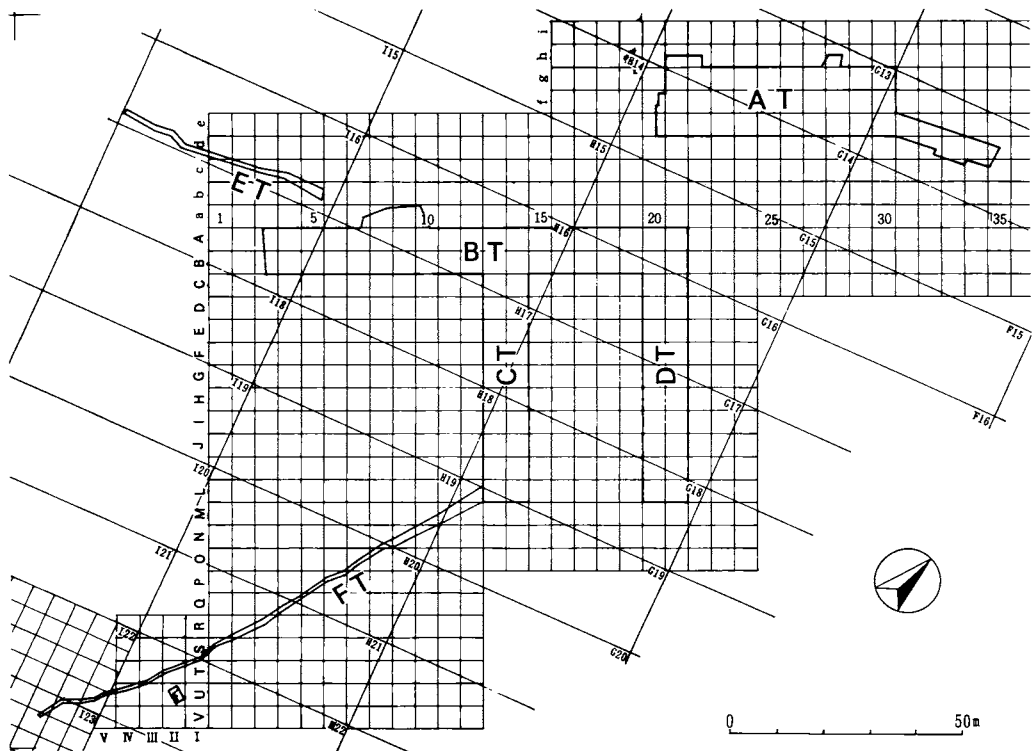
第9図 開発予定地域内地形実測図

を基点にし、N45度Wの方角で、南側へA～V、北側へa～iとし、西から東へ1～36区を設けた。また基点としたH-16号杭西側区を16番としたため、一部（第10図左下部分）にマイナスが発生し、I～Vのローマ数字を用いて示した。

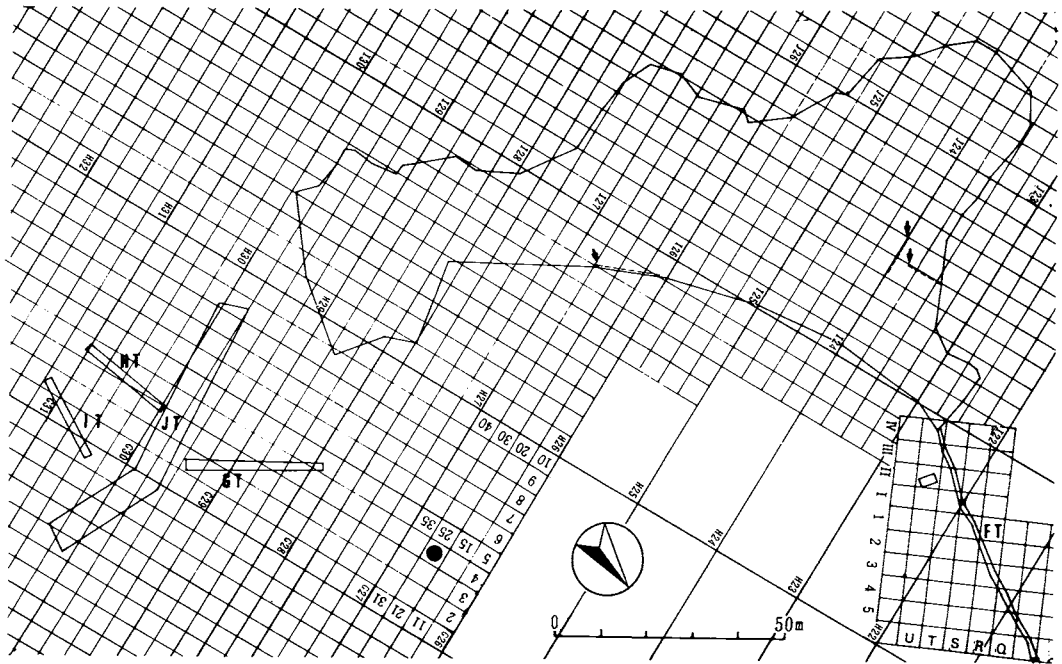
南調査区域は、全面発掘調査を行うことであり、問題はないが、北調査区域は、遺跡の性格及び範囲のより正確な把握を目的とするものであった。従ってトレンチ調査を行うことになるが、より効果の結果を見るために、最大限の幅員で調査することにし、第10図にAT、BT、CT、DTで示した4ヶ所のトレンチ状の調査区と、その後の補足調査のために入れたET、FT、F'のトレンチを設けて調査した。

ATは、e-21～30、g-21～30区の15×50mと、e-30区より東へ19度振ってc-35区に至る間の5×22mとした。調査の結果、4ヶ所で拡幅調査を行った。拡幅部分を含めての面積は917平方mである。ここは全体に東向きの斜面であり、f-24に中心を持つ舌状の張り出し部分を目指し、大グリットの基本杭G-13の道路までを選び、用地の都合上、北東向にトレンチを延ばした。d-35区から上部のe-21区の比高は13mを測る。

BTは、A-3～21、B-3～21区内の10×93mと、一部拡幅調査部分があり、面積は1,027平方mである。後述するCT、DTと接している。BTはこの区域における山頂の頂点をB-11区に置き、南西に緩い傾斜をなし、比高約4mを見、北東へは7mの比高がある。



第10図 北区グリッド設定及び発掘調査範囲図



第11図 南区グリット設定及び発掘調査範囲図

CTはBTより直角に南東に延び、その位置はC-13・14～L-13・14区で、10×50mの500平方mである。山頂の平坦部に主眼を置くもので、ほぼ最高地点から南東へ2.5m程の比高がある。

DTはCTの北東側の下段に平行する。この位置はC-20・21～L-20・21区で500平方mである。CTより約マイナス4mの比高を見る。この幅員10m内で2.5mの比高がある。

ET、FTは、この調査区域のグリットに従うものではなく、樹木の隙間を任意に掘削したものである。ETは山頂から西へ延びる瘦尾根を幅2m、長さ47mの94平方mを調査した。ここは緩い西向きの傾斜地で比高7mを測る。FTは頂部の平坦部から西へ延びる瘦尾根である。CTの端部から幅2～1mで、南地区の平坦部に入るまでの108m掘削し、その面積は約135平方mである。L-12区のトレンチの始まりより、南地区に入ったトレンチの末端部までは比高5mの南下りの地形を呈している。この補助調査としてF'をU-II区へ入れた。

南区域は第11図に示した枠内を全面調査した。この面積は約6,025平方mである。

南東確認調査区域はGT～JTを地形に合わせて任意に設定した。バックホーによる表土剥ぎを行ったが、I-2に記述した如く私共で調査は出来なかった。

B 調査の進め方

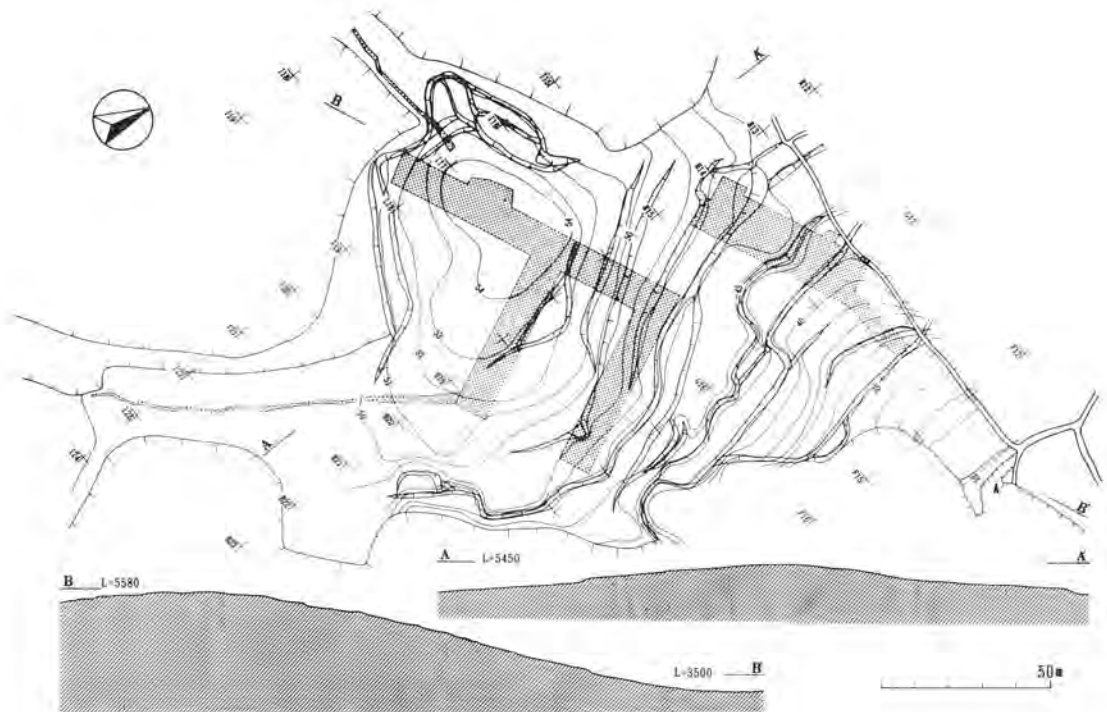
北区域は山林で、樹齢70年程の杉林である。調査に先行して伐採・搬出が進められていたが、調査予定日までに搬出作業が終了しなかった。合わせて枝や残材の焼却処分もその場で行われていた。

調査はトレンチの設定、バックホーによる表土の削平に始まり、地形測量（第12図）を行った。発掘作業はA T、B T、D T、C Tの順に進められ、排土は全て一輪車で搬出した。

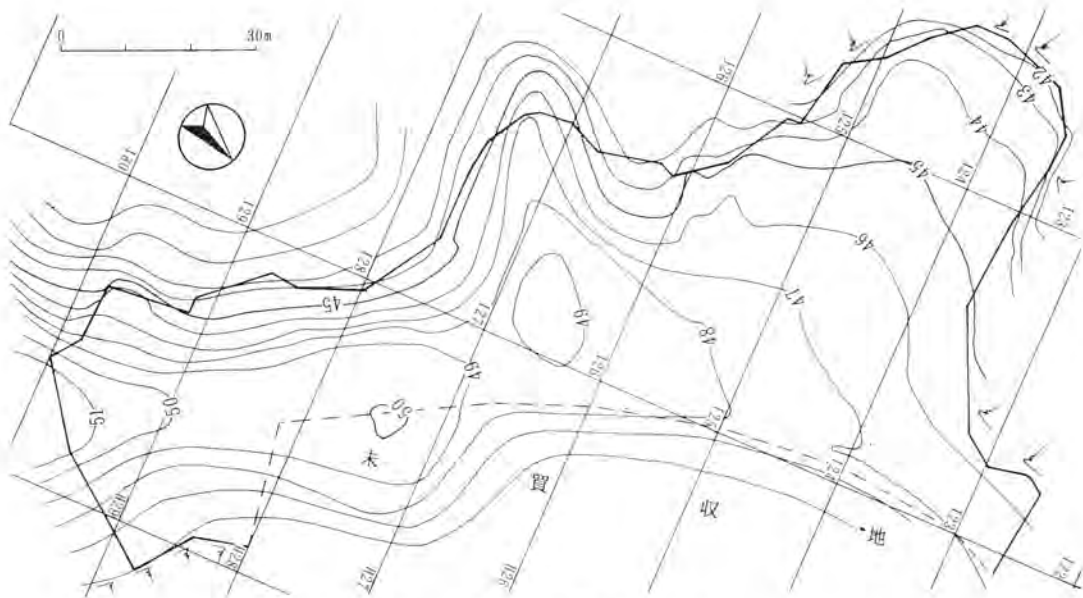
南区域の内、北側半分の柿団地部分は木根を残すのみで整然とされていた。南半分は杉と雑木の混生林だったが、残材を多く残していた。発掘に先行して、バックホーによる清掃及び表土剥ぎを行った。その後小グリットの設定、地形測量（第13図）を行った。発掘作業は北側から南側に向かって順次進め、排土にはベルトコンベアを主として用いた。

C 地形測量より

北区域は地形測量の結果、山頂部の最高地点の標高は54.86mであり、やや広い平坦部を持つ。頂部より北側は尾根状に、平均7度の勾配で下り、古墳に至る。南側はほぼ同様の勾配で120mの広がりを見、その先は崖となる。やや西寄りに瘦尾根が延びる。東側はほぼ全体に階段状のテラスを作り出し、平均10度の勾配で下がる。これらのテラスは昔時の畑の痕跡と認められ、斜面の一部を削って前面に盛土を行い、大方はこの盛土の先端部に垣根状に杉並木がある。この東側の端部は、全面が崖状を呈している。そして山頂部と最低部との比高は25mを測る。西側は中央部に幅10m程の細い尾根が延びる。その先端部は過去の柿団地造成によって切断されて、その全長は35m、山頂部よりは76mを測る。また頂部との比高は7mを測る。この尾根以外は全体に急斜面で、北西及び南西が沢になって入り込んでいる。北東に位置する小路以北の測量は実施してい



第12図 北区調査区域内地形実測図



第13図 南区調査区域内地形実測図

ない。この範囲における遺跡推定面積は約20,430平方mであり、遺跡はなお北方へ続く。北側は古墳の円を取り囲む如く、東及び北側へ円を画いて徐々に高度を下げる。

南区は大グリット I-22 から H-29 に至る 6.025 平方 m である。これは北東側の嶺線に沿った未買収地の西側、南西、南東部に当たる。北区域とは平坦な尾根で続いているが、未買収地の北東側及び西、南西、南側共に断崖を呈し、南東及び南南東に山麓が続いている。

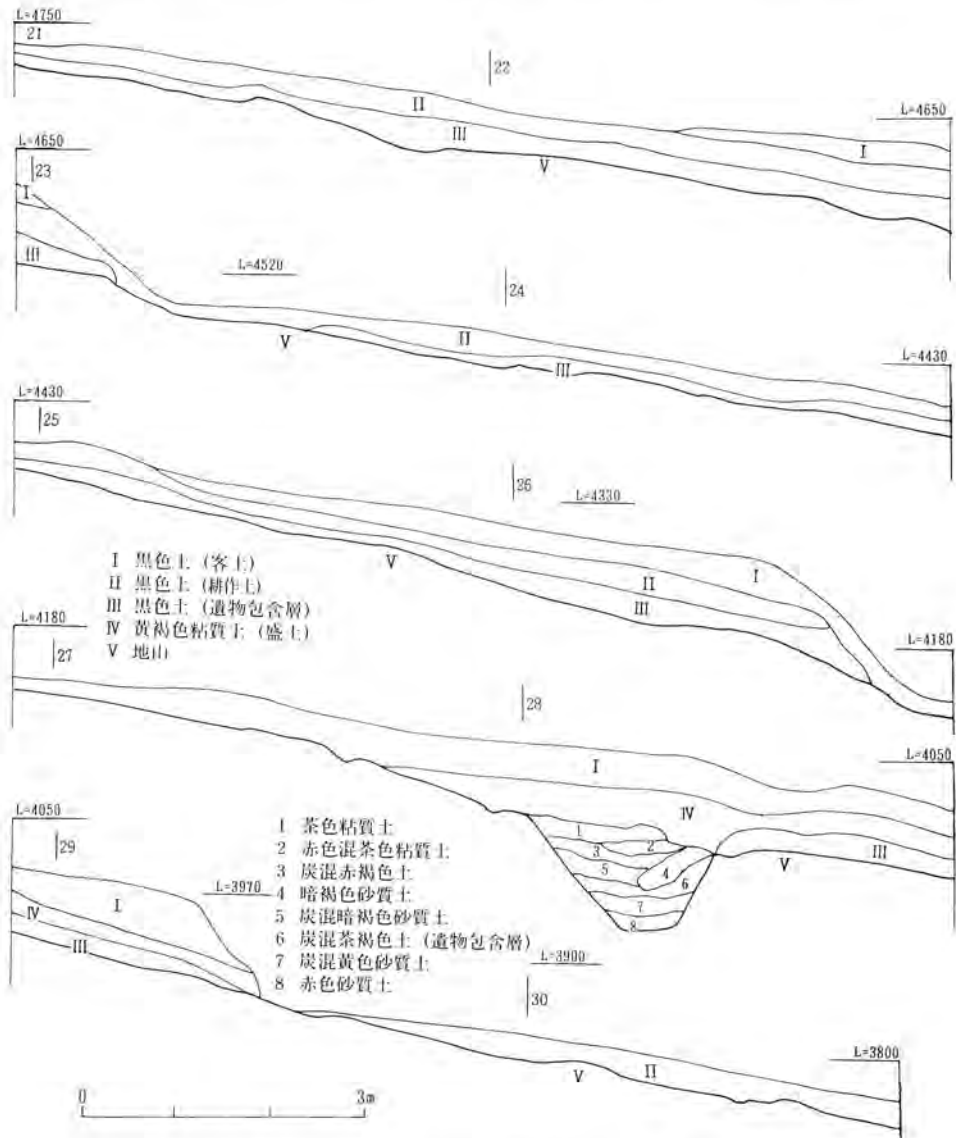
南区を大きく 3 分することが出来、それぞれの地形を記録して置く。1 は I-23、24、J-24 区で代表される部分で、西向きに舌状台地として広がり、5～6 m の比高を測る平坦地である。果樹園として造成され、削平された様子が認められた。2 は I-25 区の南半から I-26 区の尾根上の平坦部である。頂部より南南西に延びる小さな尾根状を呈し、左右より沢がせまる。この頂部の東側よりも沢がせまり、南区全体の広がり、ここで終了する。3 は H-28 区東側半分である。尾根上から北北東向きのやや急な斜面で、調査地点以東は断崖である。2 から 3 への接点は平坦な瘦尾根である。この尾根は調査区域の最短部分より 50 m 程で、最高地点の標高 53 m をもって一塊を終える。



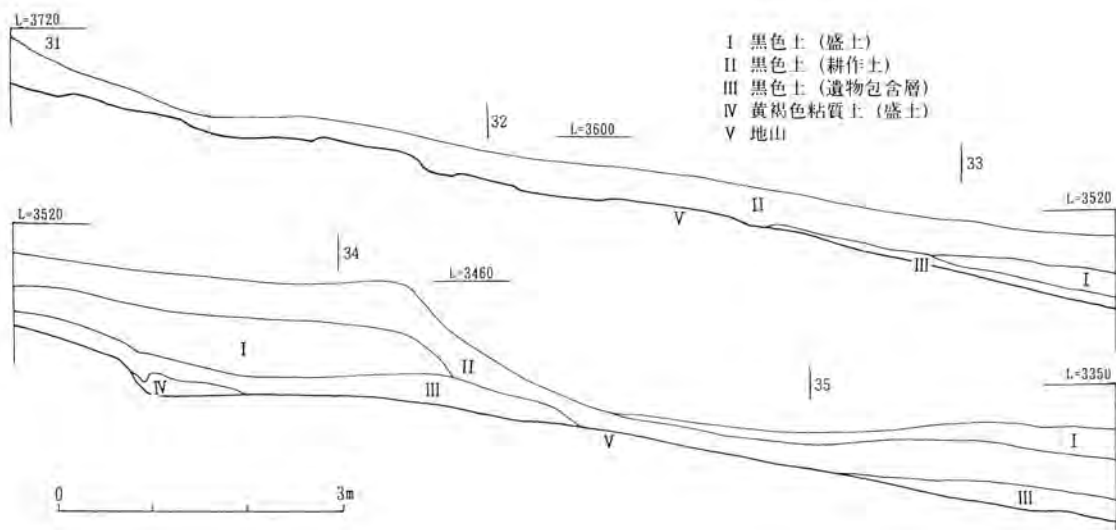
第14図 南区遺構・遺物出土範囲図

D 遺跡の層序

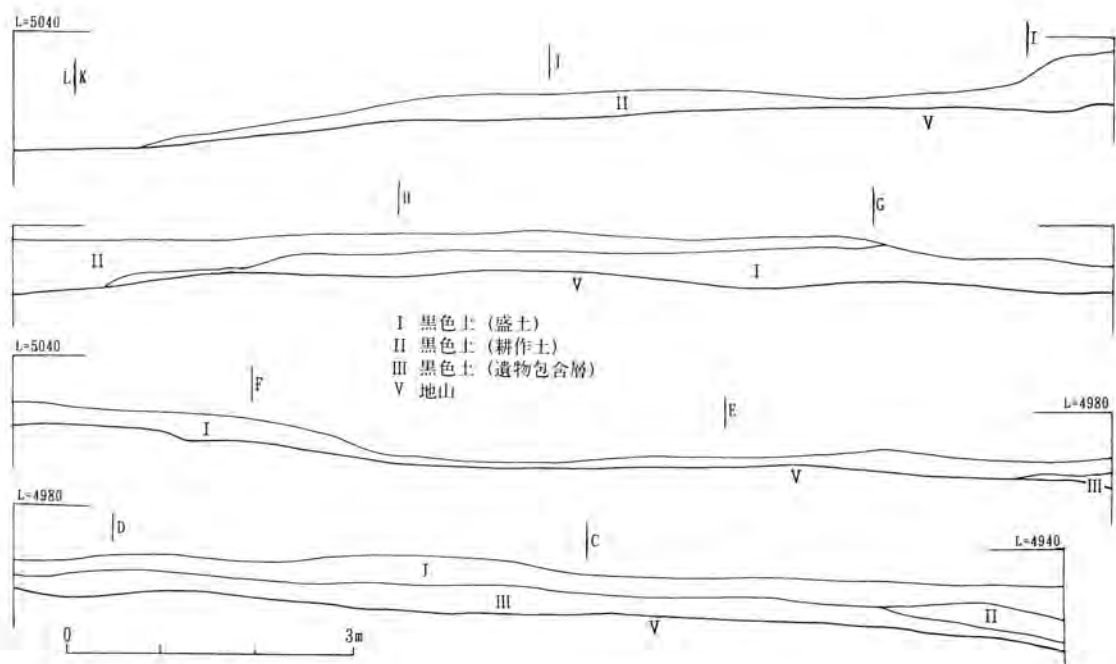
北区域は、昔時に段切りによる畑地に造成され、大正末期頃には山林化したと言われている土地であるが、遺跡の土層序列は比較的単純である。第15図はA T北西側でh-21区からh-30区に至る土層である。土層は全体に黒色土であるが綿密な分類からⅠ～Ⅲに分けることが出来る。このうち、Ⅰ、Ⅱ共に風化が見られる。強いて分別すれば、Ⅱは耕作土と推定され、Ⅰは耕作土であると共に表土の流失による堆積土や腐植土を含むものである。Ⅲは遺物を包含する黒色土である。Ⅳは畑地としてのテラス造成時に深く切り取られた26区下部の地山や、28区にみられる溝



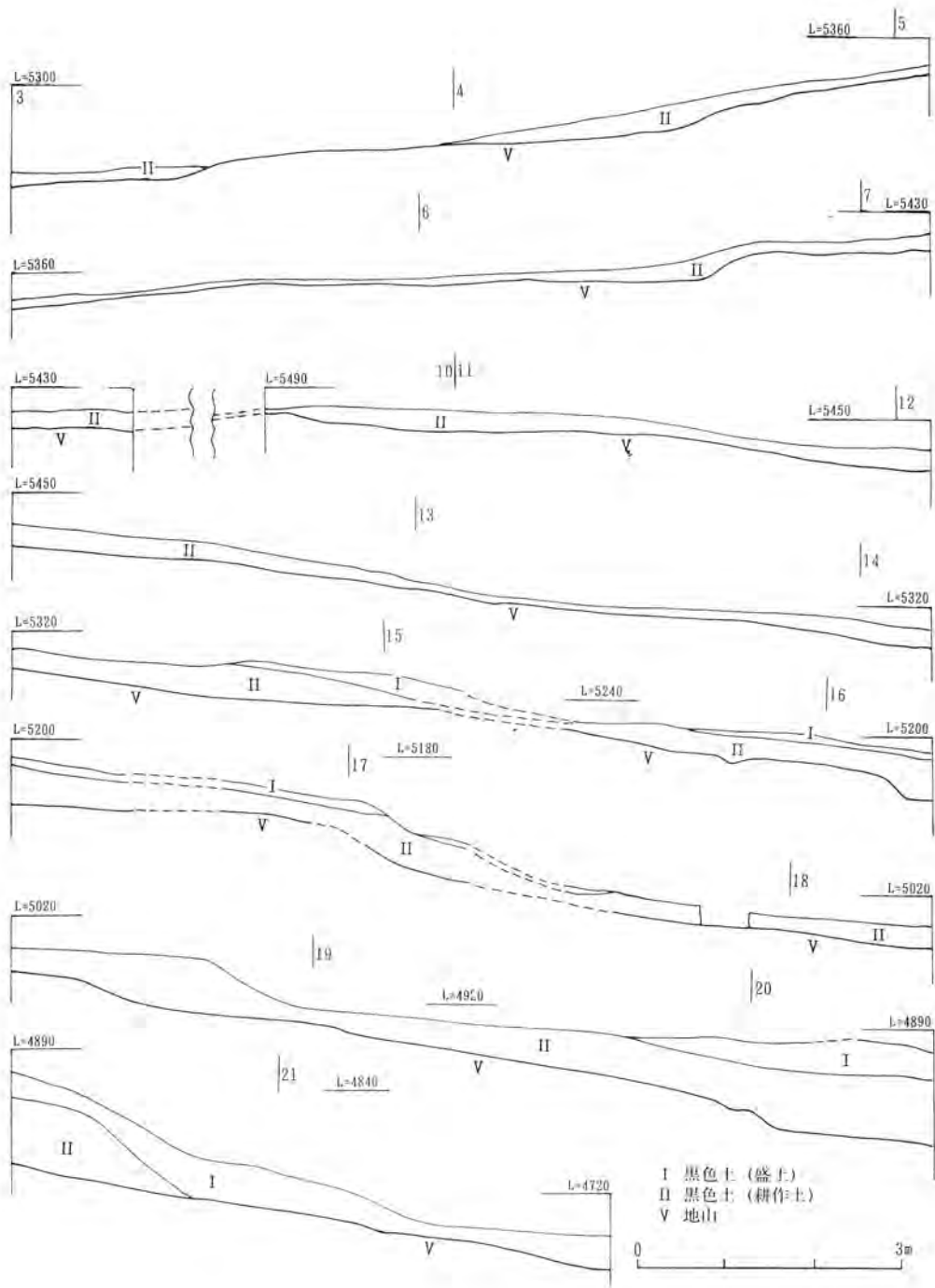
第15図 土層断面図Ⅰ (Aトレンチ北西壁)



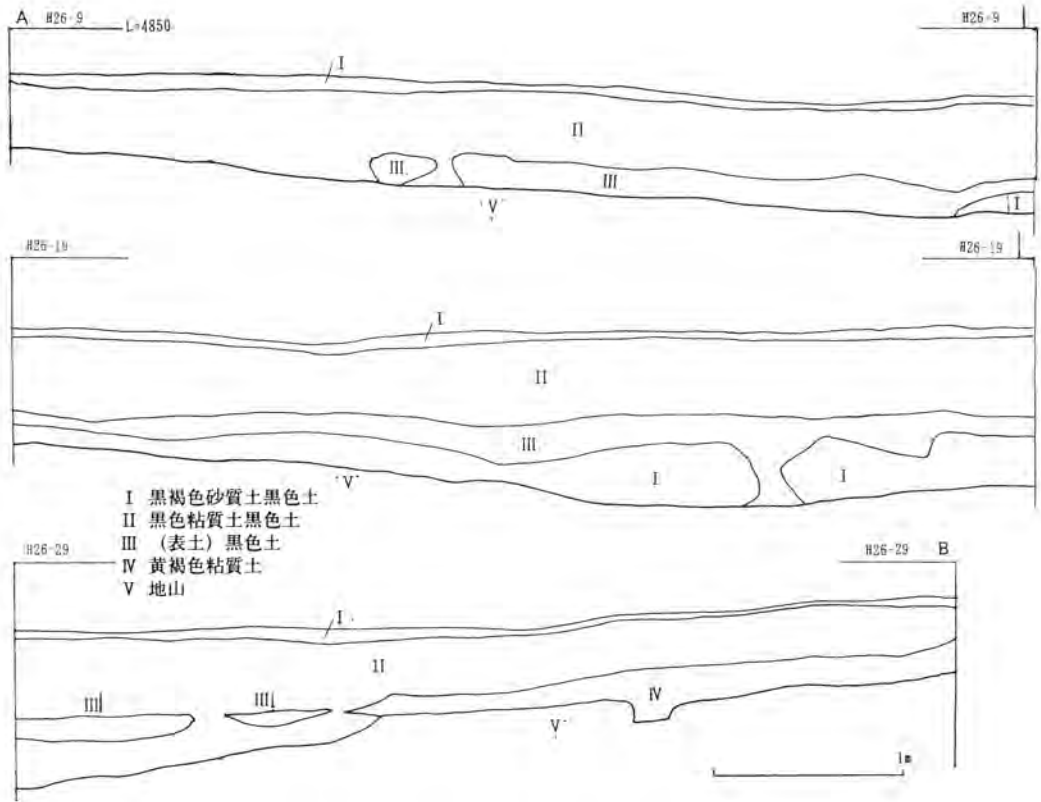
第16図 土層断面図II (Aトレンチ北壁)



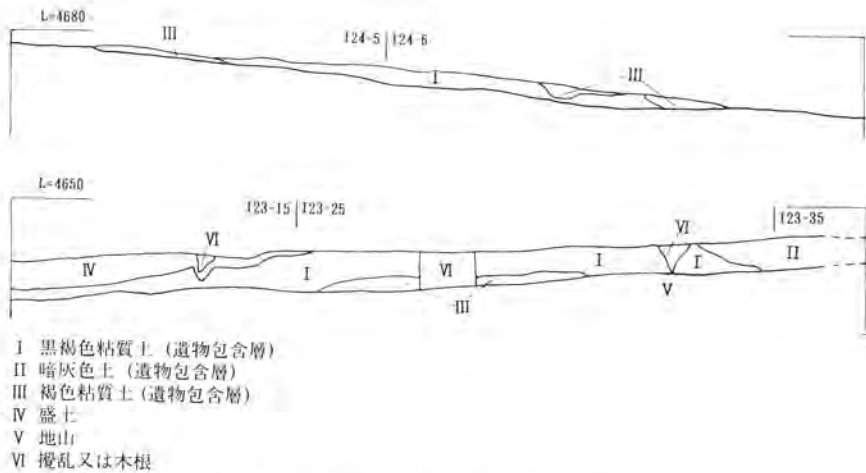
第18図 土層断面図IV (Dトレンチ西壁)



第17図 土層断面図Ⅲ (Bトレンチ北西壁)



第19图 土層断面图 V (南区H-26区東壁)



第20图 土層断面图 VI (H-23区)

(環濠)掘削土の流失物である。なお、溝内の土層については1～8に示した通りである。第16図は同じくA T北壁でe-31区～d-35区に至る断面である。この土層については、第15図と同様である。

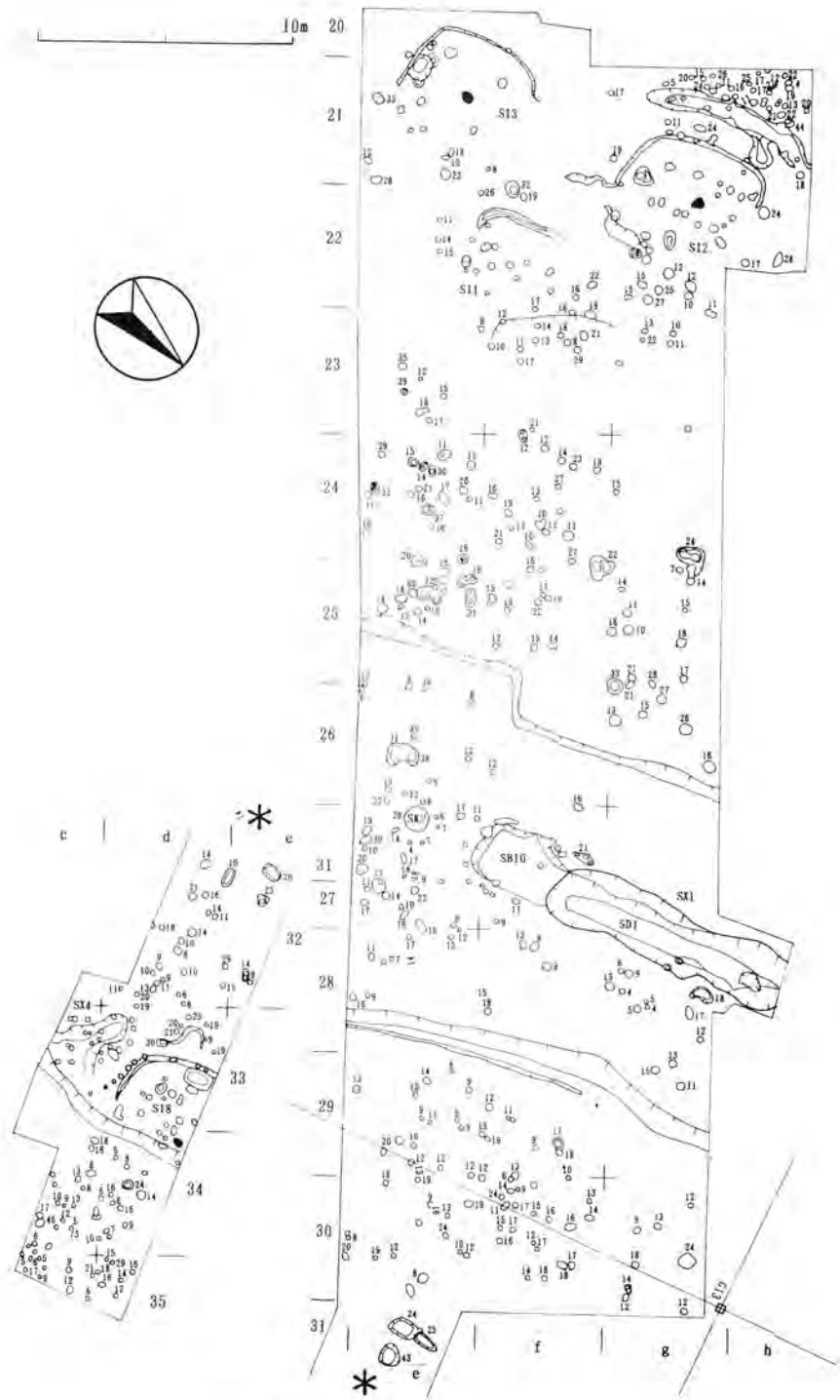
第17図は、北区域B Tの北西壁で、A-3からA-21区間であるが、一部拡張調査地の8、9区とその前後の一部分を除外している。土層は黒色土のI・IIに限られている。特に山頂部に位置する14区までは、耕作土と推定されるIIのみで、I及び遺物包含層であるIIIを見ない。また3区の一部は直接地山が地層となっている。これらのことは、この山頂部分が、かなり削平されたものであることを物語っている。

第18図は北区域D Tの南南西側即ち、C-20区からL-20区に於ける断面である。第12図に見られる如く、造成の段切りに平行、又は交叉しているため、非常に単純な土層を呈している。

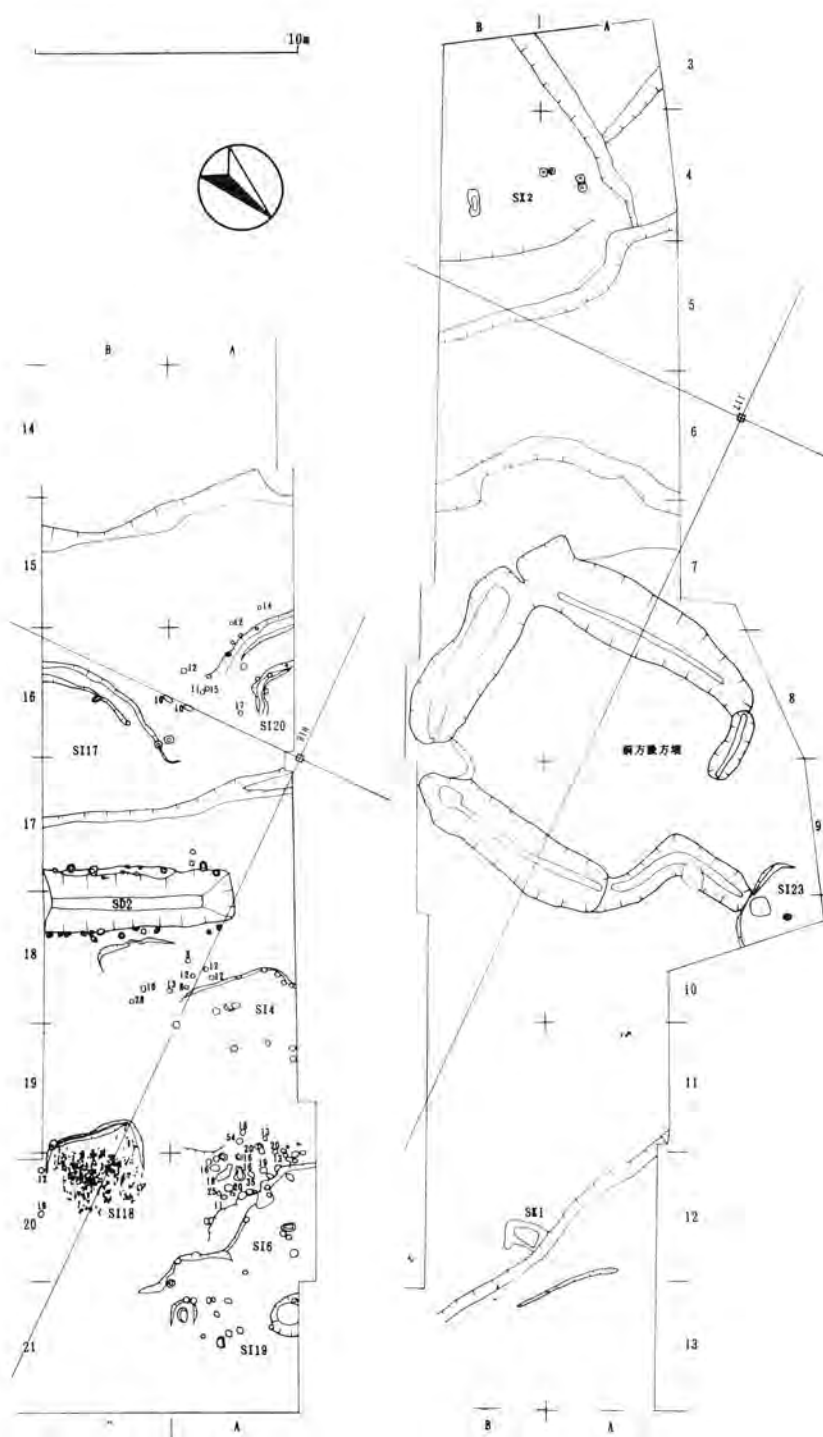
南区域の土層は各所で種々の様相を呈している。それは第14図に示したA～Dによって異なるものであったが、調査中断のため、全体を把握していない。なお、北区域における土層の表示とは異なる。

第19図に示した土層は、H-26に於ける区域で、稜線より10m程北北東に下がった地点の山林部分で、H-26-9～39区に至るものである(第28図に矢印で示した)。沢の上部に当たるため腐植土が90cmと厚い部分がある。地山に近く、ごく少量の遺物を見るが、包含層と言える程の土層ではない。

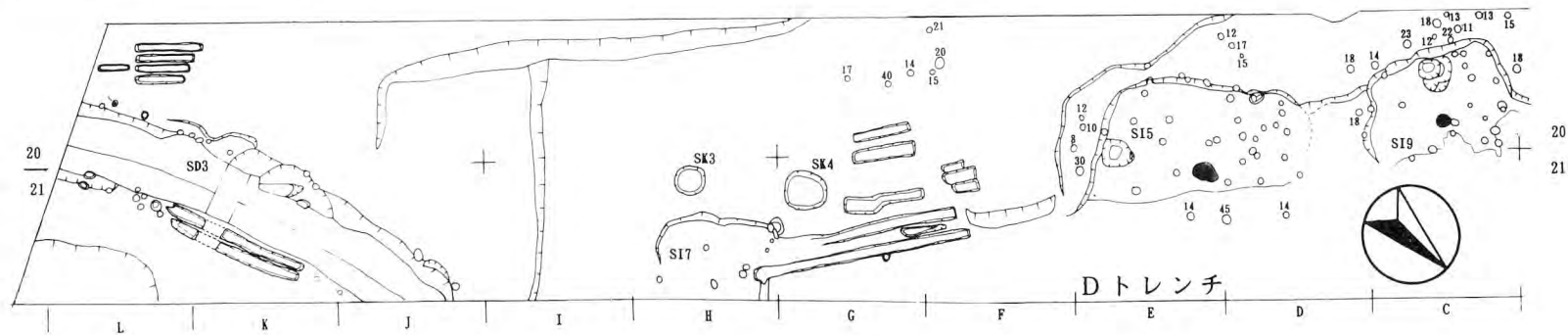
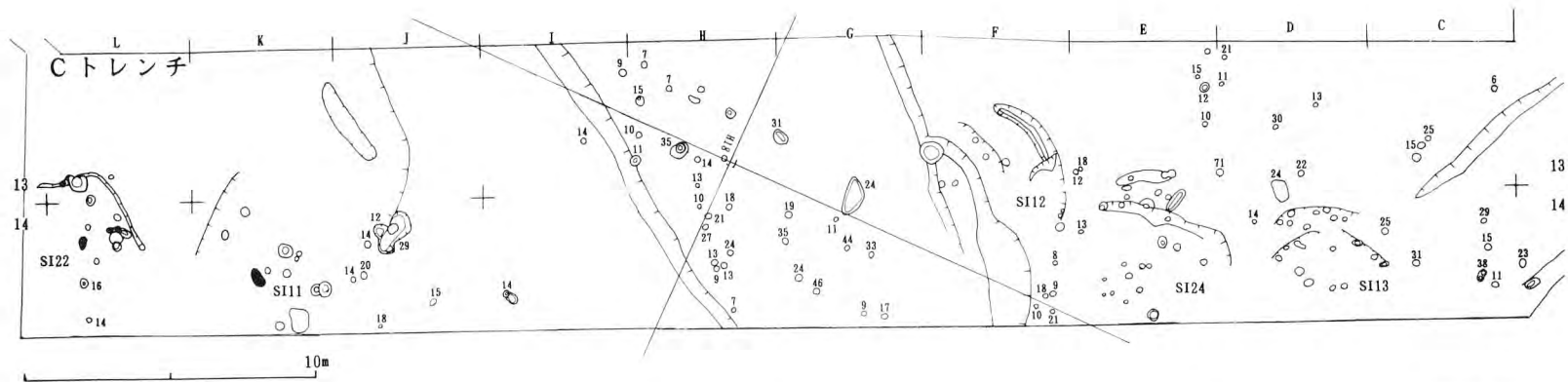
第20図の上段は、I-24-5～6区と、下段はI-23-15～35区の一部である。第11図に矢印で示した様に、接続はしていないがT字状に近い位置関係にある。双方とも果樹畑であり、前者は台地の端部に近く包含層を止めているが、後者は住居址に接続する地点とは言え、その殆どが攪乱層であることが分かる。その他記録に取っていないが、I-24区に中心をおく果樹畑の大部分は、地山の表面を30cm程削平されており、30～40cmの耕作土が覆っている。またここには造成時点の巨大なゴミ穴が2ヶ所にあった。第14図にCで示した地点は瘦地の山林で、わずかの表土を残すのみであったが、Bに示した北北東向きの斜面は厚い腐植土を残し、一部に遺物包含層を認めることが出来た。



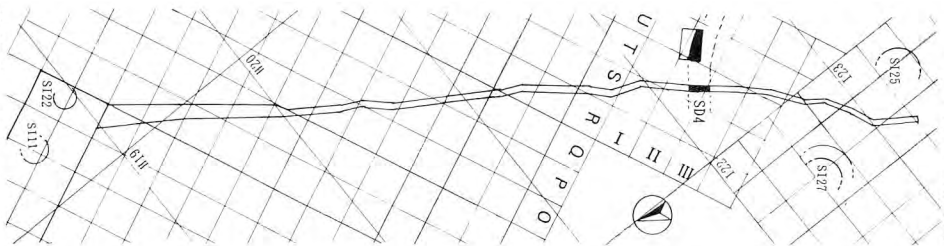
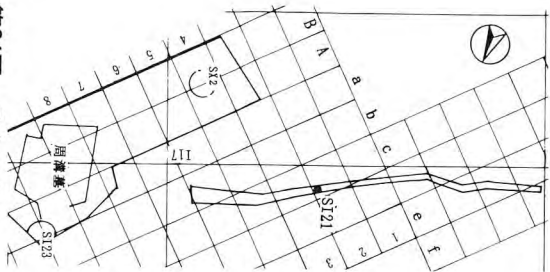
第21図 遺構全測図 I (Aトレンチ)



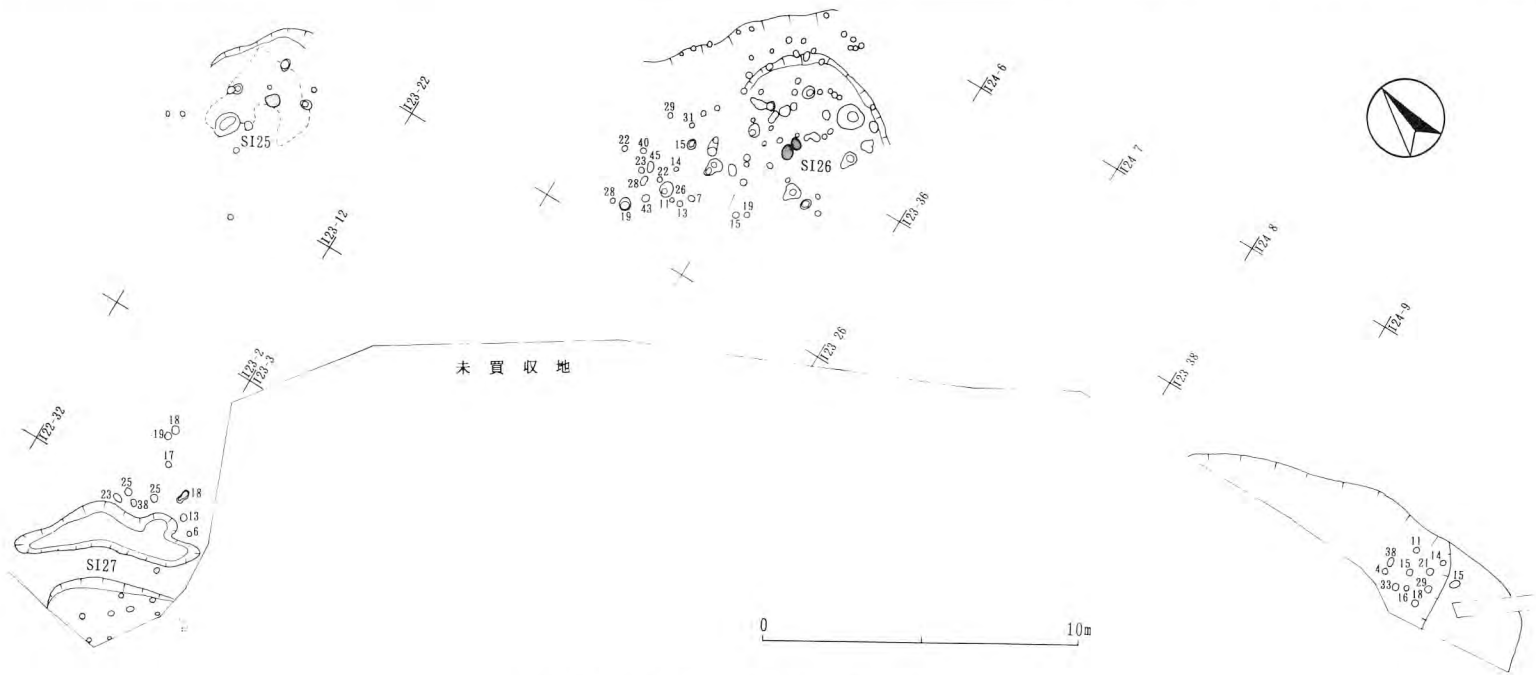
第22図 遺構全測図II (Bトレンチ)



第23図 遺構全測図Ⅲ (C・Dトレンチ)



第25図 Fトレンチ
S D 4号環濠位置図

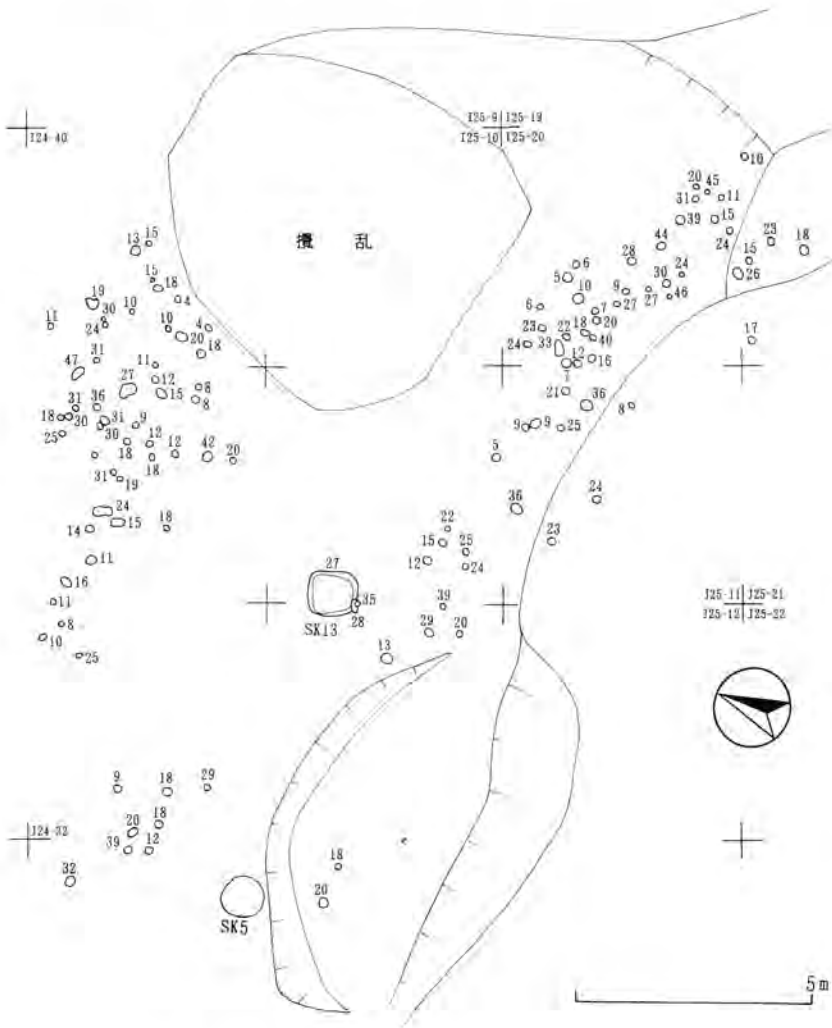


第26図 遺構全測図Ⅳ (南区 I-23区域)

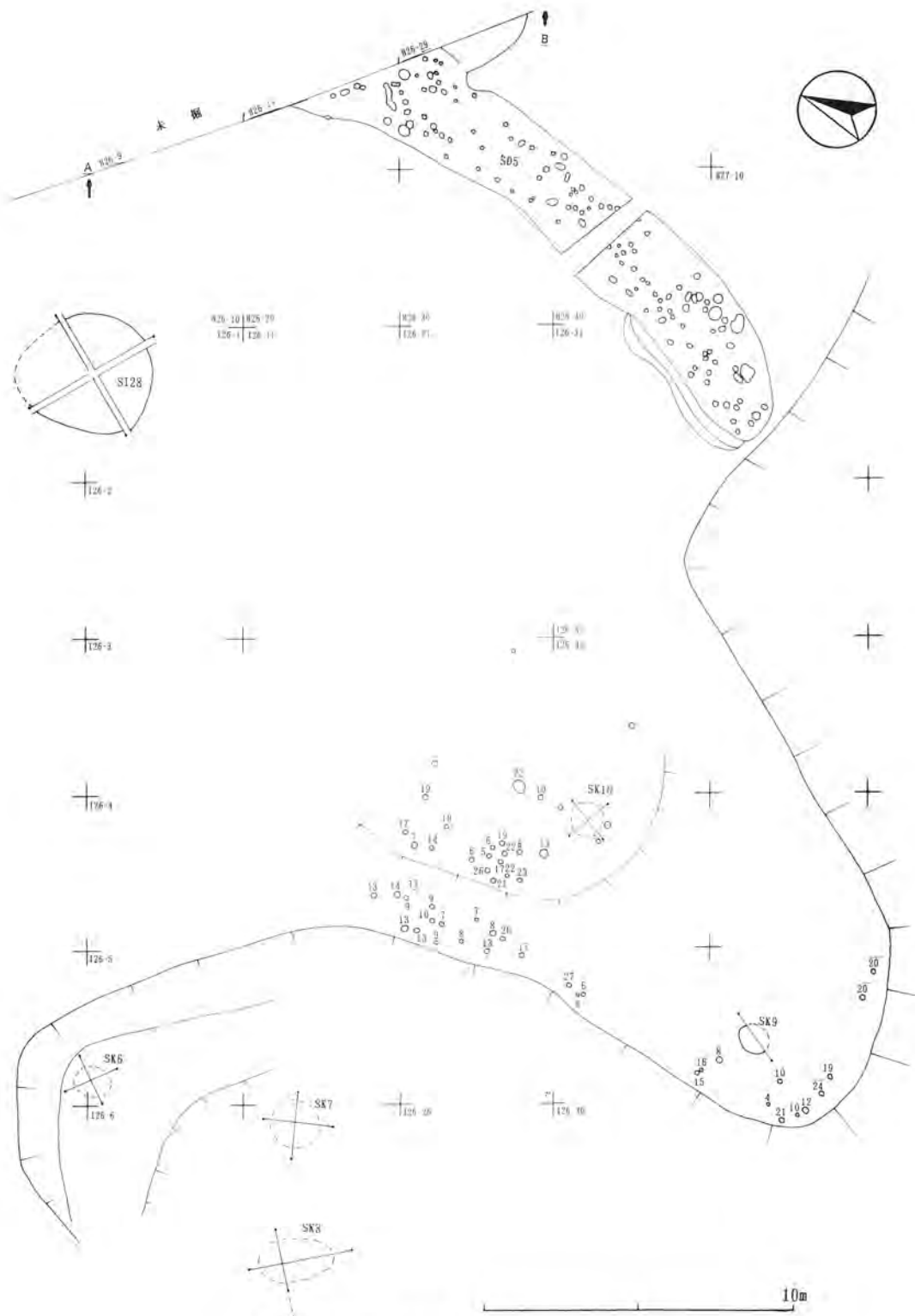
IV 遺 構

1 遺構の概要

これまでの調査に於いて、八幡山遺跡の大まかな遺構とその配置等を知ることが出来た。発見された遺構は、弥生時代の後期前半から後半に於ける住居址30基、その他の建物址2基、V字状の断面を呈する環濠は、それぞれ断片的な検出だが5ヶ所で調査された。北区域に於ける環濠は、



第27図 遺構全測図V (南区J-24・25区域)

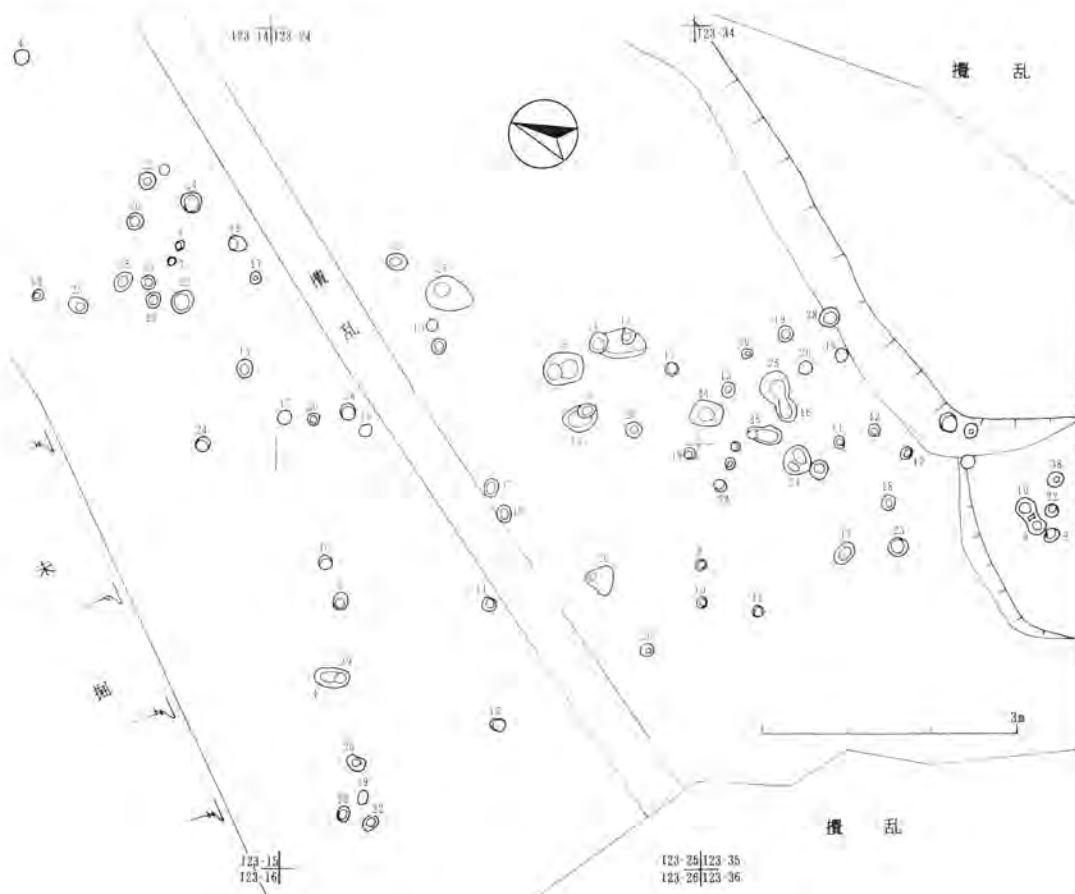


第28図 遺構全測図Ⅵ (南区H-26・I-26区域)

東斜面に3ヶ所で検出され、これらは2重に設置されたことが分かり、さらに周囲の踏査によって環濠と推定される地形が2ヶ所で発見され（第6図中にA・Bで示した地点）、3重の環濠を要していたものと考えられる。また南区域での濠は環状にはならないが、北区域及び南東区域に接続する尾根を断ち切るものであった。南区域は中心部の大部分が柿畑造成事業によって削平され、遺構数は僅かであったが、検出された住居址の配置から察して多数の遺構が存在していたものと推定される。南東区域では五基の住居址が報告されている。いずれにせよ北区域が当集落の中心をなすものであろう。そしてこれら山頂に営まれた集落を「高地性集落」と称し、さらに環濠などの防禦施設を要することから「高地性環濠集落」と呼ばれている。

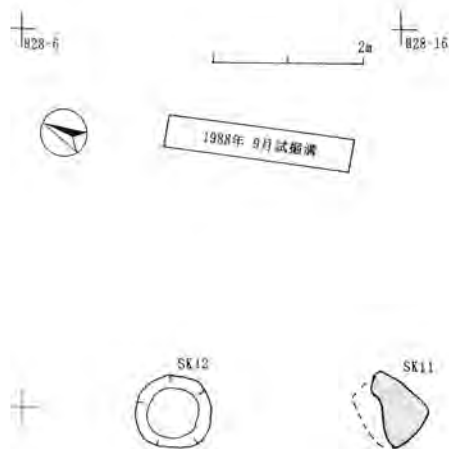
北区域の山頂に前方後方墳が検出されている。これは弥生時代終末期を廻り得ないものであることから、八幡山高地性集落廃絶後の造営と考えられるものである。さらに八幡山古墳（円墳）も合わせて一連の系譜の上で考えられるものである。

また北区域、南区域から奈良時代と推定される居住と考えられる遺構と、時代を特定出来ない焼土坑遺構などが検出された。



第29図 遺構全測図Ⅶ（南区1-23区域上層部）

これら遺構の全容や位置関係については、第20～27図の遺構全測図及び第28～30図の各遺構位置図に示し、また表1に示した。



第30図 SK11号・12号位置図

表1

北区域				
Aトレンチ	SD1号環濠	SI1～3・8号住居址	SB10号小型建物址	ピット群 SX1号土師遺構 SK2号焼土坑
Bトレンチ	SD2号環濠	SI4・6・17・18・19・20・23号住居址	前方後方墳	SX2号土師遺構 SK1号土坑
Cトレンチ	SI11・12・13・22・24号住居址	ピット群		
Dトレンチ	SD3号環濠	SI5・7・9号住居址	SK3・4号土坑	
Eトレンチ	SI21号住居址			
Fトレンチ	SD4号環濠			
南区域				
	SD5号環濠	SI25・26・27・28号住居址	ピット群 SK5・12・13号土坑	
	SX3号ピット群(土師)	SK6・7・8・9・10・11号焼土坑		

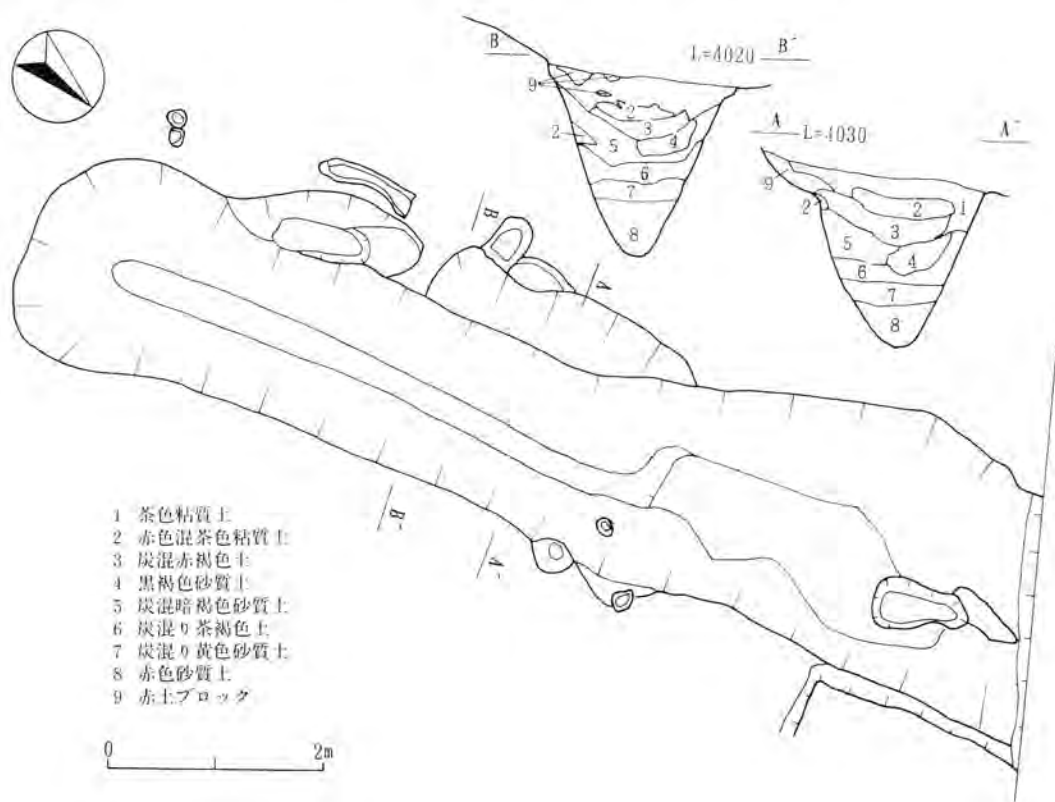
2 北区域と南区域の遺構

A 環 濠

集落を外敵から守るためにめぐらしたV字状の深い溝や堀を環濠と呼び、弥生時代に出現する。八幡山遺跡で検出された濠は、部分的な調査でその全容は不明であり、集落を環状にめぐらしたとは考えられないし、また尾根を断ち切った状態で直線で短いものがあるが、ここでは環濠の名称で呼ぶ。なお、発見順にSD1～5号環濠と呼ぶ。

SD1号環濠（第31図、図版5-1）

北区域Aトレンチf-27～h-28区にかけて検出した。f-27区のほぼ中央部に濠の端部を発見し、N22度Wと北向きに延びる。標高40.2mでここは山腹の東向き斜面の中間地点に位置し、検出できた長さは9.9mと少ないが、北下りに延びる。濠はV字形、一部逆梯形で、端部に向かってV字状を成し、深さをやや増す。濠の上幅は180～250cm、底部幅はV字状部分で15～20cm、



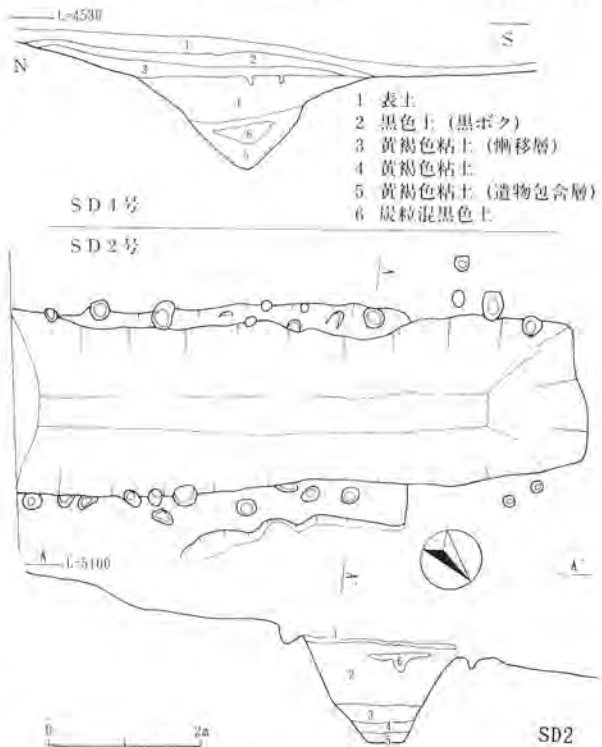
第31図 SD1号環濠平断面図

逆梯形部分で50~70cmを測る。深さは中心部分で170cm、谷側で150cm、山側は180cmを測る。この両側面の傾斜度は66~70度とほぼ均一である。発端部の上部は半円形を呈し、山側の上部には小規模なテラスが見られる。谷側の側面上部には3個のピットが見られるが、濠との関連はなく、第21図に示した如く、周囲のピット群に係わるものと考えられる。

発端部の南側はトレンチの端まで8m程を測り、この区域に連結する濠を見ない。通路と呼ぶには広すぎるが、一応その様と考えて置きたい。なお、濠の端部に接してSB10号とした小型の堅穴遺構がある。そこに柱穴や焼土などが検出されなかったが、一応小型建物遺構と考えて来た。しかしながら、あるいは濠の堀り掛けの一部とも考えることは出来る(第21図参照)。

濠の覆土は下方部分に見られる様に、赤色、黄色、茶褐色などの砂質土である。これはこの濠の母体である地山の土と考えられ、従って堀り揚げられた残土は山側で土壘状を成していたことが推測できる。なお、第31図に示した6、7層に少量の土器片が混入していた。

SD2号環濠(第32図、図版5-2・3) 北区域Bトレンチ、A-17・18区からB-17・18区へ延びる。SD1号と同様に濠の発端部に当たる部分の検出で、濠はN45度Wの方位を以て南東へ延びる。これは山頂の平坦部に近い東向き斜面にあり、濠は斜面に水平に設けられている。この標高は50.3mで、SD1号環濠より10mの高所にあたる。濠は逆梯形で、上部幅210~250cm、底幅は37~50cmを測り、深さは中心部で135~153cm、谷側は120~135cm、山側は160~170cmを測る。西側面の傾斜度は谷側がやや急で60~64度、山側は53~57度を測る。発端部の造りは上部、底部共に方形を呈し、特に底部は水平に造り出され、従って両脇が角張る。濠の上部には谷側、山側共にそれぞれ13個のピットが並ぶ。これは濠の上にさらに防禦柵、いわゆる逆茂木を組んだものであろう。内部の覆土はほぼ水平の堆積である。これはSD1号環濠の位置がやや急斜面なのに比べ、ここでは傾斜度は緩く、埋没に時間を要したことが知られる。検出範囲が7.5mと少ないが、各地層から高杯や器台を始めとする土器片が比較的多く検出された。また全容は不明だが、木製品の出土も見た。

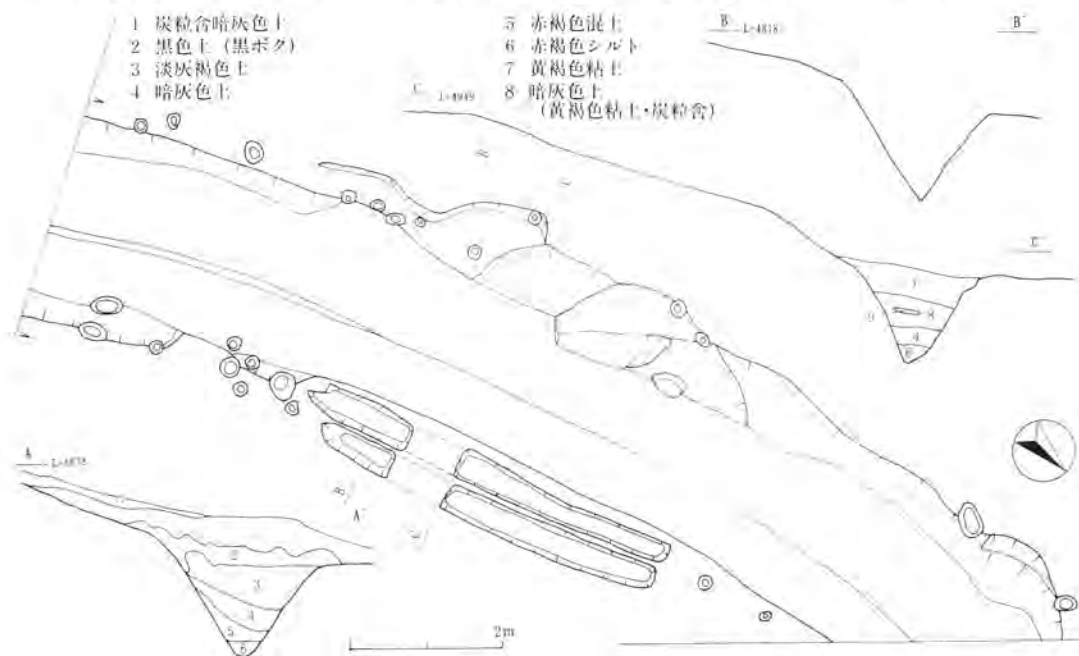


- 1 黒色土
- 2 暗灰色土
- 3 赤褐色粘土含暗灰色土
- 4 赤褐色粘土含黒色土
- 5 赤褐色シルト
- 6 炭粒混黒色土

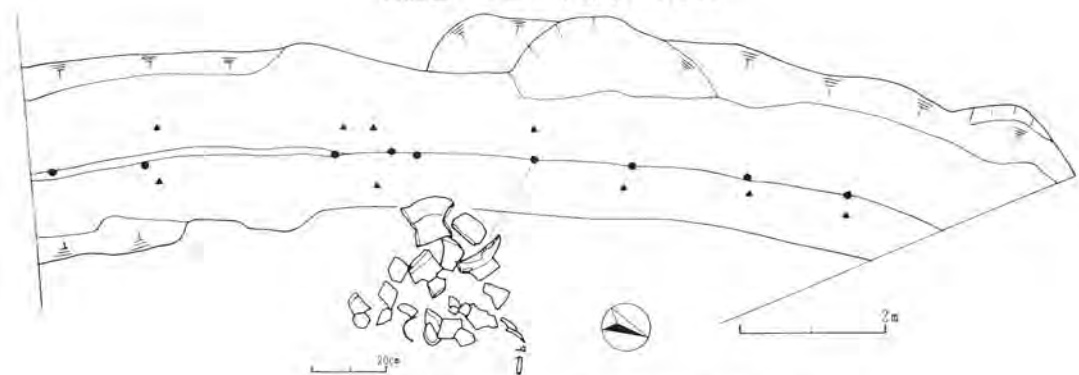
第32図 SD2号・4号環濠断面図

SD 3号環濠（第33図、図版6-1~4） 北区域Dトレンチ、J-21、K-21、L-20・21区に於いて検出した。濠はN22度Wと南北に延び、両端をトレンチの南及び東壁へ向かっている。やや急斜面が始まり出した部分に位置し、南側が高く、東側が高度を下けている。検出できた濠の全長は13mに過ぎないが、南側と東側で40cmの高低差を見る。そして谷側に向かって緩い弧を画いて延び、東側はSD 1号に向かっていると推測される。

濠の断面はV字状で南側の一部が僅かに狭い底部を有しているが、その幅は10~15cmに過ぎない。上幅は230~280cmを測り、深さは中心部で120~180cm、谷側で110~120cm、山側では140~160cmを測る。また第33図Bセクションに示した断面図に見られる如く、山側の自然の地形をも合わせると、その深さは2mとなる。側面の傾斜度は両側共ほぼ同じで、55~63度を測る。濠の上部の谷側、山側両方にピット列があり、SD 2号環濠同様に柵列が施されていたことが推測さ



第33図 SD 3号環濠平面断面図



第34図 SD 3号環濠内土器出土位置図

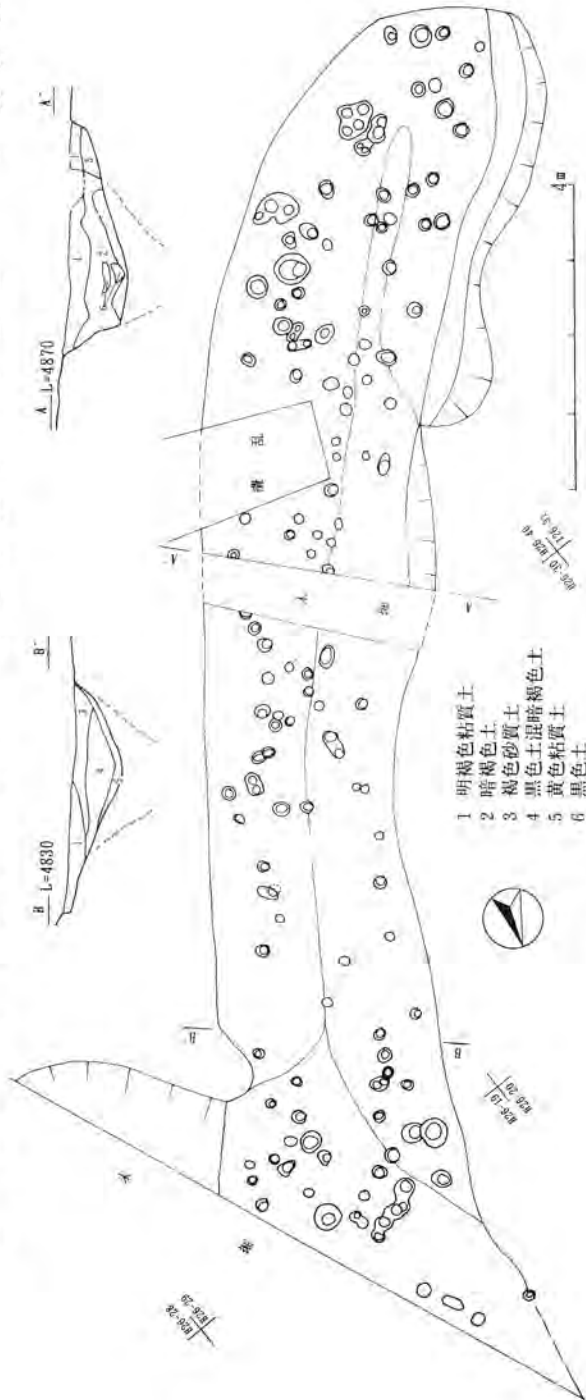
▲印 中間層 ●印 底部

れる。なお、第33図の平面図下側にある2条の溝は現代に於ける畑の畝跡である。

濠の覆土の内、A及びCセクションに示した土層の内、4と8は同質土であり、下層の3層は濠の堀り揚げた残土と考えられるものであり、山側に土塁状の残土が積まれたことが推測される。

この覆土の内、最下層部の上面に比較的安定した土器の出土を見た。土器の検出は少量であり、壺類が主体であった。出土状況を第34図に示した。

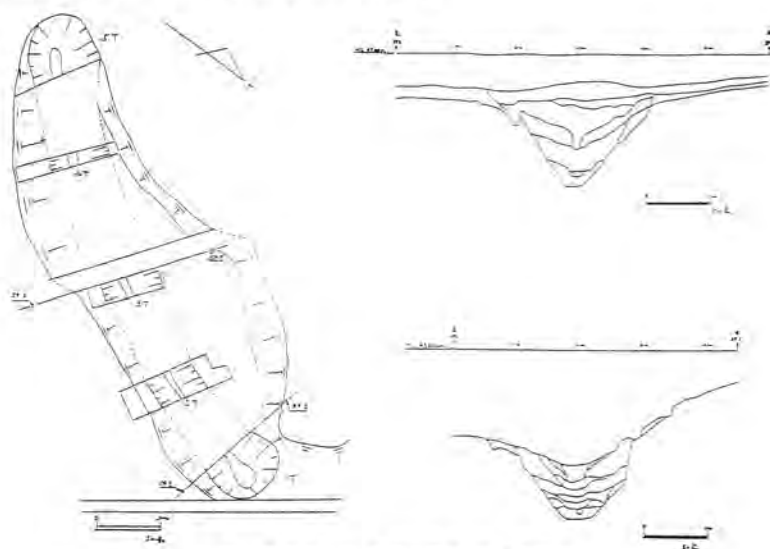
SD4号環濠（第32図、図版6-5・6）北区域と南区域を結ぶ瘦尾根上にあり、大グリットH-22内のT-IIに位置する（第25図参照）。検出できたのは樹間を縫って設定したFトレンチであり、瘦尾根の最も狭まった地点である。濠はこの尾根を切るものであり、Fトレンチは濠に対して直角に位置したため、幅120cmの検出に過ぎない。東側に樹木を避けたF'トレンチ内に側面の一部を検出した。その結果、大まかではあるがN65度Wの方角に延びると推測される。濠は第32図上部に示した断面図の如く平地上にあり、上幅450cm、深さ135cmで底部はV字状をなす。北側、南側（同図中でN・Sで示した）共に上部の流出が見られ初期の幅員は280~300cmと推定される。側壁の傾斜度は北側42度、南側52度を測る。この瘦尾根は18m程の幅であることから、濠の長さもこの範疇になろう。なお覆土の最下層に土器片が検出されている。



第35図 SD5号環濠上層部平面断面図

SD5号環濠（第35・36図、図版25参照） 南区域のほぼ中央部にあり、大グリットH-26区に主体部を置く。南区域の主体部と考えられる北西区と南東区域に接する東区域とを結ぶ瘦尾根上にあり、この尾根を切断するものである。SD5号環濠は第1章2-Eに記述した如く完掘していない。また私共の手でサブトレンチさえも入れることが出来なかったが、第35図に示した報告〔渡辺1990〕があるので参考にしたい。

遺構はN27度Eの方向にやや湾曲しながら延び、南端はI-27-1区の谷に面し、北端は東側の谷に接しているが、端部を把握出来ない内に掘削を終えた。これまでの濠の幅員は最大375cmで、最少は240cmで全長は約16mである。第35図に示したものは濠の中間層までの掘削であり、この部分に後述する古代のピット群が出現した。第7次確認調査報告による第36図によれば、濠の深さ120~130cmで細い底面を有するが、詳細については不明である。なお濠内に於ける攪乱部分は、第4次確認調査のトレンチによるものである。



第36図 SD5号環濠下部確認図（第7次確認調査結果）
（「八幡山遺跡南地区・西地区確認調査」より）

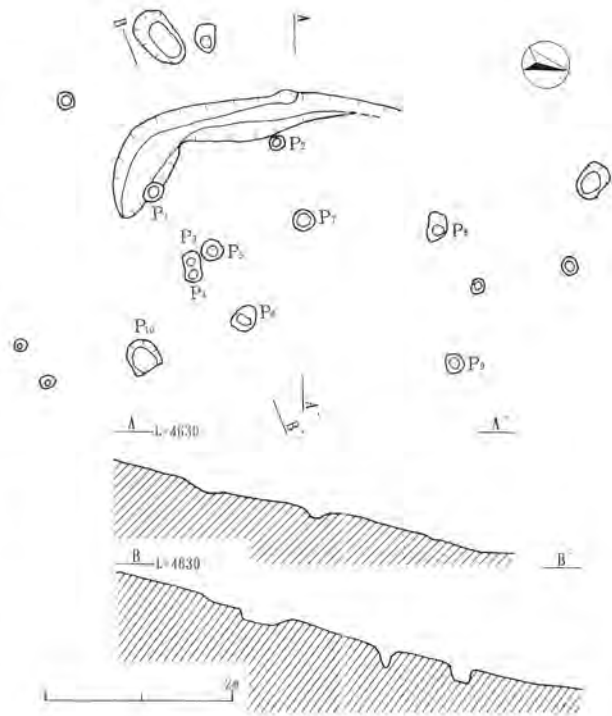
B 住居址

総数28基の住居址を検出した。この内一部は確認のみに終わったものもある。住居址の大方は斜面上に構築されているものであり、谷側部分に不明なものが多い。また昔時の畑地造成のため削平によって不明なものも多い。いずれにせよ、山側に残る竪穴の堀込みの一部分や、水切りの周溝などで住居址と做したものもあり、一部に問題を残すものもあるが、とりあえず任意の通し番号を付して呼称した。しかしながら、その後の精査によって一部に欠番が出た。また一部は時代的に相異を見ることなどから次項に譲るものもある。それらの内、10号は小型建物址、14、15号は奈良・平安時代の遺構であり、16号は欠番となった。（なお、14号はSX1号、15号はSX2号として報告する。）

図示した住居址の柱穴などに関しては、それぞれ深さと底部の標高を記して添付した。

S I 1号住居址 (第37図、図版7)

北区域 f-22区に位置し、床面の標高は45.7mである。東向き斜面で約15度の傾斜地である。遺構は山側の一部に竪穴の掘り込みと、床面に遺された壁溝と柱穴がある。溝や掘込みの残存は南西側のみで、その他は流出しているが、平面プランは隅丸方形であろう。残存する掘込み部分は山側で2.5m、谷に向かって1m程で、深さは20~25cmである。床面の壁溝は上部40~50cm、底部で10~30cm、床面よりの深さは10cm程である。主要な柱穴は定かでないが、P₁・P₈・P₉などが考えられる。この位置は畑の造成には無関係の位置に当たることから床面の削平は考え

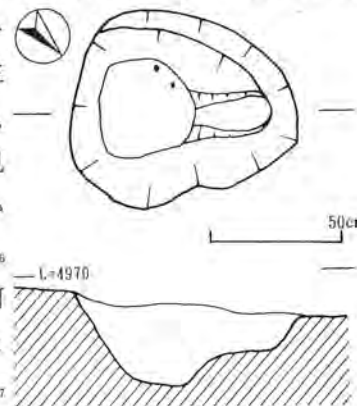


第37図 S I 1号住居址平面断面図

られず、何等かの方法によって構成されていた可能性が考えられるが実態は不明である。溝内などから多量の壺類が出土している。

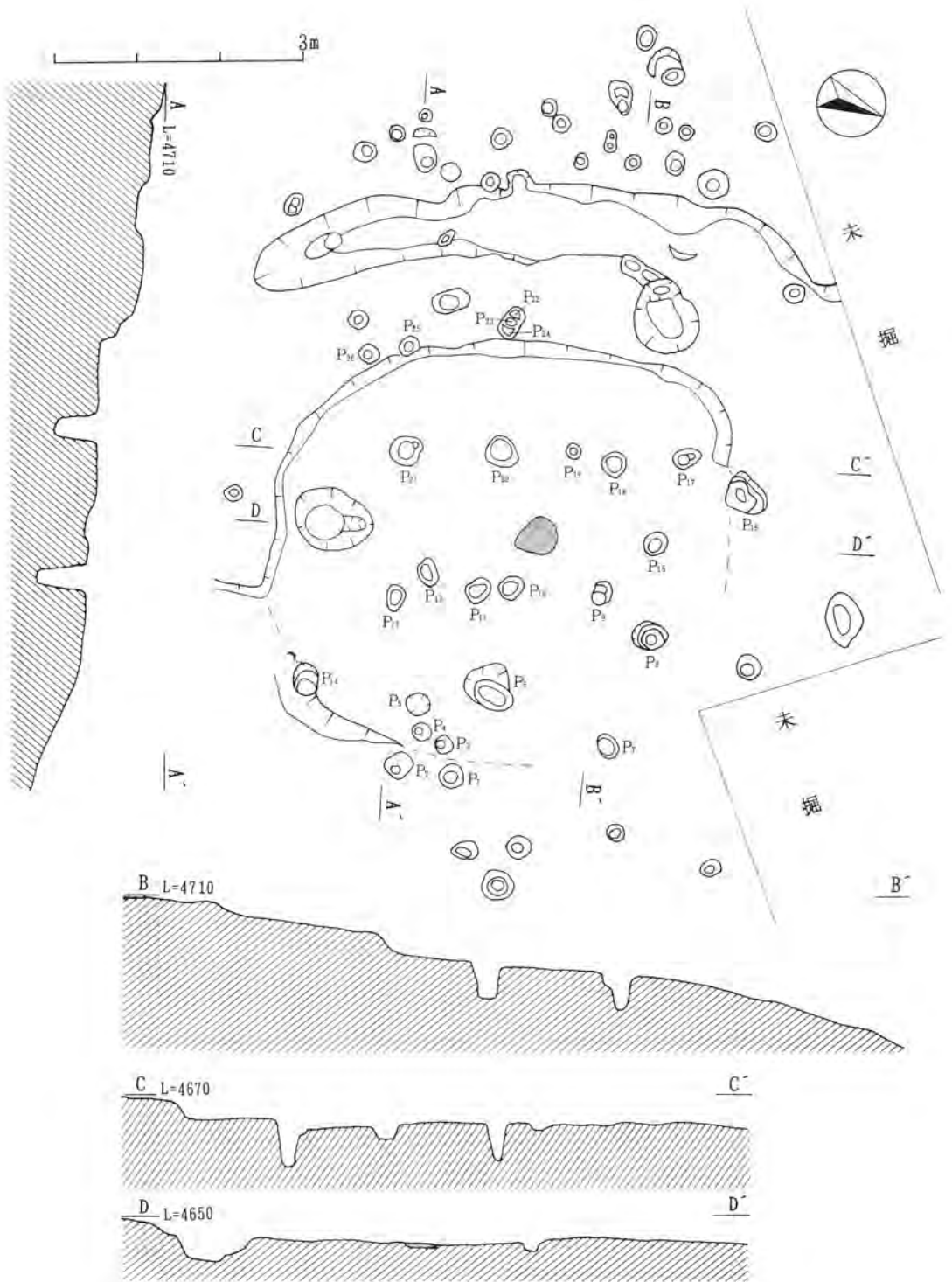
番号	深さ	底部標高	番号	深さ	底部標高
1	19	4548	6	22	4511
2	16	4553	7	13	4519
3	6	4526	8	33	4502
4	13	4536	9	18	4491
5	30	4518	10	18	4519

S I 2号住居址 (第38、39図、図版8) S I 1号住居址の西側上手にあり、g-21・22区を中心とする。東向き斜面に位置し山側の掘込みをコの字形に残し、谷側の一部分である北東側は床面の流失が進んでいるが、平面プランは隅丸方形で、5m×5.5mを測る。長軸は斜面に直角に位置し、その方位はN16度Wを測る。竪穴の掘込みは地山面より54cmを測る。主要な柱は5本が考えられ、P₈・P₉・P₁₀・P₂₁・P₁₃と見られP₂₀もこれを補佐したかに見られる。この他P₁₉、P₁₆など竪穴の外周に位置し、何等かの主役を果たしたと思われる。またP₁・P₂・P₇・P₂₀~P₂₆など上屋の垂木材が



番号	深さ	底部標高	番号	深さ	底部標高
1	11	4522	14	36	4567
2	18	4552	15	14	4604
3	14	4564	16	33	4595
4	12	4571	17	18	4609
5	11	4580	18	41	4584
6	20	4567	19	13	4613
7	18	4551	20	19	4607
8	27	4575	21	59	4572
9	50	4559	22	24	4648
10	17	4591	23	30	4641
11	16	4595	24	24	4647
12	19	4594	25	12	4651
13	55	4559	26	8	4657

第39図 S I 2号住居址内貯蔵穴平面断面図

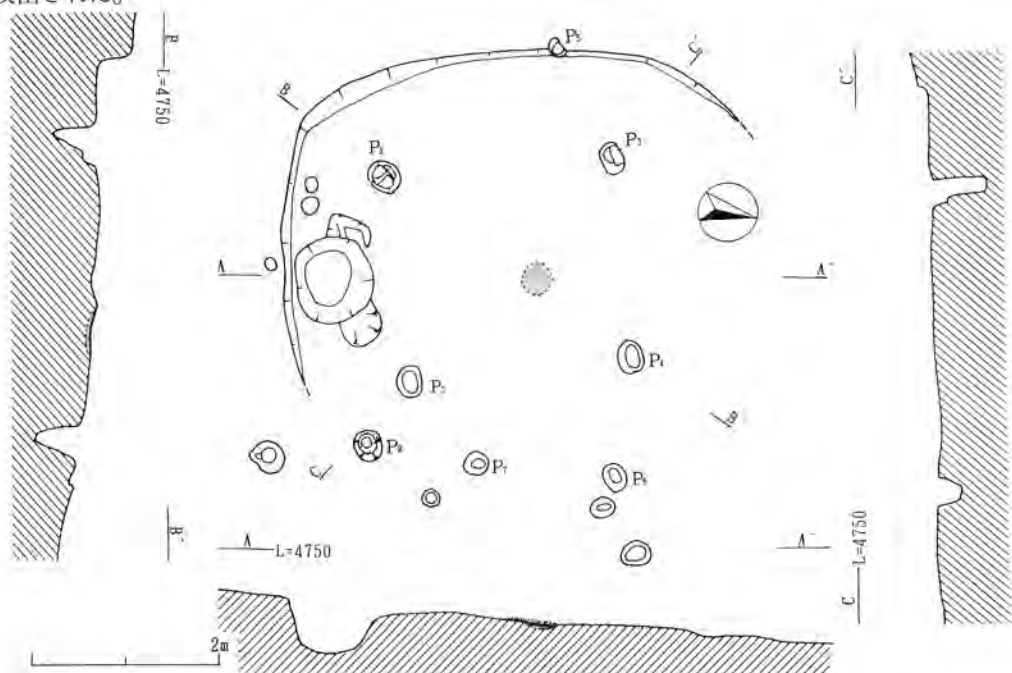


第38图 S I 2号住居址平断面图

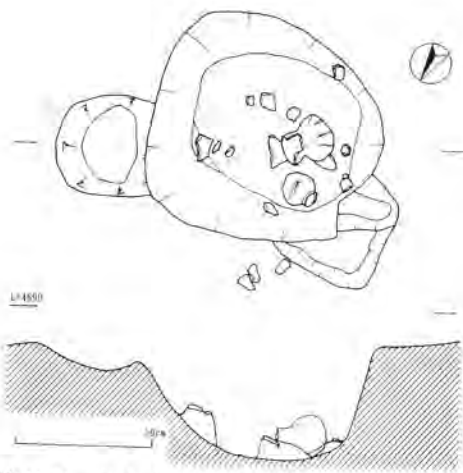
地面に入っていたものと考えられる。床面中央部に45×55cmの焼土があり、炉として焚火が行われていたことが分る。南側奥の正面に貯蔵穴が見られる。従って北側横手が入口と推定出来る。貯蔵穴は楕円で長径85cm、短径75cm、深さ30cmを測る。長軸部に狭いテラスを持つ(第39図参照)。流失している谷側の床面の一部分は盛土によって構成されていたものと考えられる。住居の山側外部に弧状の排水溝があり雨水の水切りであろう。上幅80cm前後、深さ15cm程で7m程を測る。図版8-2に示した如く、住居址及び排水溝内より多量の土器が出土した。なお紙面の都合上第38図と第39図が逆順となった。

S I 3号住居址(第40・41図、図版9) S I 1号住居址の山側に位置し、同2号住居址の長軸の軸線上にある。Aトレンチのe-21区に中心を置き、床面の標高は46.8mを測る。竪穴の掘込みは山側に当たる南側と西側にL字状に見られ、谷側には見られない。平面プランは一部推測もあるが、5×4.5mの隅丸方形で、山の斜面に直角に長軸を有する。中心部に焼土のみを残す炉があり、南側面の中心に貯蔵穴がある。上屋を支える柱は4本で、P₁~P₄がその柱穴である。この内P₃は57cm、P₁は54cmと深い。床面の現況は谷側の柱穴まではほぼ水平で14cmの高低差だが、P₂・P₁の外寄りには最大55cmの差が認められる。住居の谷側に並ぶP₆からP₈の3個のピットは床の盛土の土留に用いられた杭穴と考えられる。貯蔵穴は竪穴に添って掘られ、上口で90×80cmの円形、底部は60×50cmの方形で、深さ43cmを測る。東側に一段掘下げたテラス状の窪みがある。貯蔵穴底部より3個体の小形土器が検出された(図版9-3)。住居址内での出土土器は多量であり、またアメリカ式石鏃が1点検出された。

番号	深さ	底部標高	番号	深さ	底部標高
1	54	4629	5	18	4685
2	27	4645	6	24	4613
3	57	4619	7	11	4643
4	46	4612	8	16	4647

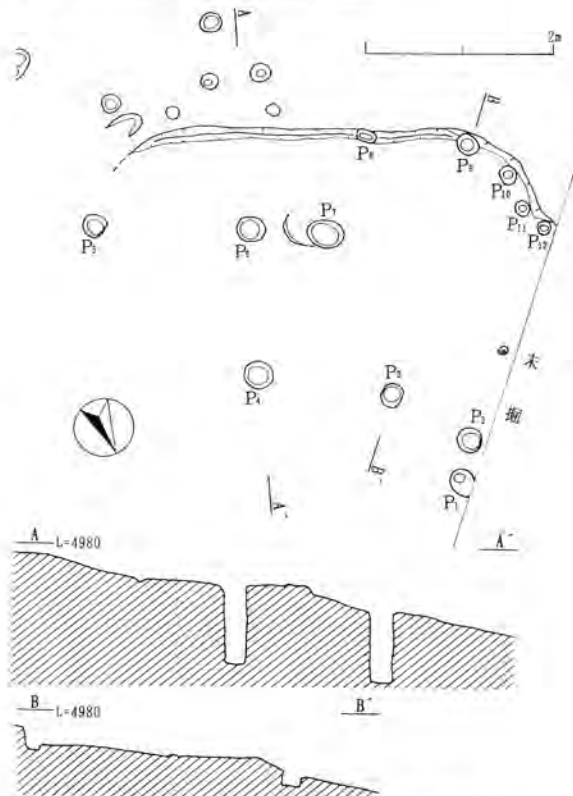


第40図 S I 3号住居址平断面図



第41図 S I 3号住居址内貯蔵穴平面断面図

番号	深さ	底部標高	番号	深さ	底部標高
1	16	4881	7	20	4910
2	19	4884	8	14	4926
3	13	4901	9	18	4937
4	78	4829	10	16	4924
5	10	4917	11	20	4923
6	87	4848	12	6	4931



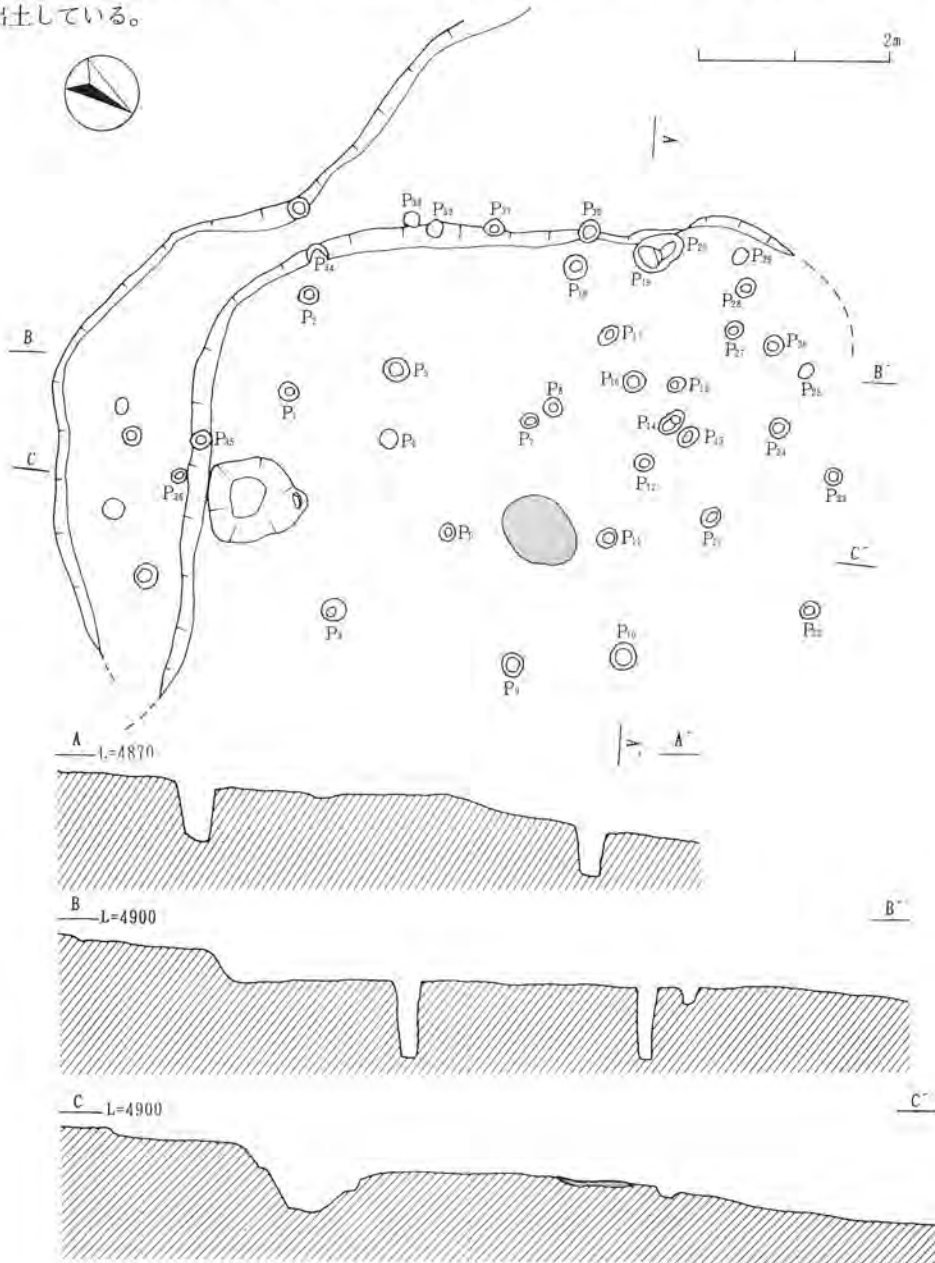
第42図 S I 4号住居址平面断面図

S I 4号住居址(第42図、図版10) BトレンチA-18、19区に位置する。トレンチの北西側に掛かるもので完掘していない。遺構は北東向きの斜面にあり、山側部分を残すが谷側は斜面となる。山側に残る竪穴の堀込み部分は西側の一部を残しているものの多くは流失し、床面に残る竪穴の壁溝によって平面プランを把握することが出来る。この結果、長軸5m程の隅丸方形の床面をもつ住居址であることが推測出来るが、短軸に当たる谷側の寸法は不明である。西側に残る竪穴の深さは20cmで、それに続く壁溝は深さ5cm、幅12~20cmである。柱穴はP₁・P₂の他は確認できなかったが、それぞれ地山面より78、87cmと深い。このうちP₂はAセクションに示した如くP₁の床面より25cm程も低位置にあり、盛土による床張りが行われたと考えられる。

竪穴の壁に添って見られる小ピットP₃・P₄~P₁₂は屋根材を支えたものであろう。炉址などの検出は出来ない。なお図版10の床面に見られる細かい穴は杉の巨根の除去に際した細根の残部である。床面より同図に示した埴の出土を見た。

S I 5号住居址(第43図、図版11) DトレンチE・F-20に位置する。竪穴の堀込みは山側部分の南側・西側部分に残るが谷側は床面共に不明である。平面プランは隅丸方形で長軸7m、短軸は斜面に向かって5.5m強と推測出来る。床面のほぼ中央に炉址を見、多量の灰と焼土を残す。また南東側の壁に添って貯蔵穴がある。貯蔵穴は直径1m、底径40cm程の円形で深さ40cmを測る。室の中央側に小さなステップを見る。床面に多数のピットが検出され

たが、屋蓋を支えた柱の跡はP₃・P₅・P₁₀・P₁₆の4本と推定され、竪穴の壁に添ったP₃₀～P₃₈などが垂木材の支点であろう。その他P₂₁・P₂₄・P₂₆・P₂₈及びP₁₉は比較的深いピットであり何等かの主要な役割を持ったものと思われる。図版やAセクションで見られる如く谷側の床面は失っているが、これらの部分は盛土による床面を形成していたものであろう。なお特に深い柱穴を有していたことを特記しておく。床面からは図版に示した如く多量の土器片を検出している。匏描紋系、刺突縁帯紋系、縄痕、ハケメなどを有するものである。また、覆土中より土製紡錘車が出土している。



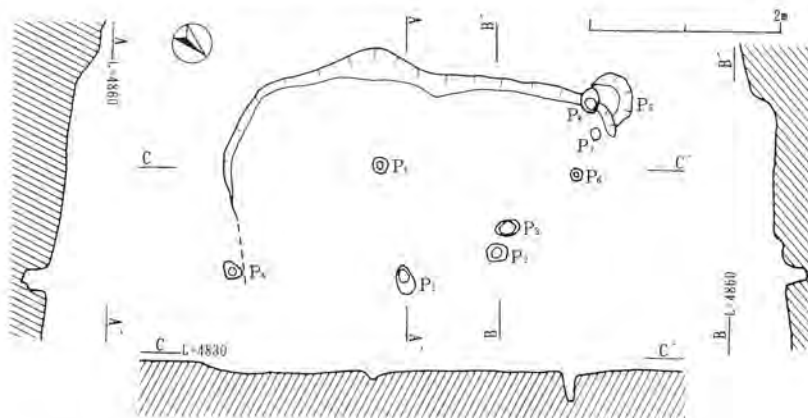
第43図 S I 5号住居址平断面図

番号	深さ	底部標高	番号	深さ	底部標高
1	24	4814	19	53	4780
2	9	4831	20	22	4811
3	30	4801	21	27	4788
4	8	4827	22	14	4766
5	80	4756	23	10	4798
6	10	4820	24	30	4794
7	19	4813	25	7	4819
8	16	4815	26	26	4804
9	14	4786	27	19	4811
10	41	4753	28	45	4785
11	19	4802	29	12	4819
12	21	4807	30	20	4829
13	18	4806	31	21	4830
14	21	4822	32	9	4846
15	20	4810	33	7	4855
16	72	4758	34	17	4848
17	12	4820	35	17	4836
18	23	4813	36	8	4854

S I 6号住居址(第53図参照、図版12-1、2) Bトレンチ A-20区に位置し、北西側半分は未掘である。谷側は19号住居址と重複する。傾斜地のためこの切合いの詳細は不明瞭だが、19号住居址が先行するものと考えられる。検出できた遺構は南側部分の竪穴の掘込み部分の4分の1程である。検出範囲が少ないため、確証はないが、隅丸方形プランを有するものである。床面の盛土は流出が進みA及びBセクションに見られる如く傾斜を呈している。また竪穴の上部の流失も進んでいるが、28cm程の掘込みが認められる。また主要な柱穴などは確認されていないが、竪穴の掘込み及びその外周に添って屋根材を固定したピット群が並ぶ。またその外側に多数のピットが存在するが、目的は不明である。住居址床面より籬描紋系、刺突紋系の土器を主体に検出した。

番号	深さ	底部標高	番号	深さ	底部標高
1	27	4771	6	26	4787
2	23	4783	7	5	5814
3	27	4783	8	10	5813
4	12	4789	9	9	4837
5	8	4806			

S I 7号住居址(第44図、図版12-3) DトレンチH-21区に位置する。竪穴の掘込み部分を残すのは山側と南側の一部にL字状に見られるに過ぎないが、隅丸方形プランを呈する。図示した竪穴の一隅がP₁地点にあるかに思われるが、主要な柱の一本がP₁と考えられることから、もう少し延びる可能性がある。断面図に示した如く盛土による床面と考えられる部分の多くは流失



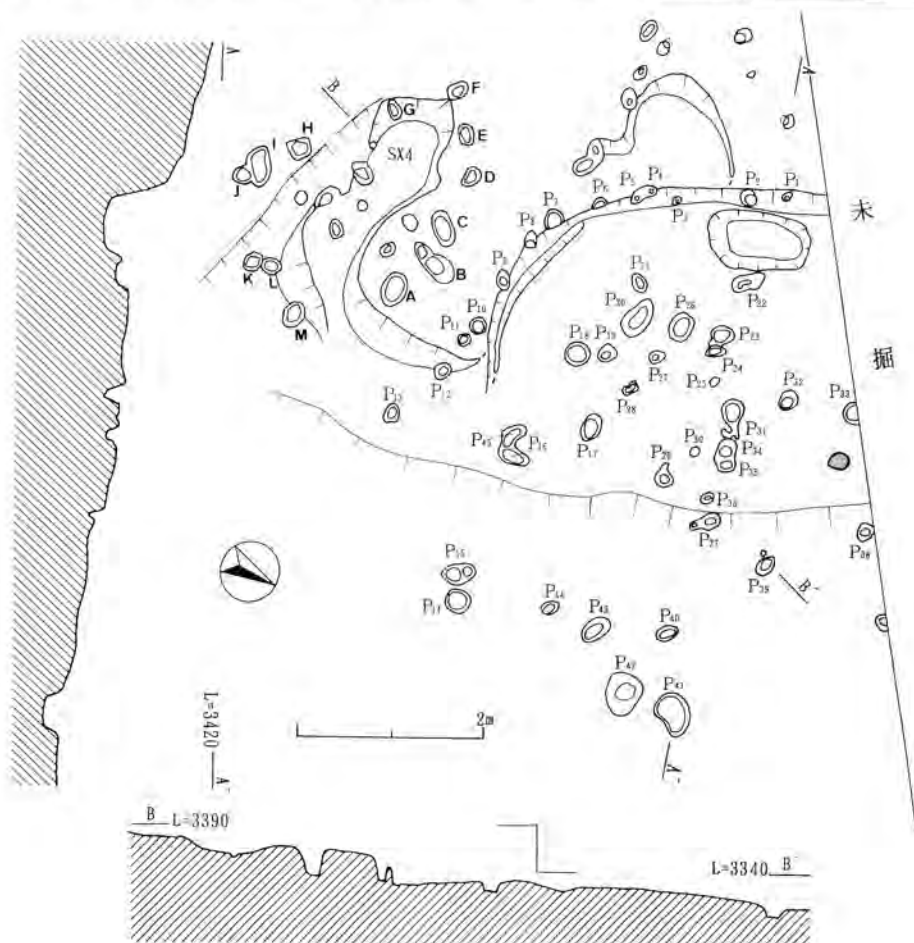
第44図 S I 7号住居址平面図

している。また第22図に見られる如くこの北西側は近現代の畑作によって攪乱されている。したがって主要柱穴はP₁・P₅・P₈の他、残る1本が検出できない。これらの中心部分にP₂・P₃の柱穴があるが、中心を支えた五番目の柱の可能性はある。炉址、その他は検出されていない。なお、図版に見られる如く木根によって床面は荒れている。

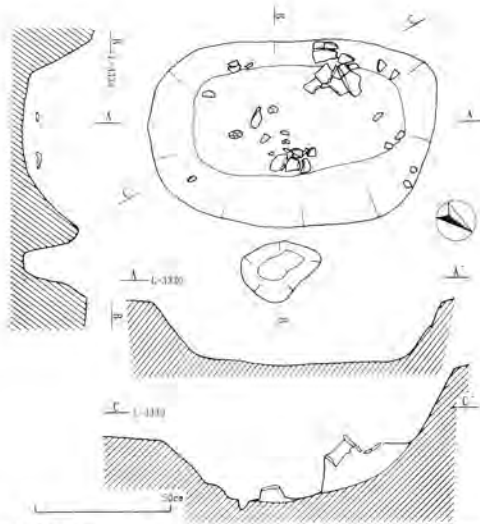
S I 8号住居址(第45、46図、図版13) Aトレンチd-33区に位置する。ここはS D I号環濠(二重環濠の外側のもの)の外側下方30m地点に位置し、その標高も同環濠より5.3m下り、

これまでの調査範囲内で最も低い位置にある住居址である。検出した住居址はトレンチ内の2分の1であるが、やはり谷側は落差があって把握出来ない。竪穴の壁を残す部分は山側と南側の一部で、床面の谷側は流失によって傾斜している。南隅1ヶ所で見える限り大きな隅丸を呈する方形の床面を有したものと考えられる。平面的には山側の壁面に添って貯蔵穴があり、床面に炉と推定出来る小範囲の焼土が残る。また竪穴内には多数のピットがあり、これらの優劣を定めかねてこの住居における柱穴を決められないが、炉址を中心とすることによってP₂₀・P₂₁を主柱とし、この竪穴の一边は6mの広がりを見るものと考え、貯蔵穴は壁面の中心よりやや片寄って所在するものと考えておく。壁面に添ってP₁～P₁₀などの小ピットが並び垂木材の支点である。山側に残る竪穴の深さは60cm程で、当遺跡内では深い部類に入る。竪穴

番号	深さ	底部標高	番号	深さ	底部標高
1	10	3356	24	14	3305
2	21	3346	25	4	3315
3	10	3357	26	16	3304
4	7	3359	27	8	3309
5	23	3343	28	6	3307
6	17	3349	29	9	3302
7	21	3342	30	6	3309
8	17	3341	31	17	3302
9	23	3327	32	23	3300
10	14	3329	33	17	3304
11	9	3327	34	11	3304
12	8	3314	35	8	3310
13	8	3302	36	18	3302
14	16	3256	37	20	3291
15	18	3262	38	13	3282
16	19	3289	39	6	3291
17	8	3295	40	13	3264
18	14	3311	41	14	3251
19	17	3305	42	23	3248
20	14	3303	43	8	3268
21	6	3318	44	8	3271
22	23	3300	45	14	3289
23	18	3303			



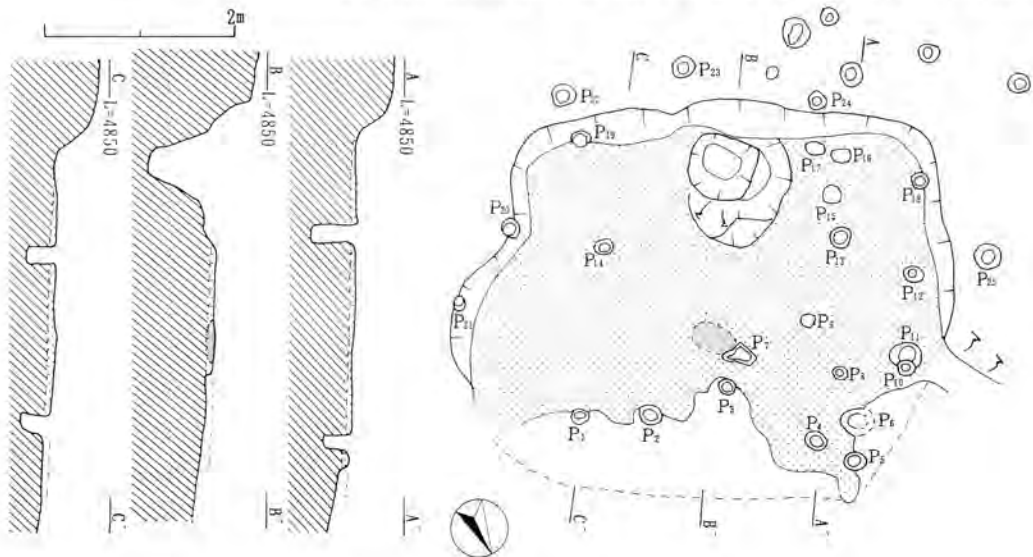
第45図 SI 8号住居址平断面図(部分)



第46図 S I 8号住居址内貯蔵穴平断面図

9号住居址ピット深度表					
番号	深さ	底部標高	番号	深さ	底部標高
1	23	4762	14	29	4765
2	23	4763	15	10	4787
3	6	4776	16	10	4788
4	27	4763	17	6	4792
5	26	4755	18	38	4768
6	12	4772	19	11	4797
7	15	4768	20	17	4794
8	19	4773	21	14	4788
9	11	4783	22	4	4824
10	23	4766	23	23	4816
11	10	4782	24	22	4811
12	28	4766	25	18	4790
13	51	4747			

隅丸方形を呈し、その広がりは東西に4.2~4.8m、山側から谷側には3.8~4mと推定される。地山に残る堅穴の深さは40cmである。堅穴の山側中央に貯蔵穴を備え、床面のほぼ中心部に炉が認められ、焼土が残る。柱は4本と考えられ、P₁・P₄・P₁₃・P₁₄がそれである。さらに北西側に並ぶピットの内P₉・P₁₀・P₁₂・P₁₈は構成上、主要な役割を持ったものと考えられる。床面には一部不明瞭な部分もあるが4~5cmの厚さの粘土張りが見られる。貯蔵穴の口径は70cm、低径30×40cm、深さ70cmの円形で、その半



第47図 S I 9号住居址平断面図

内に設けられた貯蔵穴は山側の壁面に添って掘られ、上口108×70cm、底部は80×40cmの楕円であり、深さは24cmを測る。内部より大型の高坏を始めとする良好な土器群が検出された(第46図、図版13-3)。なお、堅穴の床面及び堅穴外部よりも多量の土器が出土している。また貯蔵穴の覆土より石鏃の検出がある。

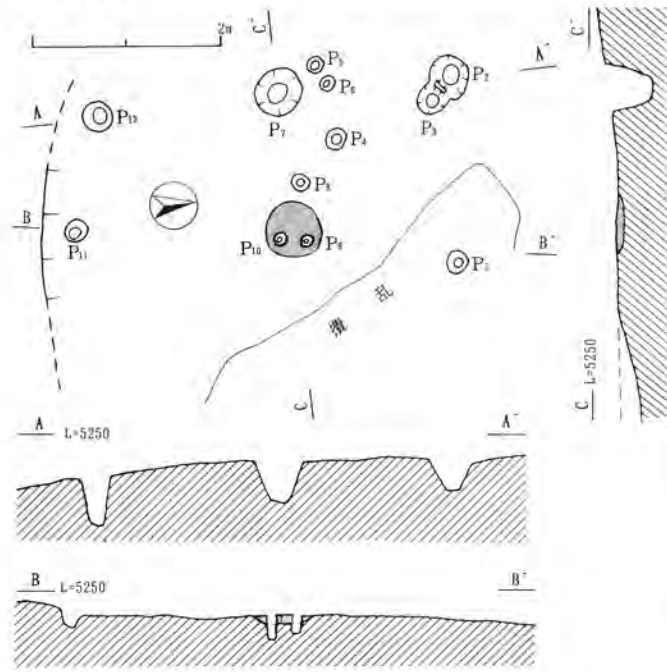
S I 9号住居址(第47図、図版14-1、2) Dトレンチ内C-20区に位置する。ここは緩斜面に位置するため床面の保存状況は良好である。堅穴の掘込みは谷側を除いた三面にコの字状に残り、南東側の一部がやや膨らむが

分にテラス状のステップが造られている。

住居址内出土の土器は比較的多く、さらに6点の石鏃の出土は特筆に値するものであろう。

S I 11号住居址 (第48図、図版14-3) CトレンチK-14区を中心にして位置する。この辺りは山頂の平坦部に当たり、南東向きの緩斜面で削平によると考えられる破壊が進んでいる。竪穴部分は殆ど削平され、南側にそれと推定される僅かな落込部分が1.5m間に互って見られる程度である。この落込の北側に炉と推定出来る焼土と南北に並ぶ3基の柱穴P₁₀・P₇・P₁が見られる。この他小ピット以外は攪乱や削平によって失われているが、遺された遺構より次の如く推測されよう。この住居址は南北に長軸を有し、屋蓋を支えた主要な柱は6本で、それぞれ3本ずつ併列する。この柱列の中間に当たるP₇と炉が垂直に位置することから炉は建物の中心部に位置するものであり、床面の長径は5.4m程あり、東西は4.5乃至5mの範囲に納まるものであろう。だが平面プランは不明である。炉は直径60cmと焼土の範囲が比較的広く、この内にやや片寄って2ケの小ピットが見られる。この小ピットと炉との関係は不明である。なお、P₁・P₁₀などのピットも補助的な柱穴と考えて良いものであろう。

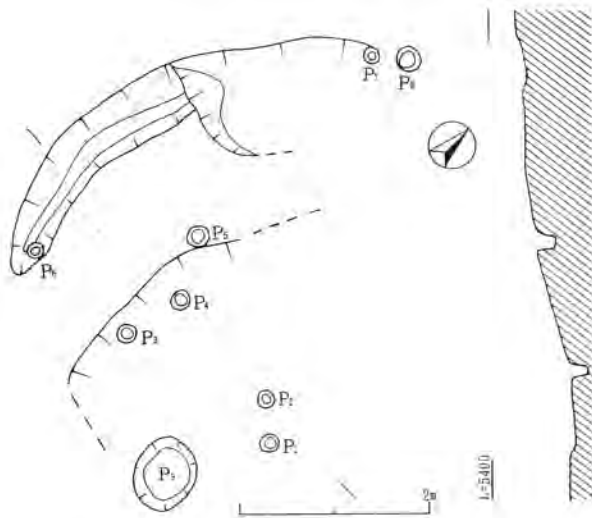
S I 12号住居址 (第49図、図版15-1) CトレンチF-13区で僅かに検出した遺構であるが、住居址の中心部はG-14区に位置するものであろう。前記S I 11号住居址と同様な平坦地にあるが、全測図(第23図)に示した様に南北の段切りによって東側が削平され遺構の殆どが破壊されている。残存する遺構は東下りの緩斜面で、西側に床面の隅部と推定出来る部分を僅かに認められ、山側に1.2mの間隔を置いて三日月状の排水溝を見る。第49図には煩雑を避けるため記入していないが、床面には前述した如く畑作の段切りがあり、また図版にも見られる様に多数の杉の



巨根があり、詳細を把握できないが、小数の小ピットと貯蔵穴と推定されるP₉がある。この穴の中心に13cmの段差を見る段切りが通過しているが、残存する最大深度は39cmを測る。背後に残る排水溝は最大幅60cm、深さ13cmである。

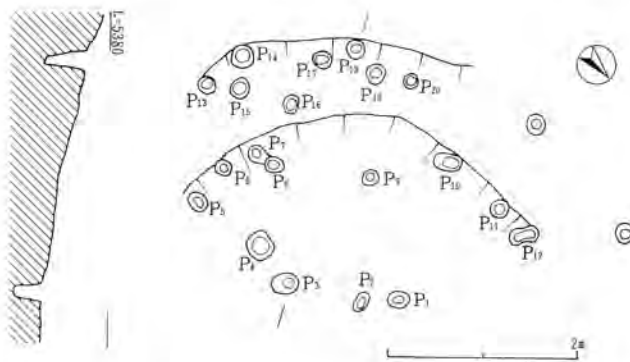
番号	深さ	底部標高	番号	深さ	底部標高
1	23	5204	7	49	5177
2	40	5191	8	11	5217
3	21	5200	9	20	5207
4	26	5201	10	26	5199
5	22	5211	11	20	5203
6	10	5220	12	65	5155

第48図 S I 11号住居址平断面図



第49図 S I 12号住居址平断面図

番号	深さ	底部標高	番号	深さ	底部標高
1	26	5281	5	15	5336
2	22	5291	6	13	5345
3	14	5331	7	22	5316
4	21	5324	8	10	5322

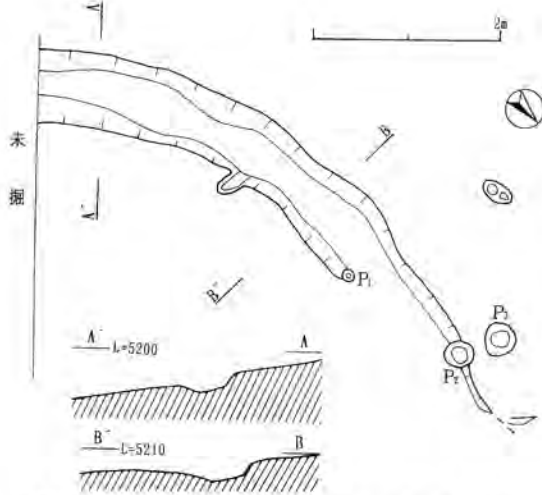


第50図 S I 13号住居址平断面図

番号	深さ	底部標高	番号	深さ	底部標高
1	23	5287	11	13	5312
2	19	5292	12	48	5271
3	33	5280	13	15	5340
4	22	5291	14	37	5319
5	27	5295	15	19	5333
6	25	5313	16	20	5331
7	24	5304	17	30	5321
8	22	5303	18	45	5310
9	13	5313	19	12	5338
10	45	5296	20	13	5338

S I 13号住居址（第50図、図版15-2） CトレンチD-14区に位置する。住居址としての確たるものは無いが、2段の落込みとピット群から住居址と做した。2段の落込みは1m乃至80cm程の間隔を持つもので、おそらく建替による2棟が重複しているものであろう。いま柱の構造など復元しかねている。覆土中より石鏝の出土を見た。

S I 17号住居址（第51図、図版15-3） BトレンチB-16に位置する半円形の溝を以て住居址と推定するものである。北東下りの傾斜地で、SD 2号環濠の内側に接するものと考えられるが、住居址そのものは流失して不明である。溝は排水溝と考えられ、図示した如く半円形と推定されるものの半分である6m程を検出した。未掘部分を合わせた推定直径は8~8.5mで、上幅80cm前後、底幅30~50cm、深さは20cm前後を測る。住居址と思われる床面より石鏝が検出されている。

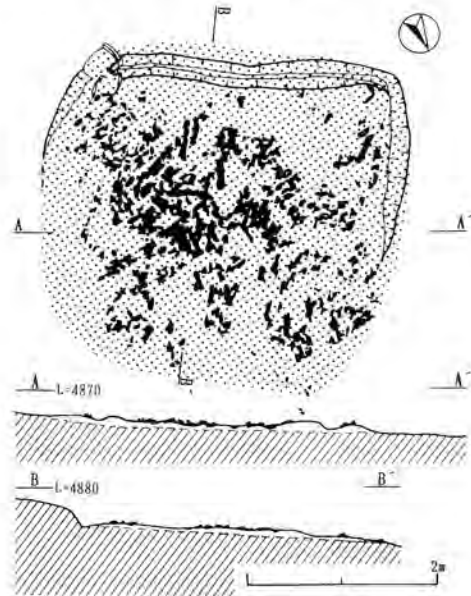


番号	深さ	底部標高	番号	深さ	底部標高
1	18	5107	3	25	5112
2	44	5079			

第51図 S I 17号住居址周溝平断面図 (部分)

S I 18号住居址 (第52図、図版16-1~3) BトレンチB-19、20区にあり、比較的緩斜面である。住居址の覆土は全面黒色灰と木炭に覆われ、一見して火災によって廃棄された住居址であることが分かる。第52図に図示出来た黒色のものは、焼け落ちた構造材の内のための木炭であり、この他図示出来ない細かな木炭で覆われている。これらの状況を保存するため、住居址の床面を完掘していないが、その形態はおおよそ把握出来た。堅穴の掘込みは山側ニコの字状に見られ、谷側には無い。この堅穴の南側の隅はやや丸味を帯びているが、北西側は角を成しており、どちらかと言えば方形と做し得よう。この平面の計測は堅穴の内法3.6m、谷に向かっては木炭などを限界として3.2mである。山側にV字状の細い壁溝があり、北西側もかすかに溝状を成している。なお南隅よりカメ形土器が検出されているが、床面を見ていないため、柱穴などの状況は不明である。当住居址はここで検出した住居址の中で唯一の方形プランを呈すものであり、また3.6mと最少の床面を測るものである。また落下した木炭が放射状に見られ、中心に集中していることも注目するところである。

S I 19号住居址 (第53図、図版12-1) BトレンチA-21区に所在し、S I 6号住居址と一部が重複する。比較的緩斜面であるが、南隅の一角に堅穴と推定される掘込みが見られ、図示した如く小ピットがあるが、図版に見られる如く2本の巨杉による多量の根によって床面が荒れ、より具体的な把握ができず、

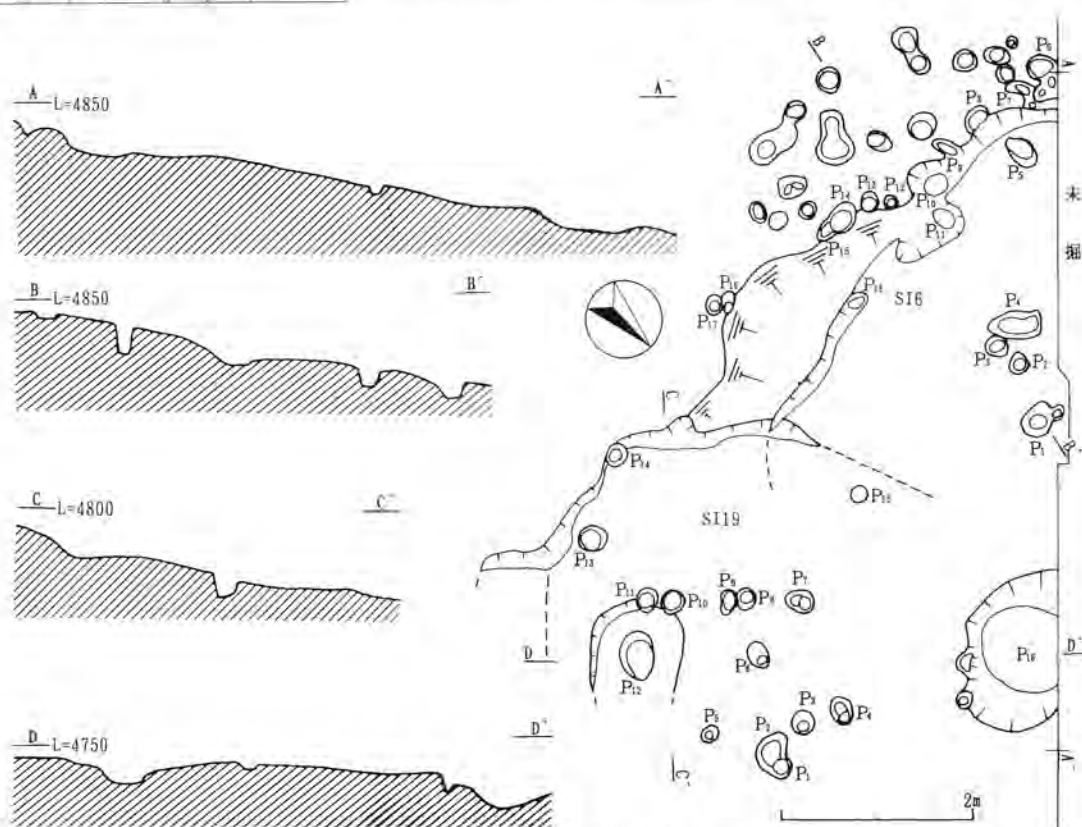


第52図 S I 18号住居址炭化物実測図 (未完掘)

番号	深さ	底部標高	番号	深さ	底部標高
1	15	4734	10	23	4779
2	8	4758	11	13	4773
3	19	4751	12	9	4794
4	16	4757	13	16	4793
5	13	4782	14	16	4788
6	14	4824	15	6	4797
7	15	4812	16	22	4771
8	10	4811	17	20	4772
9	9	4806			

番号	深さ	底部標高	番号	深さ	底部標高
1	26	4669	9	15	4719
2	19	4688	10	18	4708
3	27	4681	11	18	4708
4	19	4689	12	18	4703
5	19	4691	13	11	4733
6	17	4698	14	26	4740
7	18	4712	15	9	4736
8	19	4713			

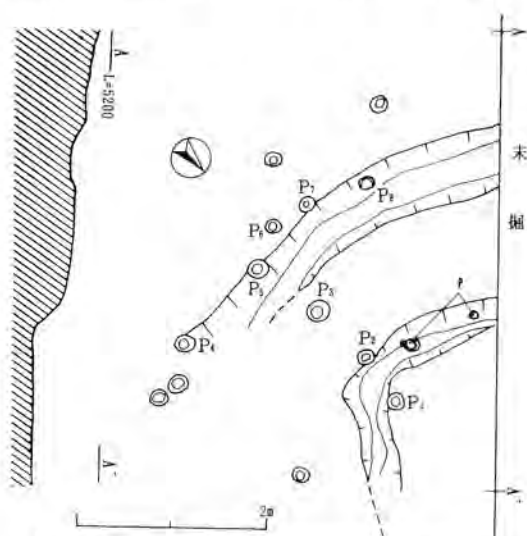
住居址と推定されるに止まった。従って柱穴などは断定できないが、P₁₆は30cmと浅いが一応貯蔵穴と考えておきたい。S I 6号住居址に先行するものと推定された。



第53図 S I 6号・S I 19号住居址平断面図(部分)

S I 20号住居址(第54図、図版16-4、17-1) BトレンチA-16区にかけて一部分が検出された。S I 17号住居址の横に並ぶもので、S D 2号環濠の開口部分の内側に位置する。検出された部分は竪穴の1.5m程と背後の排水溝の一部分で、多くは西側の未掘部分に位置するものである。検出した部分は竪穴の東隅で、やや角形を呈するが隅丸方形の範疇にあるものである。断面図を取ったトレンチの壁面には現れていないが、竪穴のコーナー部分には壁溝が見られ、底部の幅20~7cm、深さは浅く5cmを測ることが出来た。床面の確認は東西1.3m程に止まり、南北には1.6m程で谷側は流失して不明となる。竪穴の内外に小ピット2ヶがある。なお図示した様に少量の土器が検出されている。排水溝は竪穴より1.3m前後隔てた位置に、曲線状を呈してある。上幅50~70cm、底幅20~30cm、深さは15cm前後と浅い。溝の東側には図示した如く多くのピット

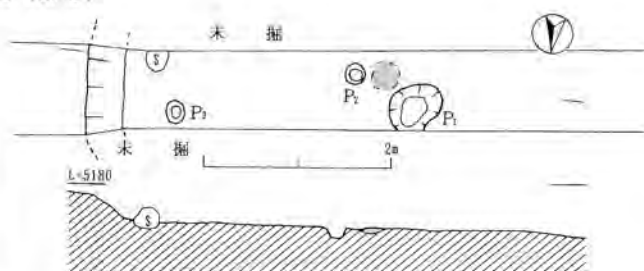
トが見られるが、住居址との関連や溝との関連などは不明である。なお写真図版の左上部に見える段差は畑作当時の削平によるものである。



第54図 S I 20号住居址平断面図 (部分)

番号	深さ	底部標高	番号	深さ	底部標高
1	4	5142	5	9	5187
2	15	5150	6	3	5187
3	16	5150	7	9	5189
4	12	5175	8	18	5185

番号	深さ	底部標高	番号	深さ	底部標高
1	6	5126	3	12	5127
2	14	5118			

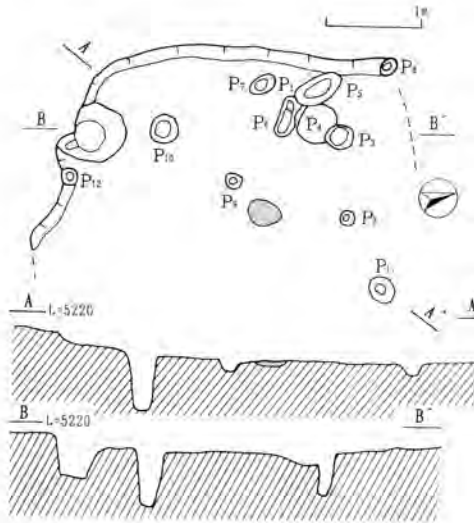


第55号 S I 21号住居址平断面図 (部分)

S I 21号住居址 (第55図、図版17-2~3) EトレンチC-3区に位置する。Eトレンチは前章に記した如く山頂より西向きに延びる細い尾根で、遺構はこの尾根の始まり部分にあり、緩い西向きの斜面に位置する。Eトレンチは尾根上の樹間に設定したもので、その幅員は1~1.4mであるが、このトレンチに住居址の中心が現れた。住居址床面でのトレンチ幅は80cm程であるが、山側に深さ30cmの竪穴の掘込壁が確認され、この壁面より2.8m地点に炉址である焼土がある。谷側の床面は4.5m程で流失しているが、炉址が中心部と考えられよう。図示した如く炉址及び壁面に接して3ヶのピットがあるがいずれも柱穴などとは考えられない。また20cm程の河原石が壁面近くに据えられ、何等かに用いられたことが知られる。遺構の全体像などは知られないが、炉址に近い床面より良好な壺形土器が検出されている。

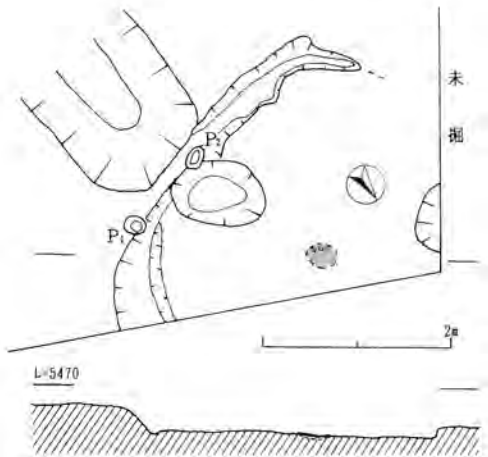
S I 22号住居址 (第56図、図版18-1) CトレンチL-13、14区に位置する。東下りの緩斜面で山側と南側にL字状の深い掘込みを残す。また北側も僅かに床面の境を残すが、谷側は不明である。従って床面の全体プランは不明瞭ながら隅丸方形と推測される。ほぼ中央部に炉址の焼土が見られることから、南北に3.7m、東西に3m程の小形の住居址である。床面の山側に多数

番号	深さ	底部標高	番号	深さ	底部標高
1	37	5141	7	27	5153
2	14	5157	8	22	5169
3	31	5150	9	10	5161
4	10	5165	10	58	5120
5	12	5167	11	43	5144
6	28	5147	12	24	5156



第56図 S I 22号住居址平断面図

番号	深さ	底部標高	番号	深さ	底部標高
1	10	5439	2	8	5409

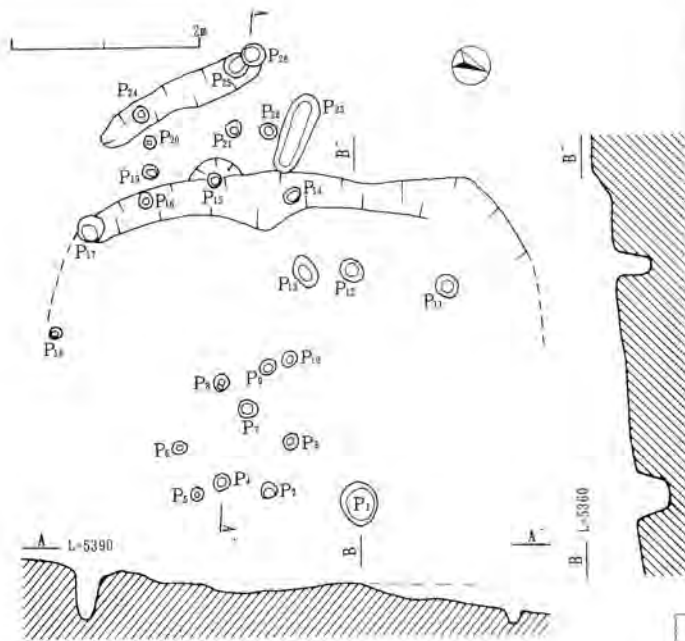


第57図 S I 23号住居址平断面図 (部分)

のピットがあるが、 $P_3 \cdot P_{10} \cdot P_{15}$ が上屋を支えた柱穴であろう。残る1本は検出できない。 P_{11} としたものは貯蔵穴であり、やや山側に片寄った壁面に添ってあり、口径50cm、底径30cm、深さ29cmである。ごく少量の土器と石鏃1点が出土している。

S I 23号住居址 (第57図、図版18-2、3)

Bトレンチの拡幅調査地点にあり、a-10区に中心部を置いて位置する。北確認調査区域における山頂部分の広い平坦地の北側に当たり、全掘していないが遺構はやや北下りの緩斜面に向かっているかと推定される。後述する前方後方墳の確認のための拡幅調査部分で検出されたもので全掘していない。遺構は隅丸方形と推定される平面で、南側を背にしてコの字形を呈する竪穴の掘込みを有するものと思われるが東側は全掘していない。発掘した壁面の全体に壁溝を見るが、西半分の壁面は前方後方墳の前方部の先端によって僅かに削られ、20cm前後の幅となるが、東側に残る壁溝は10cm強に止まっている。床面の中心部に炉址と見る焼土があり、南側壁面の中心部に添って浅い貯蔵穴がある。柱穴などは検出できなかったが、壁に添って $P_1 \cdot P_2$ の小ピットが見られることから垂木材のものであろう。床面の推定寸法は3.5m四方である。なお、貯蔵穴とその周辺から土器が検出されている。



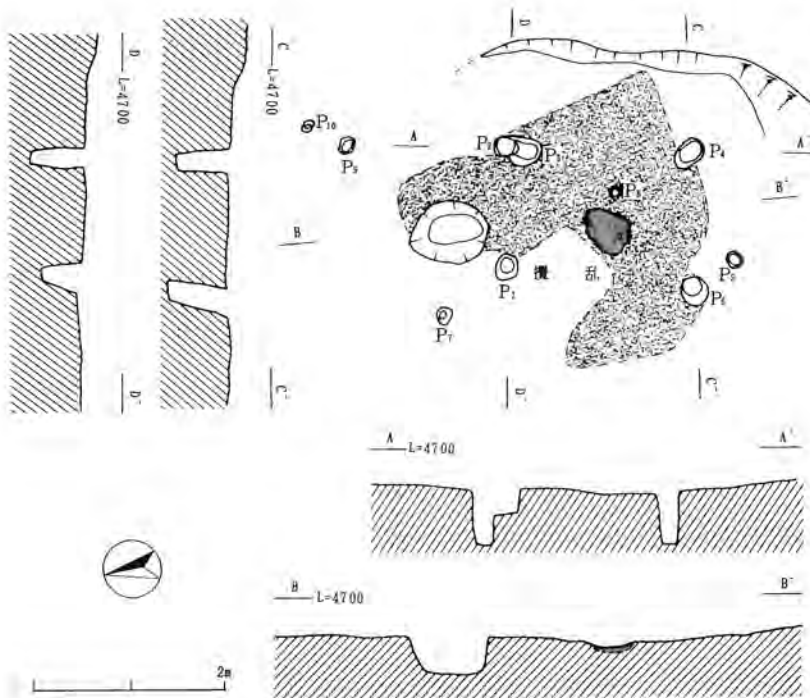
24号住居址ピット深度表

番号	深さ	底部標高	番号	深さ	底部標高
1	26	5279	14	18	5326
2	10	5299	15	10	5331
3	20	5294	16	8	5332
4	18	5300	17	32	5313
5	14	5302	18	12	5324
6	12	5310	19	20	5329
7	32	5289	20	11	5338
8	11	5313	21	13	5337
9	10	5312	22	6	5343
10	14	5309	23	14	5345
11	38	5288	24	27	5321
12	42	5289	25	25	5336
13	12	5322	26	53	5306

第58図 S I 24号住居址平断面図

25号住居址ピット深度表

番号	深さ	底部標高	番号	深さ	底部標高
1	44	4612	6	64	4591
2	58	4604	7	18	4643
3	28	4631	8	15	4642
4	56	4600	9	21	4641
5	23	4677	10	18	4644



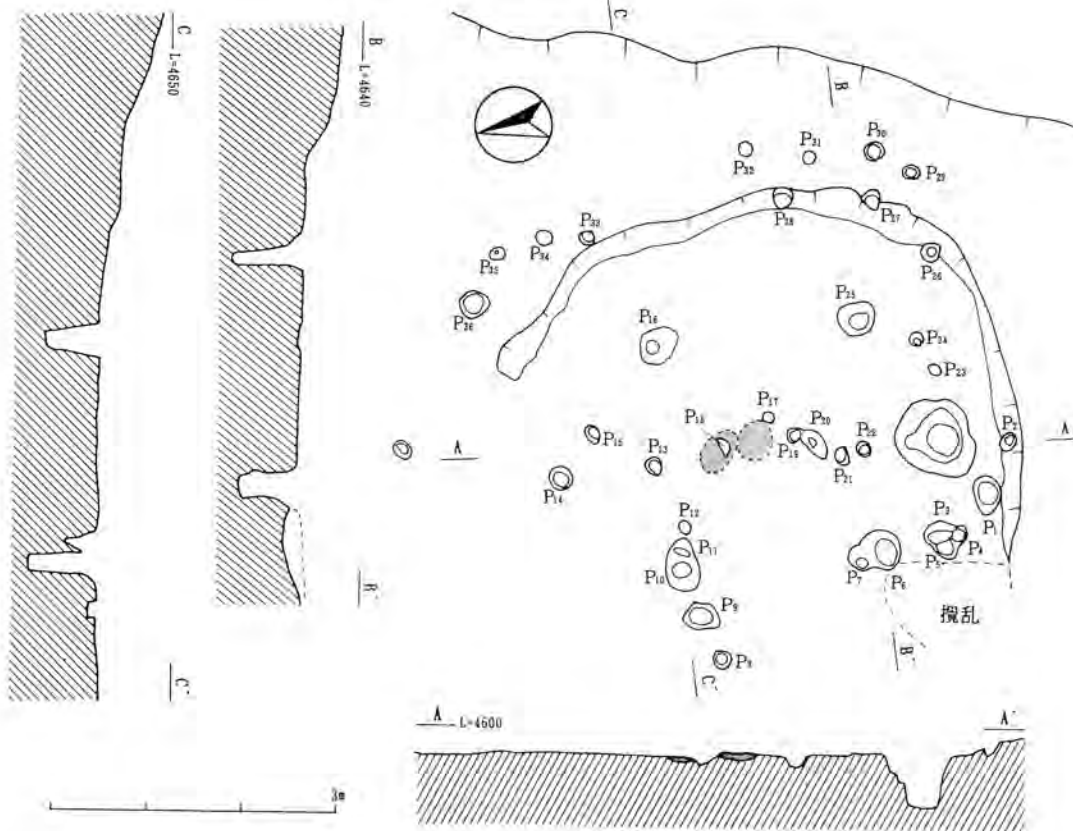
第59図 S I 25号住居址平断面図

S I 24号住居址（第58図、図版19-1） CトレンチE-14区に位置し、左右に12号、13号住居址がある。図版に示した如く杉の巨根が多く遺構の確認に苦労があった。遺構は隅丸方形プランを呈する竪穴式住居で、山側にその掘込みの一部が残る。この掘込みはそのまま浅い壁溝として残り、この幅員は30cm程で、一部60cmを測る。床面の谷側は山側の平坦地に近いにもかかわらず、流失が進んでいて把握できないが、南北には5m余りの広がりをもつ。柱穴、炉址などを検出できないが、床面に多数のピットがあり、P₁・P₁₂あるいはP₁₁などが柱穴と推定される。壁溝に添ってP₁₄～P₁₈などは上屋材の痕跡と思われる。

S I 25号住居址（第59図、図版19-2～3） 南全面調査区域の大グリットI-23区における小グリット12区（以下I-23-12と記す）に位置する。北確認調査区域に通ずる尾根の付根の嶺線にあり、南西向きに緩斜面である。竪穴の掘込みは嶺線側に3.5m程を残し、深さは20cm程を認めるにすぎず、左右及び全面はほぼ平坦で、限界を特定できない。この掘込みの形態から一応隅丸方形プランと考えられ、南北に約4.5m、東西には3.5m程の広がりとも推定される。床面の一部分には褐鉄鉱の小礫が敷かれ、張り床状をなしているが、湿気抜きの手段であろう。一部分に杉の巨根によって攪乱され不明部分があるが、床の中心部に方形に敷かれたものと推測される。床の中央部には炉址の焼土が見られる。7～8cm程の窪みを作っている。この炉を中心にP₁・P₂・P₄・P₆の4ヶのピットが柱穴であり、いずれも25～30cmの径で、深さも42～64cmと深く、太い柱が使用されたい。北側の側面と推定される位置に貯蔵穴があり、底部で30cm×60cmの楕円を呈している。なおP₆の柱穴は西向きに斜状を呈しているが、垂直に使用されたものであろう。

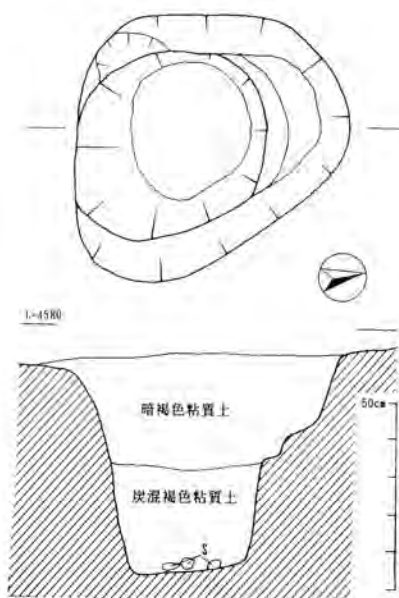
S I 26号住居址（第60～62図、図版20） 大グリットI-23-34～35区に中心を持つ住居址である。柿団地に造成された平坦地であるが、調査の結果、旧状は北西向きにある程度の傾斜を有する地形であることが知られる。遺構は上層のピット群遺構の下層に発見されたものである。この上層ピット群のピットは全て下層面にまで貫通して居り繁雑な様相を呈している（第62図）。第60図は一応上層ピットを図面上で削除したものであるが、なお小ピットが多数あり、不自然な状況を呈している。

竪穴の掘込みは東、南側にほぼ半円状に20cm前後の深さで残るが、谷側はほぼ平坦で終わっている。なお第60図Bセクションの内、B'地点に掘込み状にあるが、攪乱による落ち込み部分である。平面プランは円形にも見えようが、隅丸方形と見る方が妥当であり、北、西側の限界は不明瞭だが、5×5m程と計測される。床面の中央部と北側に接した2ヶ所に円形の焼土が残る炉があり、北側の炉には葉研状の窪みを有する。柱はP₆・P₁₀・P₁₆・P₂₆の4本で57～74cmの深さを持ち、南北に2.2m、東西に2.5m間隔を測る。竪穴外部におけるP₂₉～P₃₃に至る小ピットと上屋根などとの関連は特定できない。床面南側に貯蔵穴がある。壁面より25cm程離れて掘られ、中央寄りの中に2段の小ステップがある。形態は円形で底部は直径30cm、深さは60cmと深い。中段以下の覆土は炭化物を混入した粘質土であり、底部に礫を見た（第61図）。住居址より多数の土器と共に4点の石鏃が検出され、さらに竪穴外部でも2点の石鏃が検出された。

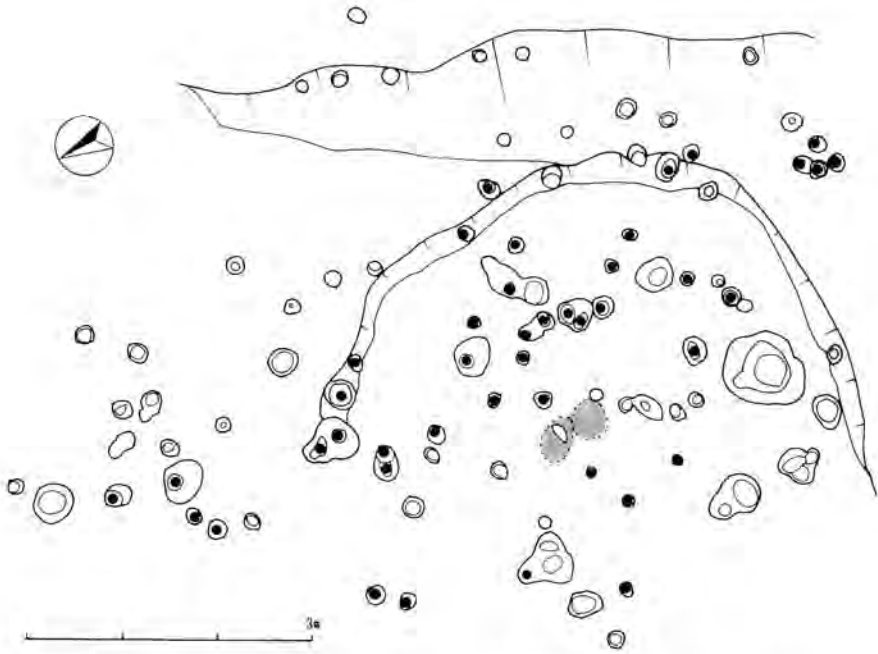


第60図 S I 26号住居址平断面図

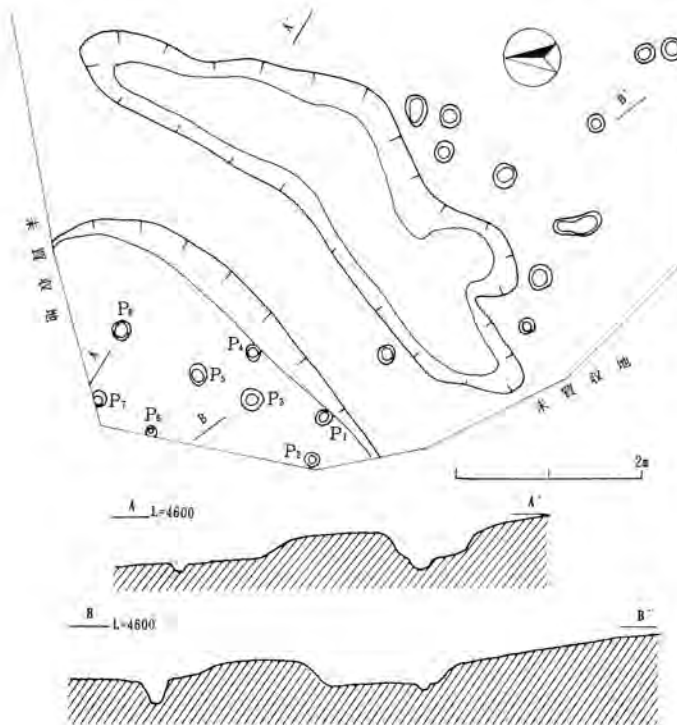
番号	深さ	底部標高	番号	深さ	底部標高
1	23	4554	19	8	4562
2	12	4572	20	19	4551
3	12	4558	21	12	4559
4	9	4566	22	10	4562
5	11	4562	23	10	4568
6	61	4509	24	14	4562
7	35	4535	25	74	4501
8	15	4558	26	21	4558
9	11	4557	27	11	4566
10	70	4498	28	22	4567
11	34	4537	29	11	4601
12	8	4562	30	25	4592
13	15	4554	31	8	4592
14	11	4558	32	9	4584
15	13	4559	33	25	4562
16	57	4515	34	6	4581
17	13	4561	35	31	4554
18	10	4559	36	15	4570



第61図 S I 26号住居址内貯蔵穴平断面図



第62図 S I 26号住居址上層ピット群残遺 (●印は上層ピット)



番号	深さ	底部標高	番号	深さ	底部標高
1	20	4524	5	18	4531
2	13	4532	6	10	4534
3	23	4521	7	17	4529
4	7	4540	8	10	4540

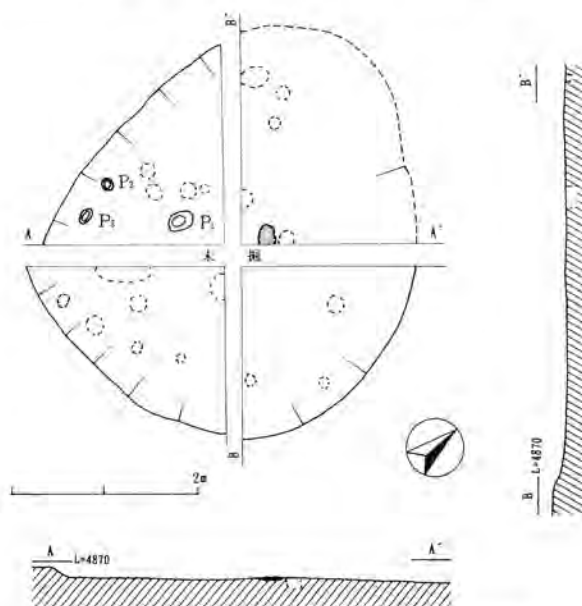
第63図 S I 27号住居址平断面図 (部分)

S I 27号住居址（第63図、図版21-1、2） 大グリットI-22-22、23区にその一部分が検出された。遺構の多くは調査予定地外に広がるものである。北区域にのびる尾根の付根部分に位置し、嶺線より一段下った傾斜地であるが、未調査地は段切りによってさらに落下していることが地表から認められる。遺構は北西向きの緩斜面で、調査区の隅に堅穴の一部が検出した。掘込みは深さ20cm前後で、壁面は南西から3.5mで弧を見るものであり隅丸方形であることが分かる。検出した床面は3平方m強と狭いが多数の小ピットが認められるが、この穴に柱穴を特定することはできない。なお床面はAセクションに見られる如く5度の勾配を呈している。壁面の背後に平行して太い溝遺構がある。全長5m、最大幅1.7m、最大深度45cmを測る。この規模から単なる排水溝とは見られないが、一応周溝と考えておきたい。なおこの溝より多くの土器が検出された。

S I 28号住居址（第64図、図版21-3） 南全面調査区域の大グリットI-21-1区に中心部を置き、I-25-31区にまたがって位置する。南東へ向かう嶺線に近い山頂部であり、僅かに北向きの傾斜を見る。ここで堅穴の掘込みと焼土の一部を確認したが、序章で記述した理由で完掘していない。図示した如く堅穴の覆土に十文字のアゼを残し、床面がほぼ表れた作業段階である。堅穴はさらに精査を要するものだが、この段階では円形に近い不定形のものである。この掘込みは10cmと浅く、従って谷側の一部では確認することはできないが、直径4.1mの広がりをもっている。床面の中心よりやや北東に片寄って炉と思われる焼土がある。床面には大小多数のピットと推定されるものが見られ、このうち3箇所を掘削したが多くは手をつけていない。従って図示した破線での円はあくまでも予想されるものである。もちろん柱穴を見分けることは出来ない。なお、この住居址からの出土遺物はない。またこの平面プランなどから同時期の住居址と俄かには決定できない。

なお、調査中断後第7次調査員によって精査、整理が行われたと思われるが、その報告はない。

南確認調査区域の住居址（第65、66図） 第7次確認調査によるものでこれらの詳細に関しては不明だが、第8回金津丘陵埋蔵文化財発掘調査団会議要項として報告書が提出されている〔渡辺1990〕。当報告書によれば5基の住居址が検出され、それぞれ1号住居址～5号住居址と称されている。1号住居址はD区で、その他はC区の検出である。いずれも嶺線に近い東向きの緩斜面に立地し、



第64図 S I 28号住居址平断面図（未完掘）



第65図 第7次確認調査遺構図1
 (「八幡山遺跡南地区・西地区確認調査」より)



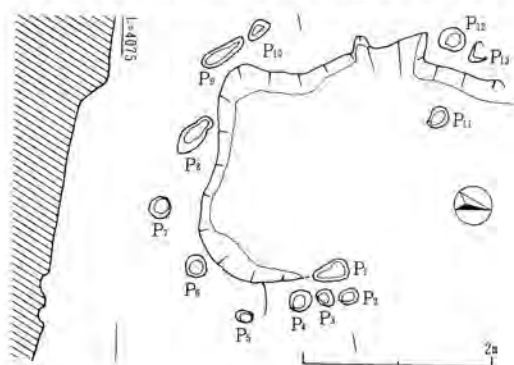
第66図 第7次確認調査遺構図2
 (「八幡山遺跡南地区・西地区確認調査」より)

山側に竪穴の一部を残している。1号住居址には壁溝と排水溝としての周溝を見る。いずれも隅丸方形プランを呈している。また各住居から弥生土器の検出が報告されている。

C その他の遺構

S B10号小型建物址 (第67図、図版22-1) 北確認調査区域内、Aトレンチ、f-27区において小型の竪穴遺構が検出された。ここはSD1号環濠の南端に接する位置にある。北東下りのやや急斜面における竪穴建物である。山側の南西部及び東側の一部に竪穴の一部を残すが、谷側の北、北東部には認められない。床面は地形に添った斜面を呈し、約10度を測る。竪穴の平面ブ

ランは方形に近く、2×2.5mを測る。堅穴の内部には、P₁・P₁₁の小ピットがあるが、いずれも浅穴であり、堅穴外周に沿ったP₂～P₁₃などが上屋を支えたものと推定される。堅穴内より数点の弥生土器が検出されている。この様に小型であること、柱穴を見ないこと及び炉址がないことなどから住居址とは考えられない。なお5号環濠によって北側を切られたものと推定される。



番号	深さ	底部標高	番号	深さ	底部標高
1	9	3993	8	26	4025
2	10	3991	9	13	4053
3	12	3990	10	13	4054
4	14	3989	11	7	4013
5	11	4038	12	20	4036
6	14	4003	13	18	4030
7	16	4017			

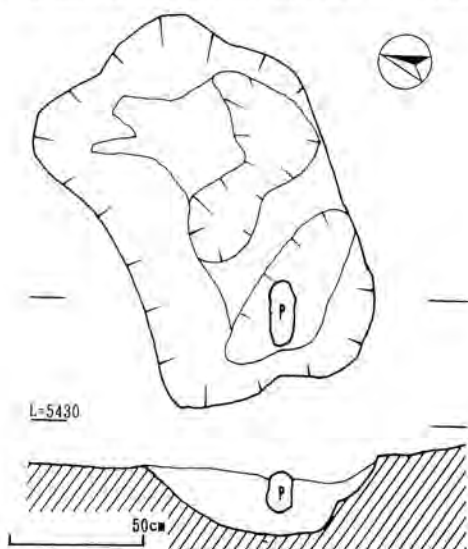
第67図 SB10号小型建物址平断面図

SK1号土坑（第68図、図版22-2） 北確認調査区域BトレンチB-12区に位置する。形態は方形に近く、0.8×1.5mを測る。底部は2ヶ所に分かれ、30cmを測る。カメ形土器が検出された。

後述する土坑、焼土坑など13基を見るが、弥生時代と推定出来るものはSK1号土坑に限られている。

SX4号遺構（第21、45図） 北確認調査区域内Aトレンチc-33区に中心を位置する。ピット群を伴う窪み状の遺構である。SI8号住居址の南側に当たり、当住居址の関連遺構とも考えられるが、おびただしい多量の土器を伴っていることから単独のものとして取り上げることにした。窪みは幅60～70cm、長さ2.5mで谷側は流出して不明瞭だが末広がり状に開けており、

深さは10～15cm程と浅い。この溝状の窪みを取り巻くように13ヶのピットが巡る。付近にはピット群があるが、小型の楕円形の小屋組が推測される。



第68図 SK1号土坑平断面図

番号	深さ	底部標高	番号	深さ	底部標高
A	14	3966	H	19	3992
B	17	3967	I	22	3980
C	30	3964	J	8	3994
D	12	3988	K	12	3963
E	12	3994	L	10	3960
F	13	4001	M	11	3952
G	10	4003			

環状ピット遺構（第69図、図版22-5） 南全面調査区域の大グリット I-25-20区におけるピット群内にある。南西向き斜面上で、その傾斜が上方の18度から26度に勾配を増す地点に位置する。遺構は口径が18cmから25cmを図る8箇のピットがごく接近して環状に並び、その外径は南北1m、東西90cmを測る。ピットの深さは一覧表にしたが、地山の傾斜度を加味しなければならないが、P₁の40cm、P₁の33cmを測るように、ある程度の高さを有するものが建てられたことは知られる。いまその構造物を推定できない。

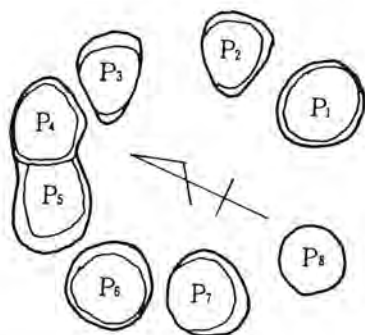
ピット群 調査地点の各所でピット群が検出された。各々のピットの関連は不明であるが、主なピット群の位置を記録しておく。

北確認調査区域のAトレンチ内のピット群を第1～第6群とした。第1群はh-21区に位置し、S I 2号住居地に伴う排水溝の背後に接している。第2群はe～g-24、25区に広がる（図版22-3）。第3群はe-26、27区でSD 1号環濠の南開口部に位置する。第4群e～g-29、30区、第5群はd-32区に中心をもちS X 17号に接している。第6群はd-34、35区で特に集中している（第21図参照）。

Bトレンチではごく小数の1群を認めるのみであり、A-20区、S I 6号住居地背後のもので、これを第7群とした（第22図参照）。

CトレンチにはH-13、14区にやや閑散と見えるが、これを第8群とした（第23図参照）。

南全面調査区域では第9群から12群の4群が見られた。第9群は大グリット I-23-24区の上層部に認められたもので、前述したS I 26号住居地に重複するピット群である（第29図）。第10群はI-24-40区からJ-24-31区に及ぶ平坦地に位置する（第25図）。第11群はI-25-11、20区に広がり、南西向きやや急斜面である。前述の環状ピット遺構を含む（第25図、図版22-4）。第12群はI-26-23区で山頂平坦部の南西側端部に位置する。

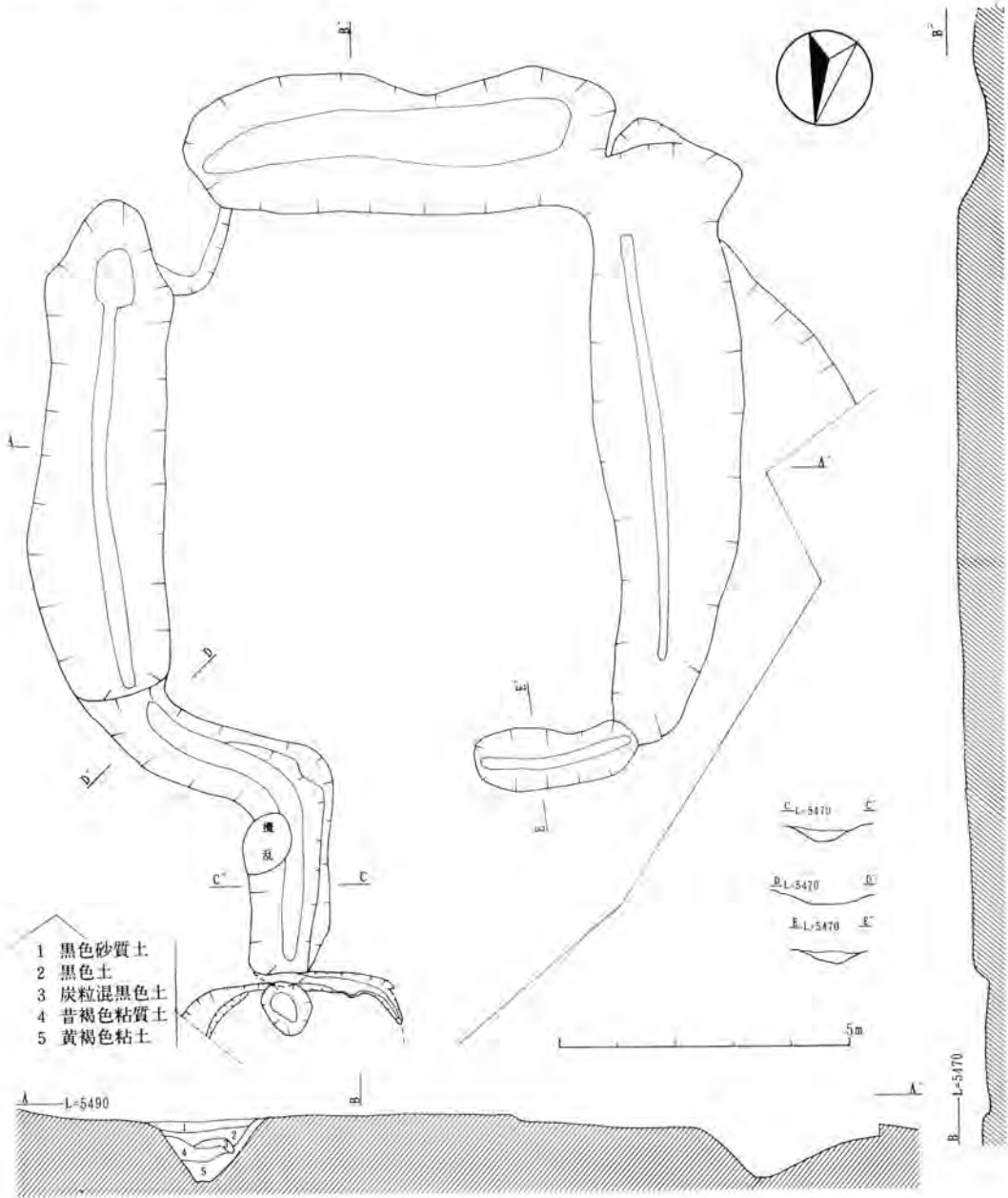


第69図 環状ピット遺構（1/20）

番号	深さ	底部標高	番号	深さ	底部標高
1	40	4290	5	18	4300
2	18	4312	6	7	4298
3	22	4298	7	12	4291
4	33	4297	8	16	4287

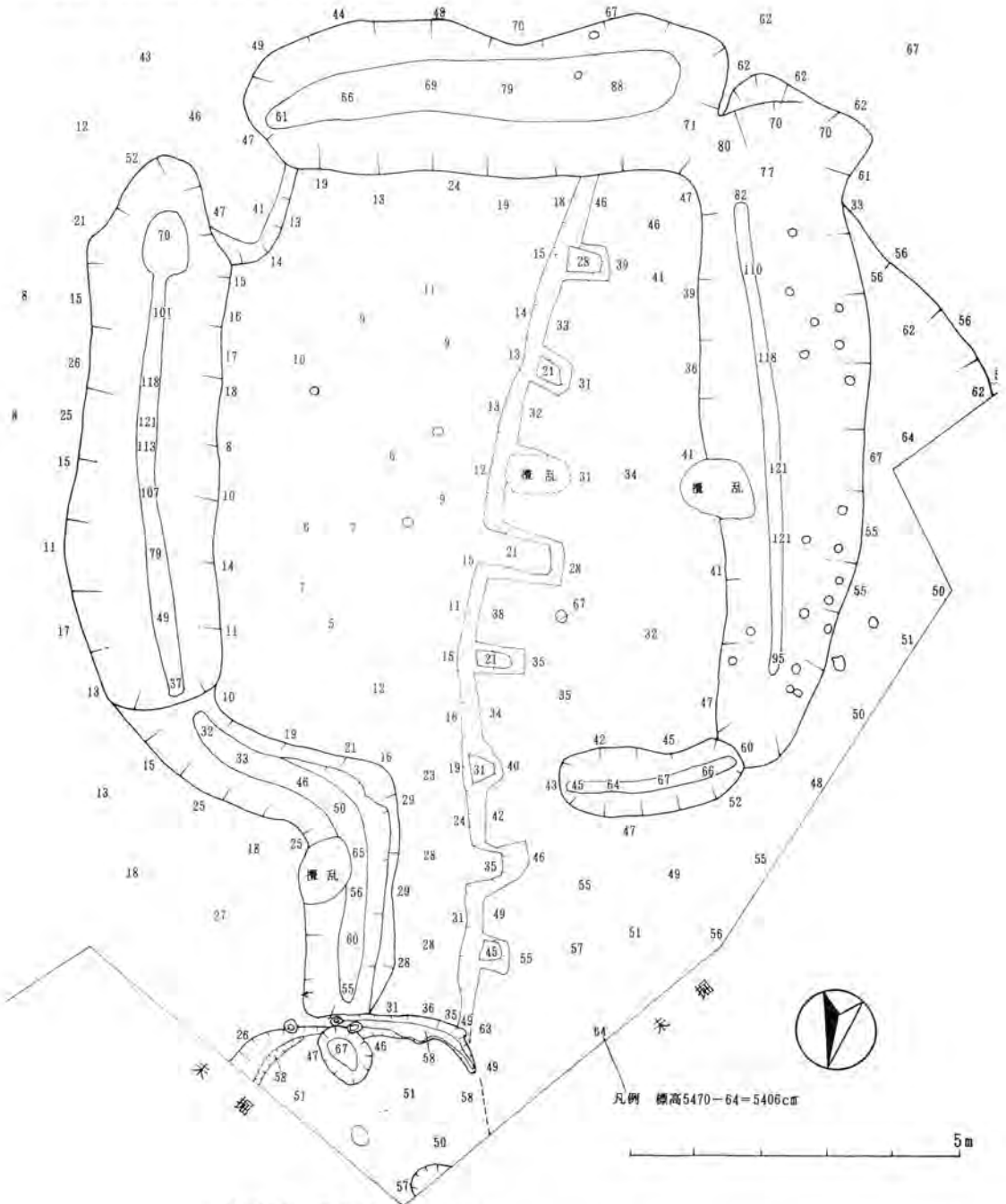
D 前方後方墳 (第70、71図、図版23)

北確認調査区域BトレンチA・B-8・9区に中心を位置する。この地点は北区域における山頂平坦地のやや西寄り、僅かに南西へ向いて下り始め、山頂の54.86mより20cm標高を下げた



第70図 前方後方墳平断面図

地点である。Bトレンチの幅員一杯に方形の周溝と推定される遺構が検出された。この溝の未知の部分を確認するため、南北両側を拡大調査した結果、ここに報告する前方後方墳とS I 23号住居址が確認された（第22図参照）。前方後方形とは方形の主体部分の前面に方形の張り出し部分が接合する形態のものと呼称している。



第71図 前方後方墳平面図
(数字は基点=54.7mより下がった数値を示す)

遺構は前方部をほぼ北に向けて位置し、その正確な主軸はN11度W（北に対して11度西側に向いている）である。この規模は全長13m、後方部長軸9m、同短軸7.5m、前方部長さ4m、幅員は後方部との接点で2.5mを測るが先端部の西側は把握出来ない。明らかに残存するのは後述する削平より免れた1.5mである。周溝は前方部については東側にのみ見られるが、北側に当たる前面及び西側面には認められない。前方部の周溝は後部のものに連結しているが、その他の周溝は四隅が切れるもので独立している。それぞれ多少の異なりを見るが、両端が徐々に浅くなる舟底形を呈している。前方部の溝はU字状の断面を呈し、幅は1.2~1.4m、深さ25~38cmを測り、それに結続する後方部の溝は幅1.2m、深さは20~25cmである。後部前面西側の溝は幅0.9~1.05mで、深さは22cmを見るが端分は一気に浅くなる。後部後方の溝は2.05~2.4mの幅をもち、底部も最大1m幅を呈するU字状で、西隅が最も深く東側に向かって徐々に浅くなる。その深さは60~42cmである。東側の溝は幅2m~2.25mで深さは中央部で1.13m、北側で27cm、南側55cmを測る。底部の幅は南端で広がるが25~30cmでV字状を呈する。西側の溝は幅1.6~2.6mと最大幅を呈し、深さは上部の削平によって80cmであるが底部の標高は東側と同一の53.49mである。両端は東側に比較して深い。底部は18~23cm程と狭く断面は内側は急角度を呈しているが、外側は緩いならかな傾斜を呈している。この外側の立上がりに関しては、位置的に異なりを見、中間より大きく外側へ広がる部分などもある。このことは第71図に示した小ピット群と共に、後の時代に削られた可能性があり、本来は内側同様の立上りを呈するV字状の溝であったものと考えられる。これらの周溝はそれぞれ四隅で切れるものであることは前述したが、それぞれの先端部が重なり特に南西隅はその一部がほぼ連結した状況にある。完全に分離しているのは南東側のみで、土橋状を呈している。この隅に当たる外部周辺は、南側の谷の上部端末に位置するものであり、一段と低くなるが、土橋部分をも削り下げた不自然な様子が見られる。

主格を成す前方部、後方部共ほぼ南北にかけてその西側を段切りされている。段切りは現代の畑作のためのものと考えられるが、第71図に示した如く約1.5m間隔の張り出しがあり、これにわかに畝跡とは称しがたい。いずれにせよ残存部分との比高20~30cmを見る。検出できたこれらの地表面は共に地山面で、盛土は全く見られず、僅かに6~22cmの厚さの表土を見るに過ぎなかった（第17図参照）。主格部には主体部を見い出せず、従って3本のトレンチを試みたが検出されなかった。また周溝掘込みの残土の所在も不明であり、当遺構を含めて山頂一面が畑地造成による削平が成されたものと推定される。

前方部の先端部分に接してS I 23号住居址が検出された。前方部東側の周溝の上部が住居址の壁部中央に接するものであり、住居址が先行する。この住居址床面の高さと周溝端部の底部との比高は8~9cmで床面が高い。また住居址壁溝との比高は3cm程低い（第71図参照）。

後方部東側周溝より11点程の土器片の出土を見た。また同後方溝より須恵器片2点がある。なお第71図に示した後方部に見られる3箇の小ピットは西側周溝内のものと同様後の時代のものである。また3ヶ所に示した攪乱箇所は全て杉の根株である。

3 時代の異なる遺構

A 土 坑 (第72図)

SK 5号、SK 13号の2基の土坑がある。南全面調査区域のJ-24-33区にSK 5号、同J-25-1区にSK 13号が位置する。共に南向きの緩い傾斜地である(第25図参照)。

5号土坑は円形を呈し、底部に凹凸がある。上口155×140cm、底部135×135cmで、深さ15～22cmを測る(図版24-4)。

13号土坑は方形を呈し、底部は平坦である。壁面にかけて小ピットが見られるが、この位置が全項で記述した第11ピット群にあたることから、この小穴は関係ないものと考えられよう(図版22-4参照)。

これら2基の土坑は、覆土は明褐色で炭混りの状況から弥生時代の遺構とは考えられず、ごく最近のものと推測され、その用途は簡易木炭炉と考えられよう。

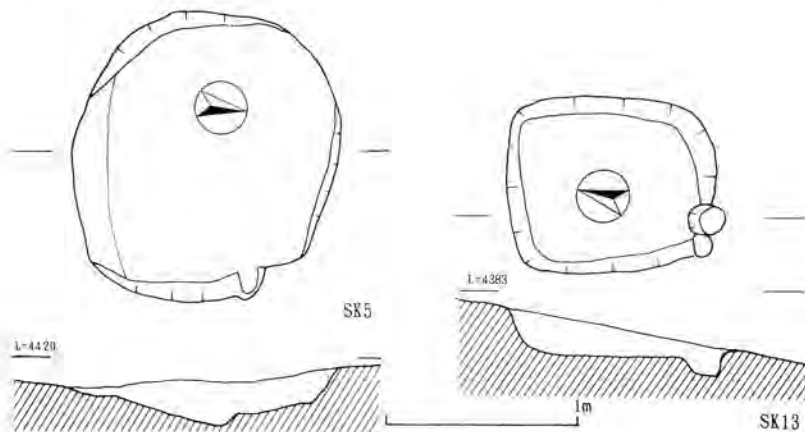
B 焼 土 坑

北確認調査区域に於て3基の円形の焼土坑が検出された。当時これらの焼土坑は初見のものであり、弥生時代に於ける屋外の炊飯施設を想定し、「性格は不明だが」としながらも炉址として報告したものである(川上1998・1990)。その後、これらの焼土坑が各地で検出されることとなり、弥生時代の遺構から除外して報告するものである。

なお図示した覆土の土層は次の通りである

1. 暗褐色土層
2. 炭混入暗褐色土層
3. 炭混入黄色土層
4. 焼土

ここで報告する焼土坑のうち、SK 2～4号焼土坑は、時代を特定出来ないが簡易木炭炉(木炭焼穴)であると考えられる。SK 11号焼土坑は必ずしもこの限りではないので次章に考察するものである。なお、第28図に示したSK 6～10号の6基を検出したが、調査していない。



第72図 土坑平断面図 (SK 5・13号)

SK 2号焼土坑(第73図 図版22-6) Aトレンチe-27区に位置し、やや急斜面を円形に堀込んでいる。直径1 m、山側での深さ25cmを測る。床面は凹凸が見られ、また直径5 cm程のステッキホールが2ヶ見られる。床面の一部と壁面の山側が焼けている。

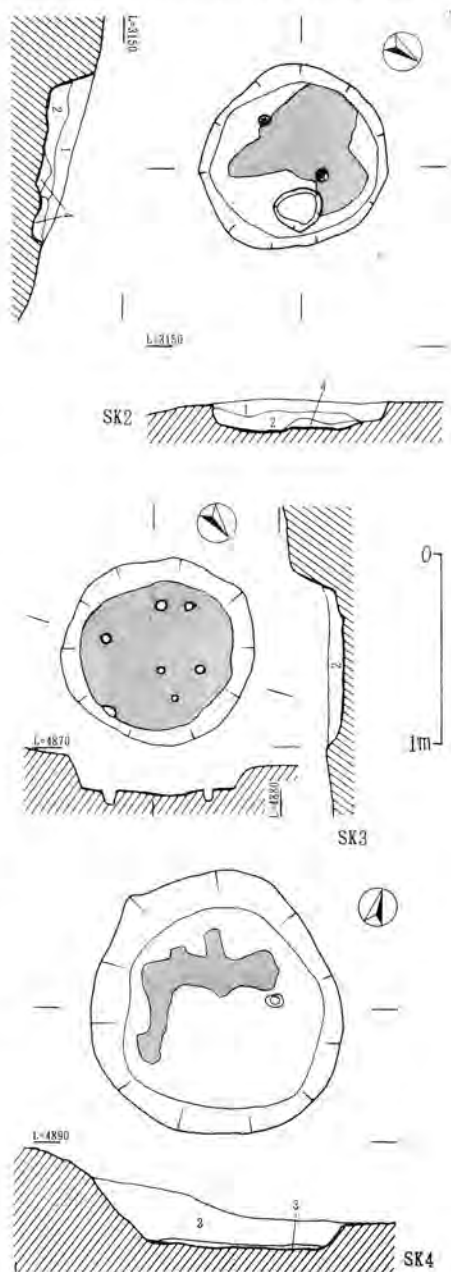
SK 3号焼土坑(第73図 図版22-7) DトレンチH-21に位置する。緩斜面を円形に堀込み、直径1 m、深さは山側で22cmを測る。床面はやや中弛みの平坦で、7ヶのステッキホールがある。ホールは直径4~6 cm、深さは6~8 cm程で、不規則に配置している。床面全体と山側の壁面が焼けている。覆土より弥生土器片が出土したが、後の流入と考えられる。

SK 4号焼土坑(第73図 図版22-8) DトレンチG-21区に位置し、SK 3号とは3 m程の距離にある。緩斜面を円形に堀込み、上口で135cm、内径1 m、深さ30cmを測る。なお山側上部で流出が始まっている。底部はほぼ平坦で一部分が焼け、谷側(手前)に寄って10×7 cmの小ピットがある。

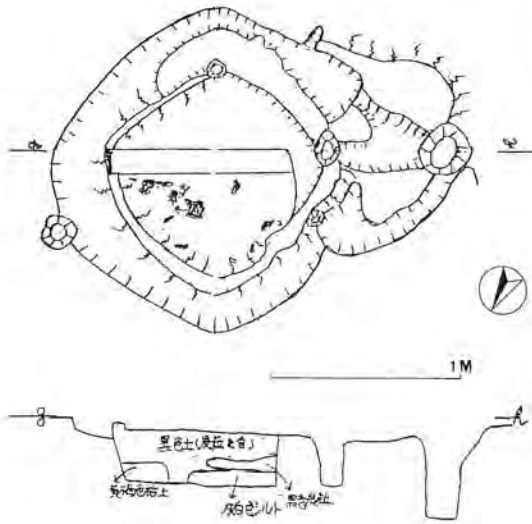
SK 11号焼土坑(第74図 図版24-5) 序章で記述した如く、荒木繁雄氏による第4次確認調査によって検出された遺構である(第3、74図参照)[荒木1988]。この報告の結果、一部に「烽火台」として問題を提起した遺構である。小生等の第6次調査によって再検出したのは次の如くである。

南全面調査区域の大グリットH-28-16、17区に跨って位置する(第30図参照)。ここは南区域内にある南東側のピークに続く瘦尾根上にあり、南北両側を眺望することができる。

検出した遺構は僅かに南下りの地山面に方形の炭化物を残すもので、土坑状は呈していない。炭化物の広がりはやや歪んでいるが三角形に近く、一辺がそれぞれ1 m、80cm、70cmでこの範囲内にサブトレンチが入れられているものであった。これらを覆う周辺の表土は木の葉などのゴミ混りのもので旧表土などは把握されなかった。即ち一部が破壊されたことであるが、このことに関してはI-2-E(5頁)に記述した。

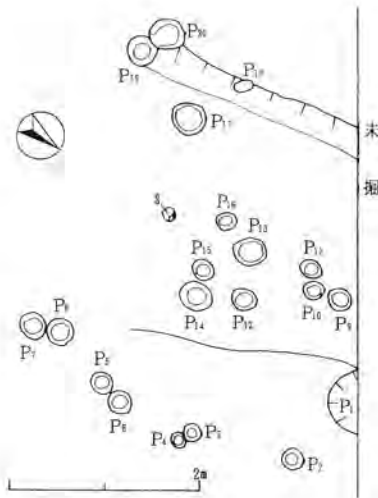


第73図 焼土坑平断面図 (SK 2・3・4号)



第74図 SK11号焼土坑平断面図(烽火台)
 (「新津市F・H地区遺跡確認調査報告書」より)

番号	深さ	底部標高	番号	深さ	底部標高
1	3	3968	11	25	3977
2	36	3932	12	26	3976
3	22	3948	13	37	3965
4	11	3957	14	32	3970
5	9	3958	15	58	3944
6	14	3960	16	25	3977
7	13	3961	17	9	3992
8	15	3952	18	4	4046
9	23	3978	19	16	4015
10	23	3979	20	19	4030



第75図 SX1号遺構平断面図

第6次調査に於る破壊前の遺構を荒木氏の報告を借りて記述しておく。それによれば「約80cm方形の粘土で作った炉壁をめぐるし、内側は赤褐色に焼けており、焼土となっている。底面はほぼ平坦で地山は灰白色シルトで地山を掘りこみシルト層にいたっている。-中略-この遺構は長い間この中で火をたいた事実と、ピット、炉の外側の掘り込み等から雨水が流れこむことを防ぐなんらかの建物があったことを推定できる。」とある。この報文と第74図を見た時、この炉床は断面図に見る方形の落込みの底部と錯覚する。しかしながらこれは炉床を裁割ったサブトレンチの断面図であって、炉床は最上部の水平の線である。この炉の外周には深さ10cm幅20~30cm程の周溝があり、「粘土で作った炉壁」は高さ5cm、幅6~7cmのものであることが分かる。なお平面図に見られる5ヶのピットの内1ヶ以外は炉に接しておるか又は至近距離にあり、建物とは考えにくい。

C 古代の遺構

4カ所から奈良・平安時代の遺構・遺物を検出した。これらはいずれもその性格を把握出来る状態ではないが、生活の場の一つ、即ち仮の住居の一種と考えられるものである。

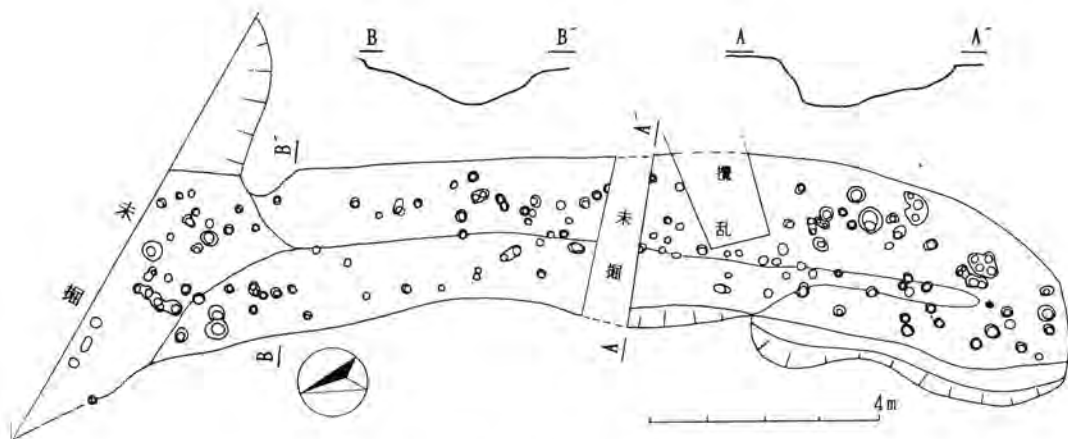
SX1号(第75図 図版24-1、2)北確認調査区域内Aトレンチg-27、28区に位置する。これは前項で記述したSD1号環濠の上層部に当り、環濠は完全に埋没した状況の上に築かれたものである。検出した遺構は東向きやや急斜面の背後を削って前面にテラスを造り出している。この削平は未掘部分の北側に続いている。テラス

の幅は南側で2.6m、北側で2mと狭まっており、検出した横幅は2.5cmである。このテラスに多数のピットが不規則に見られ、さらにテラス下の斜面に2ヶ1組のピットが1列に並んでいる。このテラスに直径15cmの河原石が1ヶ見られ、何等かに使用されたことが推測される。また土師器の胴長甕をはじめ複数の土師器を検出した。

SX 2号遺構（第76図、図版24-3）北確認調査区域内BトレンチB-4区に中心をもって位置する。山頂部に近い南西向き緩斜面の一部分を削平してテラスを造り出している。この周囲は後の畑作による段切りが複雑に行われた様子が見られ、辛うじてテラスの造成を認めることが出来る。検出されたテラスは横幅6cm程でなおも南東側へ続いている。5ヶのピットが見られるのみであり、全容を想定出来ない。壁寄りに埋甕状の土師器甕が検出され、須恵器の坏の出土を見た。



第76図 SX 2号遺構平断面図



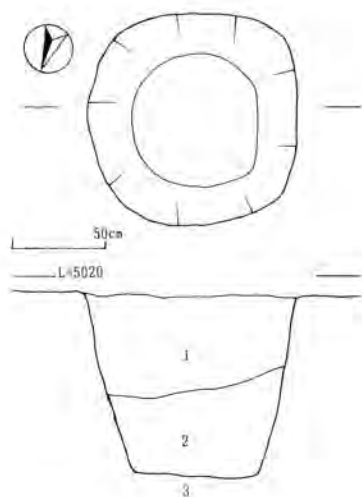
第77図 SX 3号遺構平断面図 (SD 5号上層部)

S X 3号遺構（第77図、図版25）南全面調査区域内大グリットH-26で検出されたS D 5号環濠の中間層を利用したピット群をもつ遺構である。S D 5号環濠に関しては前項で記述したことではあるが、瘦尾根を切る状態を呈し、南北に約16mである。この環濠の深さは120～130cmであるが、その底部が中間辺りの70～80cmを残すまでに自然埋没が進行した頃、この窪みを利用して何等かの構造物が築かれた様子が無数のピット群から推測される。ピットは濠内のみならず、北側のなだらかな谷にも続くかと推定される。この遺構時点での床面より、回転糸切底を呈する土師器の坏3枚が伏せ重ねられた状態で検出された。

S X 5号遺構（第71図参照）改めて図示しなかったが、S X 2号遺構の背後に当る前方後方墳の西側の周溝を利用したと思われるものをS X 4号遺構とした。溝の外側を削り落して傾斜を緩かにし、そこにピット群が見られる。ピットは21ヶで主に溝の外壁に集中している。須恵器の広口壺片が出土した。

D 近世の遺構

S K 12号近世土壌（第78図、図版24-6）南全面調査区域内大グリットH-28-6、7区に位置して検出された土壌墓である。前述のS K 11号焼土坑に隣接した位置で東側へ続く瘦尾根で南北の眺望が良い。この開発が行われるまで東方向きに墓標が建てられていたが移転されたと言う。墓標は凝灰岩製の円頭形の小型石塔である。土壌は図示した地山の3. 灰白色砂質土を深く掘り込んでいることから縦形棺を納めたものであろう。なお覆土は、1. 灰白色砂質土と黄白色粘質土の混土層、2. 灰色砂質土である。遺物はなく、また墓標移転に際しては下層部に手を入れていないと言う。なお「江戸への街道の見えるこの地へ埋葬してほしい」との遺言によって建立された墓地だと言う。江戸時代末期のものとして推定される。



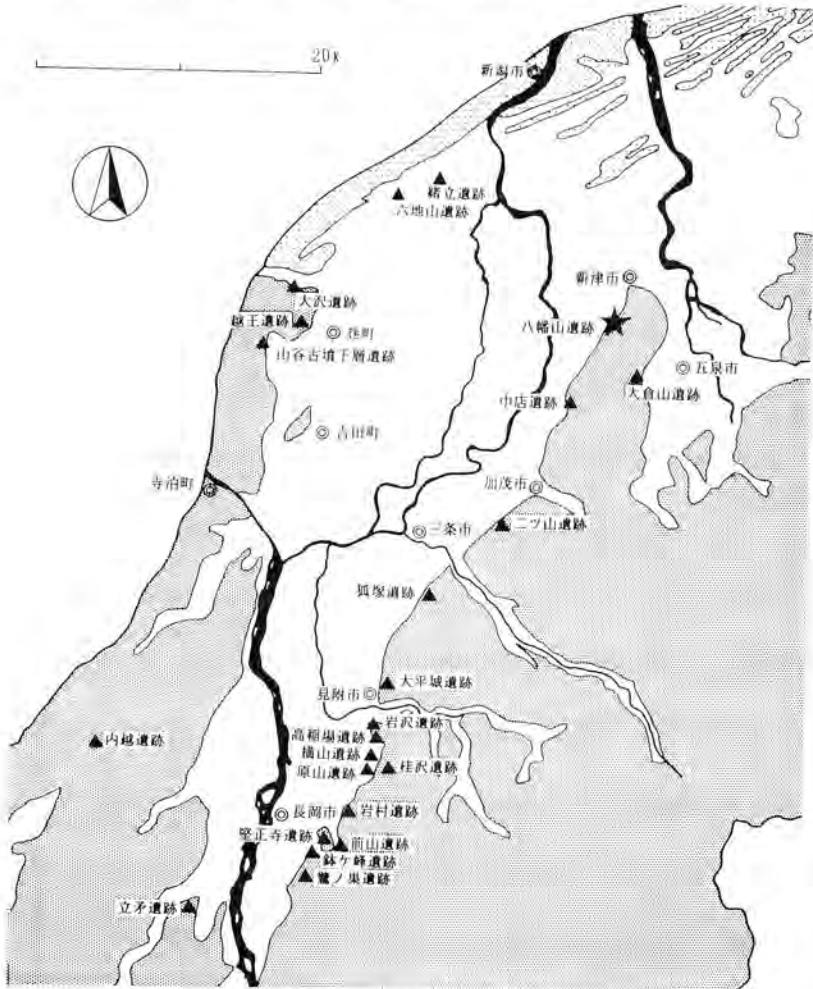
第78図 S K 12号近世土壌平断面図

V ま と め

1 八幡山高地性環濠集落とその時代

八幡山遺跡の調査の経緯、経過と遺構について報告を行って来た。しかしながらI-2-G(7頁)に記述した如く出土遺物を観察する機会を失したことは遺憾の限りである。現地での検出時点における客観的な捉え方では、北陸系の土器が主体を占め、東北系の天王山式土器も交わっていることが知られる。これらの土器の大雑把な年代観は、弥生時代の6期区分に従えば、後期前半のV期を中心にもち、後期後半のVI期に存続するものと考えられた。

これよりいまひとつ早い時期のⅢ期・Ⅳ期に北九州を始め瀬戸内海沿岸や近畿地方に、周りに



濠をめぐるせた「環濠集落」や、丘陵や山頂上の「高地性集落」が発達した。またこれらの地域では八幡山遺跡と同時期のV期に入って再度高地性集落が出現することが明らかにされている〔佐原1989〕。そしてこれらの集落には多くの石鏃を中心とした石製武器と豊富な生活遺物との出土を見ることから、臨時に短期間の生活の場ではなく、軍事的緊張に際して長期に亘って生活した集落であることが明

第79図 新潟平野における弥生時代後期の遺跡分布図
(新潟大学考古学研究室資料) 一部加筆

らかにされている。平地に於ける環濠集落や高地に所在する高地性集落、及び高地に於ける環濠集落などを合わせて「防禦的集落」と呼んでいる。

弥生時代における軍事的緊張として『後漢書』東夷伝で言う「倭国大乱」であり、卑弥呼が女王として共立されるまでの争いであり、『魏志』倭人伝に記される卑弥呼没後の政権獲得のための争乱、さらには大和政権の全国覇権のための争いなどがある。佐原眞氏は「考古学的に戦争が実証できるのは、日本では弥生時代からである。中国の史書という「倭国乱る」・「倭国大いに乱る」は、弥生時代の戦争を記録したものである。農耕社会以来、戦争が始まったことは、全世界を通じて考古資料をもって証明できる。土地争い、水争い、穀物・家畜・宝器・祭器の奪いあい、村からさらに大きなまとまりへの連合・対決等々、農耕社会は、戦争をもたらしたのだった。」と記述なされている〔佐原1989〕。

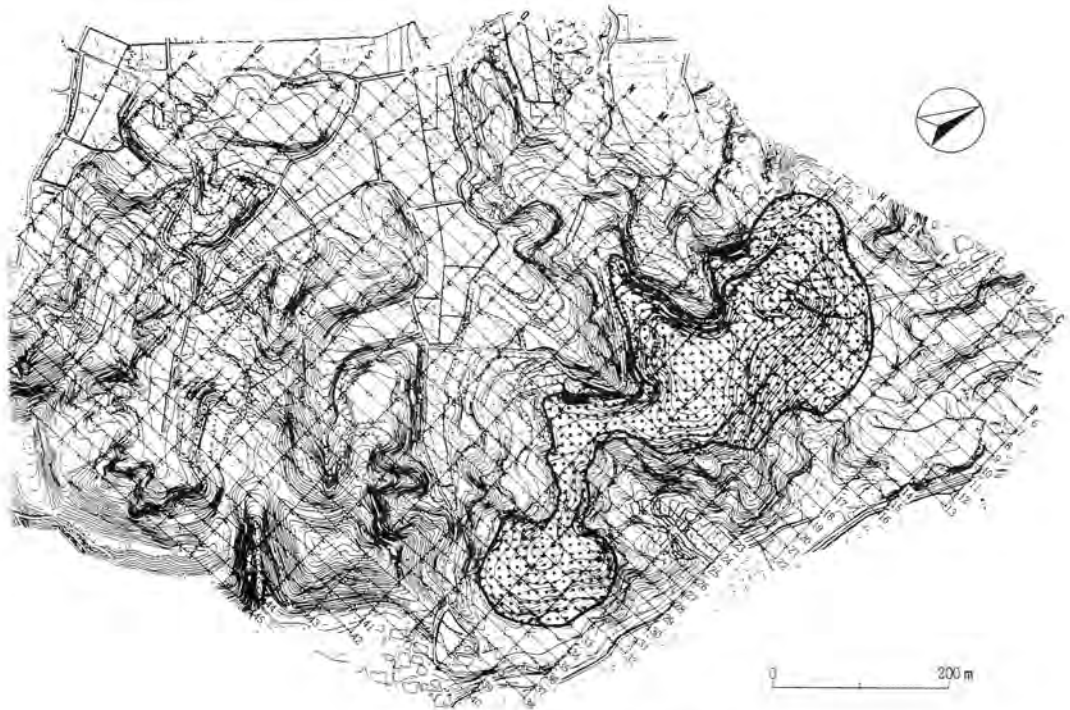
1980年代を主体にして新潟県内でもいくつかの高地性集落と、台地・底丘陵上の環濠集落が調査されている。斐太遺跡（新井市）、大平城遺跡（見附市）がいわゆる高地性集落であり、横山遺跡・原山遺跡（長岡市）、西岩野遺跡（柏崎市）は比高6～20mの台地・丘陵上のものであり、萱場遺跡（柏崎市）は沖積地の平地に立地するものである〔坂井他1988〕。この他近年奈良崎遺跡（和島村）、後生山遺跡（糸魚川市）、大沢遺跡（巻町）、大倉山遺跡（五泉市）などの高地性集落が報告されている。八幡山高地性環濠集落は正にこの時代を明らかにする遺跡であり、出土した多数の大型の石鏃は戦闘用の武器に他ならない。そして新潟平野を一望のものにできるこの肥沃な大地を拠点とした部族は、軍事的、経済的に新潟平野最大級の部族と発展したものである。これらの遺跡の年代はその詳細に関して不明であるが、加賀地方の土器編年の「法仏式」→「月影式」→「白江式」〔田島1986〕の範疇に同定され、弥生時代の6期区分によるV期に発生し、VI期に継続したことが伺われる。県内の高地性集落の成立は、土器形式に見られる影響と同様に北陸地方より伝播されたことは言うまでもないことであるが、その時間差も殆んど同時である。因に石川県における高地性集落からの出土土器は「法仏式」を主体としており、その廃絶は遅くとも「月影式」（並行）期をさして下らない頃と考えられている〔栃木1988〕。この様に殆んど同時に行われた防禦的集落の廃絶は国家成立などの新しい発展によるものと考えられよう。

2 八幡山遺跡の諸問題

A 遺跡の広がりや環濠

八幡山遺跡の調査面積はごく限られたものであってその全体を把握していない。しかしながらこれまでの調査と踏査によって、その広がりや頭初考えていたものとは大きく異なり、第80図に示した如く南北600m、東西最大幅250mを計る実に83650平方m余と推定することが出来る。これまでの最大規模と見られる斐太遺跡が推定32000平方mであることから見ても大遺跡である。前章で報告した環濠は5カ所であり、この内2條は尾根を切断するものであり、その他は北地区でのもので断片的であるが内外2條の濠が廻るものと推定され、SD2号環濠が標高51mライン

の山頂部分を、同1号と3号とが連結して40mラインの山腹を廻るかに推定される。さらにI-2-Fの末尾で触れた如く第6図の北側に示したA・B地点が環濠のなごりを呈している。ここは現在、古津集落から東側の割町地区へ抜ける小路となり、近隣の人々の日常の作業道である。この小路は第80図の北側の遺跡の限界を示す曲線上にあり八幡山古墳(円墳)の麓を廻る標高25m線に沿って認められるものである。この内A地点では東側へ落ちる谷に直角に向って深く落ち込む濠が認められ、小路と直結する。現在はこの濠の東側肩部に踏跡があり通路となるが、昔時はこの濠の中を通行したと言う。濠は長さ11m、幅3m、深さ2.9mを測り、自然のものとは考えにくい。B地点は山腹に近い状況を呈する竹林であるが、僅かに切通し状を呈する小路である。この様な通路に切通しは一般的に考えられない。民俗学的には多量の木材の搬出(土引法による)以外には考えられないが、この地形では古津側へ引き出すことが常識であり、この地を搬出に使用したことは考えられない。さらにこの地点を通過したであろうと推定される円墳の東側に位置して近現代(むしろ大正・昭和初期)と推定される瓦窯址の存在が推定される。瓦窯業に於てはその原料、製品共に重量物であるが、これによって小路に切通しが作られたとは考えられない。当調査団顧問乙益重隆氏の実見を述べた上で第3条目の環濠と確信するものである。この小路に関して川村浩司氏は「古墳の形状を意識したもの」としているが〔川村1992〕、古墳以前の窪を利用したものであろう。8号住居址が2号環濠外部の25m程の地点に位置し、当時いくつかの疑問を感じたが、このA~B地点に外濠を見て納得する。南確認調査区域の山麓にかけても



第80図 八幡山遺跡範囲予想図

も濠の可能性があろう。いずれにせよこれら三重の環濠が同時に築かれたものとは考えられない。内濠である2号環濠の底部に水平面があり、その他はV字状を呈する。この形状の差と時期差を見極めたいところであったが、各地域に所在する住居址からの出土土器の比較検討が出来ないでいる。推測の域を出ないが、次第に募る軍事的緊張の高まりによって、周辺の小集落が序々に集結し、大集落に団結して行ったものと考えられる。

B 住居址について

住居址の殆んどが隅丸方形を呈し、僅かに18号住居のみが方形を呈するかと思われる。傾斜地に建つこれらは、その谷側の一部を失っているものが殆んどだが、等高線に沿ってやや広い隅丸の矩形を呈する。谷側の床面が完全に掘込まれるまでに深い堅穴は見られず、傾斜の強い位置のものは多少なりの盛土が行なわれたと推定される。最も傾斜の強い1号住居址に於ける現況から盛土は考えられず、一部が高床形式であったものと考えているが実証は出来ない。

住居址内の施設に張床、敷床、壁溝、炉、貯蔵穴などが見られる。張床としては9号住居址があり粘土張りが見られ、敷床では25号住居址の褐鉄鉞の礫が見られる。湿気除けに使用されたものであろう。壁溝は言うまでもなく湿気、水分の除去と同時に壁面に張りつけた板や樹皮等を固定した跡とも考えられるものである。炉は床面のほぼ中央部に位置し、床面を僅かに窪めたものの他は焼土面として残るのみで、周囲などに手を加えたものは見られない。貯蔵穴の位置は壁面に添うもので、山側と側面とに分けられる。この位置によって出入口は左右どちらかの側面であることが容易に推測される。この他床面施設ではないが、背後に半円状の排水溝を持つものも数基見られた。

北区域での住居址の配置は2号環濠（内濠）内側と推定出来るもの9基、この外側と推定できるもの10基で、共にかなりの密度であったことが知られる。

C 前方後方墳について

八幡山遺跡で検出した「前方後方形」の墳墓（「周溝墓」「墳」）に関しては、すでに広井造氏によって専門的立場から論考が加えられている〔広井1991〕。

弥生時代に入って固有に発達した墓制の一つに「周溝墓」・「台状墓」がある。これらは古墳時代に向ってさらに「台状墳」・「古墳」へと進展したと考えられている。八幡山の山頂で検出された「前方後方形」の墳墓は検出当時その形状から「前方後方形周溝墓」として発表した〔川上1988〕。その後調査が進行して行く中で「周溝墓」に疑問を抱き、「前方後方墳」と名称を変更した〔川上1989・1990〕。これら周溝墓、台状墓、台状墳などの名称の概念に不安を持つものがあるが、鈴木敏弘氏提唱の分類として次の様にある〔鈴木1975〕。ここではその要点の一部分について記載する。

周溝墓 埋葬施設は原則として地山へ掘り込むが、盛土が発達すると封土中に主体部がある。

台状墓 地山を整形して立体的墓域を形成する。盛土は未発達である。

台状墳 埋葬施設を墳丘（封土）中に設けるため、最初から盛土を計画的に行なう。

古墳 原則として台状墳であること。古代国家形成期に、政治的秩序に利用されたものに限

定する。

とある。

次に「周溝墓」に関する概念については、弥生時代前期後葉には発生し、古墳時代後期まで存続する。その立地は「低地上に営まれたものは弥生時代に、山丘尾根上に存在するものは古墳時代のものに多い」との指摘がある〔沢田1967〕。

さらに周溝墓が家族墓であり、共同墓地的で集落に添って群をなして営まれるものが、やがて首長とそのまわりの人々が集落を離れて丘陵尾根上に営まれ、さらに首長個人のための墓が共同集落から仰ぎみられるような位置に営まれると、周溝墓から古墳への連係を指摘されている〔水野1972・井口1972〕。

これら先学の論理に基いて、八幡山の墳墓を考えた時、「前方後方形周溝墓」から「前方後方墳」へ改名した。これは鈴木敏弘氏の分類による「台状墳」を想定してのものである。

八幡山前方後方墳は北確認区域の山頂部に位置する。墳丘部と地山の表面の一部分が畑作によって削平され、封土を見ることはできず、また埋葬施設も検出されない。調査範囲内では他の周溝遺構は検出されず、山頂部の広さから見ても単独の営みと推測される。検出時点に於ける状況で周溝の掘揚土量は約21.93立方mで、仮に後方部墳頂の67.5平方mに積んだ場合の単純計算では32.5cm高くなるだけである。しかし造営時点では周囲の土を盛り上げて墳丘を呈したと考えることは容易である。この前方後方形墳墓の前方部分に於ける周溝は一部分に見られるのみで一周しない。北側の一部は竪穴住居址に接して落ち込むが北及び西側には見ない。名称はともあれ、前方後方形の墳墓（古墳は除く）は県内には類例を見ない。私共が直接知り得た類例は、福島県会津坂下町の宮東遺跡2号周溝墓、同町、男壇遺跡2号周溝墓、同4号周溝墓である〔古川・和田・高橋1990〕。しかし宮東2号周溝は河岸段丘上ではあるが水田下に没する低地に立置し、男壇2号周溝墓、同4号周溝墓も河岸段丘上であるが阿賀川の氾濫原との比高は5m程の低地である。またこれら両遺跡とも群集墓の形態を呈している。

この他、広井造氏は類例として次の4遺跡、即ち、愛知県土田遺跡周溝墓、群馬県鈴木宮遺跡4号方形周溝墓、同下佐野遺跡I地区C7号墓、同東原B遺跡17号周溝墓を掲げて論考を加えている〔広井1991〕。

八幡山前方後方墳の周溝内での出土遺物に弥生の土器片約11点がある。これらの遺物の一部が伊与部倫夫氏によって報告されているが〔伊与部1989〕、この作図の中で擬凹線のめぐる土器を広井造氏が指摘している〔広井1992〕。擬凹線の土器は八幡山高地性集落の発生時点へも遡り得るものである。然しながら周溝出土の土器はいずれも覆土の中から単発的に検出されたものであり、この墳墓と直接結びつくものではない。

石川日出志氏の御教示に依れば、これら前方後方形の墳墓は全国的に見てVI期の最末期を遡り得ないもので、八幡山遺跡でも高地性集落廃絶後の造営と見るべきものである。軍事的緊張の時期を終えて底地の生産活動に戻った時、より大きな集団となり、その首長墓を山頂へ造営したものであろう。

D 古代の遺構について

須恵器やロクロ土師器（奈良・平安時代の土師器）を伴う幾かの遺構を報告した。この内S X I号、同2号は堅穴の検出に難点を見、また炉址、あるいは竈の検出もできないものであるが、住居址とまで行かなくとも、生活の場であったことが考えられる。一方S X 3号、同5号は環濠や周溝の窪みを利用したもので、これらも仮の生活の場と考えられる。八幡山遺跡一帯は古代から中世にかけての製鉄関連遺跡の密集地帯である。製鉄炉あるいは精練炉は山裾に位置するが、最も時間を要する作業は環元材である木炭の生産であり、山中のいたる所で伐材・運搬・製炭作業が繰広げられていたと推定される。これらの内、窯業の作業は数日間の昼夜を通しての作業であり寝食の場が必要であった。因みに現代では「居小屋」の呼称の仮寝の小屋がある（五頭山麓地方）。現代的感覚では仮小屋あるいは仮住居であるが、古代に於いては閉山までの定住の住居であったと推定することは容易である。

E S D 11号焼土坑と狼煙台

弥生時代に於ける狼煙台、烽火台と呼称されているものは九州や瀬戸内海地方の高地性集落で報告されている。

第4次確認調査で検出されたこの焼土坑がいつしか狼煙台として一般に認識される様になった。おそらくマスコミに取扱われたことも大きな要因であろうが、調査団会議でもその可能性が示唆されたことも原因の一つであろう。このことから「なお流動的である」としながらも「烽火台」と報告した〔川上1989、1990〕。第4次確認調査報告書〔荒木1988〕に添付された断面図が一見して誤解されやすいことを前章で記述したが、さらにその報告を再検討してみたい。荒木氏は「この炉址は何のであるかそのきめ手となる資料が微弱で、文化行政課の山本、寺崎先生にみていただいたが確定することはできないとのことでした。その後写真、資料を持って新大の考古学教室、文化行政課曾和分室でみてもらったがよくわからなかった。しかしこの遺構は製鉄炉であろうとする考え方の人が多かった。下が大入製鉄炉であり、その関連遺跡である可能性が強い。一方坂井専門委員の話では、狼煙台の可能性もあるとのこと—中略—時代がさがって中世の狼煙台とも考えられるとのことでした。」そして荒木氏は「大入製鉄跡の関連で考えるべきである。」と結語している。この後、かなりの時間の経過の中で私共は周辺の製鉄関連遺跡の調査を経験して、この焼土坑を簡易製炭炉と推測しているが、いまひとつ不安がある。それは荒木報告書に「粘土で作った炉壁をめぐらし」とあることである。当時実見した限りでは削り出された地山の壁と思うのだが、築かれた壁だとするならば他の目的のものであろう。その後市教育委員会サイドで行われた熱残留磁気測定ではA D 580±50年・A D 770±70年の結果であると聞き及んでいるが定かでない。

F 焼土坑と簡易炭焼

木炭にはその製造方法によって幾種類かがある。一般的には白炭、黒炭と呼称されるものが主体であり、窯を使って木を蒸焼きにするものである。また窯を使わずに細長い穴を掘り、土を被せて黒炭を焼く簡易な法方もある。この他地表面で火を焚き、これを消して炭にすることもある。

この場合浅い穴を使用すればより効率が上る。「焼土坑」の多くはこの簡易炭焼きであり、この種類の木炭の正式名は不明である。この呼称は地域ごとに異なり、古津地域での名称は聞くことは出来なかったが、阿賀北地域では広く「千本炭」と呼ばれ、特に前者の「炭焼」と「千本焼」とを区別している。千本炭の原料は、白炭や黒炭の原料にならない様な細い材料を用いる。一般にはこの白炭、黒炭の原料の梢や、柴類、松や杉など用材の枝を用いた。

千本炭は近年まで主に暖房用としてコタツなどに使用されることが多いが古くは鍛冶などにも使用されたと聞いている。近年古津の居村遺跡や北沢遺跡（北蒲原郡豊浦町）などの製鉄関連遺跡の調査で多数の焼土坑が検出されており、中世、古代の製鉄関連にも使用された可能性がある。また上記の北沢遺跡では13世期の陶窯の灰原の中間層で焼土坑が確認されている（川上1992B）。

3 おわりに

八幡山高地性集落は日本海側の最北限に位置する高地性集落である。昭和62年の発見以来7年の歳月が過ぎたが、阿賀北地域にその報告を聞かない。防禦的集落の北限が阿賀野川南側を限界としたと見られ、中央政権の影響がこの地を限界としたことが推測される。この八幡山高地性集落を一つの拠点とした文化は、阿賀野川を遡り会津地方へと伝播し、北陸地方→新津→会津ラインルートを広井造氏は指摘している〔広井1992〕。阿賀野川が媒介する文化の交流は縄文時代から受け次がれたものである。

八幡山遺跡の北側端部に確認された古墳（円墳）は、その後新潟大学考古学研究室により測量調査が行われ、報告されている〔甘粕・他1992〕。この円墳は高地性集落の上へ盛土されて造営されたもので、二段築成の造り出し付円墳で、円丘部直径56m、造り出し部の長さ4～7mで、墳丘長60～63m、高さ2.5～5mを測る。現在確認できる新潟県内最大の古墳である。古墳時代前期に造営されたものと思われ、一定の政治勢力がこの地に存在したことを示唆する〔川村1992〕とある。

この円墳は八幡山山頂の前方後方墳に後続するもので、同一部族の関連も強い。1993年11月、八幡山西麓平野部にある「古津舟戸遺跡」の一隅の発掘調査が行われた。小規模の調査であったが、良好な住居址とおびただしい量の古式土師器の出土を見た。八幡山高地性集落から降りた人々の末裔であり、八幡山古墳を築いた人々の跡ではないかと推察している。

八幡山遺跡は文化財関係者や市民による保存運動によって、開発を免れ遺跡公園として保存活用されることになった。現在なおも範囲確認調査として環濠の追跡調査が行われ、SD1号環濠は北方へ100m程確認されたと聞き及び、調査はさらに数年先まで継続するとのことである。一方遺跡公園整備も着々と進められている。その中でその形態はともあれ一棟の堅穴住居と床面構造の模型が作成され展示している。

出土遺物の報告を欠いたこの報告書が、将来の遺跡全容解明の手掛かりになれば幸いと思う。

参考文献その他

- 甘粕 健他 1992 『古津八幡山古墳Ⅰ』新津市教育委員会
- 荒木 繁雄 1988 『新津市F・H地区遺跡確認調査報告書』新津市教育委員会
- 井口 喜晴 1972 「古墳の発生をめぐって—国内的契機からみた西嶋説」『愛知大学文学部学論叢』
- 伊与部倫夫 1989 「新潟県八幡山遺跡」『探訪弥生の遺跡』有斐閣
- 川村 浩司 1992 「総括」『古津八幡山古墳Ⅰ』新津市教育委員会
- 川上 貞雄 1981 『山崎須恵窯址』五泉市教育委員会
- 川上 貞雄 1982 『平遺跡』新津市教育委員会
- 川上 貞雄 1988 『八幡山遺跡現地説明会資料』金津丘陵埋蔵文化財発掘調査団
- 川上 貞雄 1989 「考古」『新津市史』資料編一卷、新津市史編さん委員会
- 川上 貞雄 1989 「新津市八幡山遺跡」『新潟県考古学会発表要旨』県考古学会
- 川上 貞雄 1990 「新潟県新津市八幡山遺跡」『日本考古学年報41』日本考古学協会
- 川上 貞雄他 1991 「原始・古代・中世の調査から」『田上の歴史』2号、田上町史編さん委員会
- 川上 貞雄 1991 『大沢谷地遺跡』小須戸町教育委員会
- 川上 貞雄 1992 A 『川口甲遺跡発掘調査報告書』新津市教育委員会
- 川上 貞雄 1992 B 『北沢遺跡群』豊浦町教育委員会
- 川上 貞雄他 1993 「原始・古代・中世の新津」『新津市史』通史編上巻、新津市史編さん委員会
- 川上 貞雄他 1994 A 「原始・古代・中世」『五泉市史』巻一資料編 五泉市史編さん委員会
- 川上 貞雄他 1994 B 「原始・古代・中世」『田上町史』通史編 田上町編さん委員会
- 萱森 昭夫 1990、萱森昭夫氏より、古津舟戸遺跡、埋葬地遺跡から弥生土器が検出したことの報告を受けた。
- 北村 亮 1991 「上浦遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査だよりNo.7』
- 坂井秀弥他 1987 「総合運動公園計画（仮称）に伴う遺跡確認調査」『新津市史』資料編一卷 新津市史編さん委員会
- 坂井 秀弥他 1988 『弥生時代の環濠集落をめぐる諸問題』埋蔵文化財研究会・東海埋蔵文化財研究会
- 佐原 眞 1987 『大系 日本の歴史1』小学館
- 佐原 眞 1989 「概説・弥生文化の研究Ⅱ」『探訪弥生の遺跡』有斐閣
- 沢田大多郎 1967 「古墳発生前における社会」『考古学研究』

- 鈴木 敏弘 1975 「畿内地方における方形周溝墓の展開」『原始古代社会研究』2 校倉書房
- 田島 明人 1986 「土師器よりみた古墳時代土器群の変遷」『漆町遺跡』1. 石川県立埋蔵文化財センター
- 田中 靖 1989 「新潟県田上町塚野遺跡採集の石器」『新潟考古学談話会会報』3号 新潟考古学談話会
- 栃木 英道 1988 「石川県における高地性集落」『弥生時代の環濠集落をめぐる諸問題』埋蔵文化財研究会・東海埋蔵文化財研究会
- 中川 成夫他 1956 『新津田家七本松須恵器窯址発掘調査報告』 北方文化博物館
- 中島 栄一 1976A 『古屋敷遺跡』 田上町教育委員会
- 中島 栄一 1976B 『中店遺跡』 田上町教育委員会
- 日本道路公団新潟建設局編 1992 「江内遺跡」『Highwayにいつ3号』
- 広井 造 1991 「古津八幡山古墳と八幡山遺跡前方後方形周溝墓について」『古津八幡山古墳I』 新津市教育委員会
- 古川利意、和田聡、高橋和 1990 「宮東遺跡」「男壇遺跡」『阿賀川地区遺跡発掘調査報告書』 会津坂下町教育委員会
- 水野 正好 1972 「古墳発生の論理(1)」『考古学研究』
- 渡辺 朋和 1990 「八幡山遺跡南地区・西地区確認調査」『第8回金津丘陵埋蔵文化財発掘調査団会議要項』 新津市教育委員会
- 渡辺 朋和 1992 『上浦遺跡発掘調査報告書』 新津市教育委員会
- 渡辺 朋和 1993 『草水町2丁目窯跡現地説明会資料』 新津市教育委員会
- 品田 高志 1992 「越後の弥生集落」『柏崎市立博物館館報No.7』

八幡山遺跡第3・6次調査関係者名簿

調査主体	川 瀬 紘 夫	新津市教育委員会教育長			
事務局	榎 本 英 一	教育次長		湯 田 幸 永	社会教育課課長
	田 中 均	社会教育課補佐		榎 本 泰 伸	社会教育課補佐
	長谷川 勇 一	社会教育課係長		上 沼 茂	社会教育課主任
	丸 山 裕 子	社会教育課主事		大 杉 克 行	社会教育課主事
	石 川 博 明	派遣社会教育主事		石 崎 義 郎	中央公民館係長
	小 野 康 樹	中央公民館主査		山 本 英 二	中央公民館主事
	明 間 時 雄	中央公民館技士		滝 沢 堯	中央公民館技士
	阿 達 哲 二	中央公民館技士		吉 川 公 人	社会体育係主事
	調査担当者	川 上 貞 雄	日本考古学協会々員		
調査員	荒 木 繁 雄	県文化財パトロール委員		杉 本 恵 子	
	田 中 順 子			佐 藤 友 子	
調査参加者	伊 藤 昌	渡 辺 哲 治	鈴木スミエ	萱 森 今 子	鈴 木 眞 吾
	鈴 木 一 郎	渡 辺 幸 吉	小 川 五 平	関 口 優 子	渡 辺 睦 子
	高 橋 一 雄	斎 藤 保	萱 森 武 夫	湯 田 キ ョ ノ	萱 森 ハ ッ エ
	小 川 重 蔵	渡 辺 正	石 井 伊 次 郎	泉 岩 雄	杵 鞭 キ イ
	佐 藤 亮	柳 千 代 美	志 田 徳 蔵	志 田 賢 蔵	風 間 庄 吾
	長谷川マサイ	萱 森 一 衛	斎 藤 淳 子	泉 春 一	泉 末 二
	小林真二郎	目 黒 喜 世	小 林 テ ル	本 多 隆 一	大 島 哲 男
	古 寺 花 昭	神 田 藤 吉	伝 田 耕 三 郎	小 川 義 平	長 谷 川 甲 作
	中 野 春 吉	白 井 庄 一	細 川 ハ ッ ノ	今 井 彦 平	田 辺 重 敏

報 告 書 抄 録

ふりがな	はちまんやまいせき		いこうへん					
書名	八幡山遺跡		遺構編					
副書名								
巻次								
シリーズ名	新津市文化財調査報告書							
シリーズ番号								
編著者名	川上貞雄							
編集機関	新津市教育委員会							
所在地	〒956 新潟県新津市大字程島2009		TEL 0250-22-9667					
発行年月日	西暦1994年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はちまんやま 八幡山	にいつし 新津市大字 ふるつそとはけ 古津字外畑	207	—	37度 45分 33秒	139度 7分 16秒	3次確認 1988. 06. 23 ～ 1988. 09. 16 第6次 1990. 05. 26 ～ 1990. 07. 09	3146 6025	総合運動 公園計画
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
八幡山	高地性集落	弥生時代 後期	竪穴住居 環濠	22基 5条	弥生土器 石鏃	新潟平野に接する丘陵頂部に広がる高地性集落		
	前方後方墳	古墳時代 前期	前方後方墳	1基		高地性集落廃絶後の首長墓		
	生産遺跡	平安時代 他	土埴 焼土埴	2 3		製鉄関連の簡易木炭炉		



1



2

発掘調査前 1 遺跡遠景 2 発掘調査前



1



2



3

調査スナップ 1 Aトレンチ 2 Cトレンチ 3 南区



トレンチ完掘 1 Aトレンチ 2 Dトレンチ 3,4 Bトレンチ
5 Fトレンチ



1



2



3

南区全景 1 北側台地 2 中央尾根部 3 南側頂部



環 濠 1 SD1号 2,3 SD2号



1



2



3



4



5



6

環 濠 1～4 SD3号 (1 完掘 2 土器出土状況 3 土層断面
4 発掘スナップ) 5～6 SD4号



1

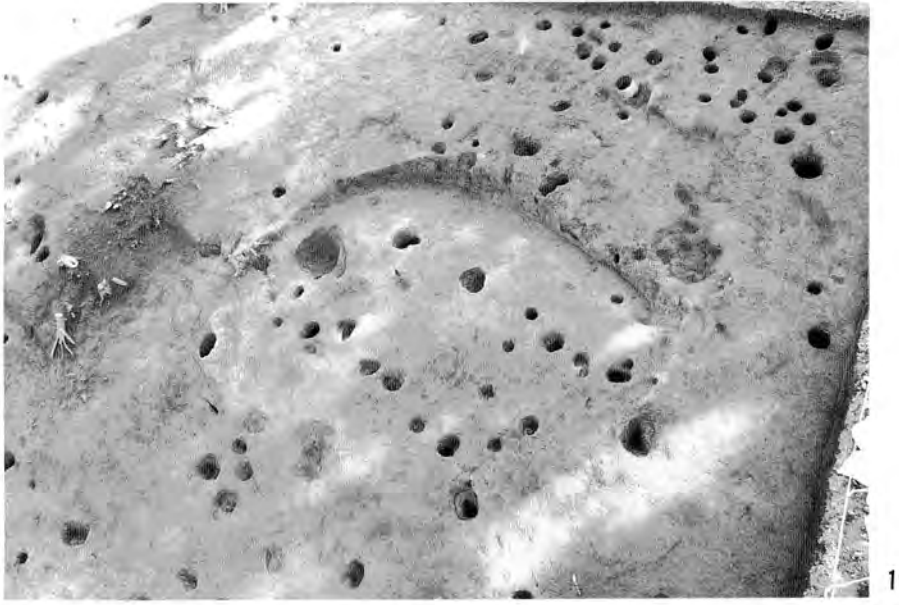


2

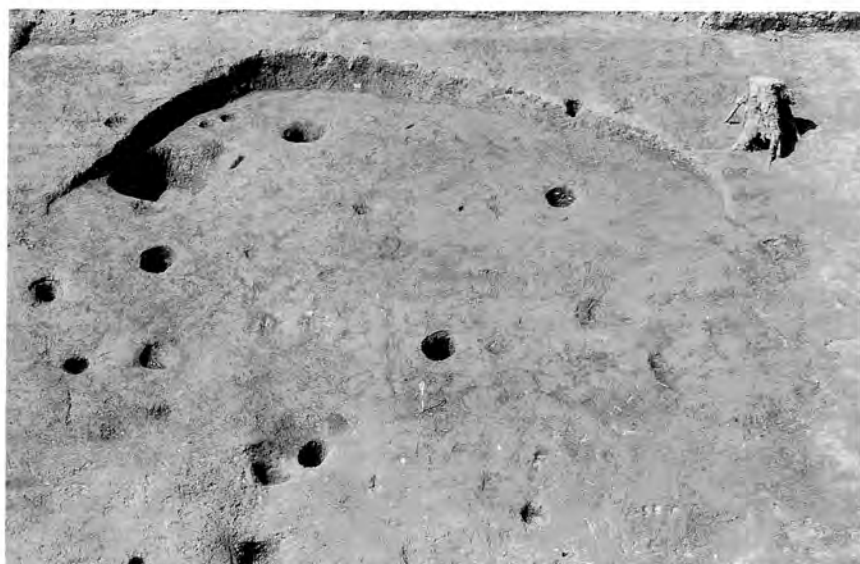


3

住居址 1 S I 1 ~ 3号住居址 2 ~ 3 S I 1号住居址



S I 2号住居址 1 住居址と周溝 2 遺物出土状況



S I 3号住居址 1 住居址 2 遺物出土状況 3 貯藏穴内の土器



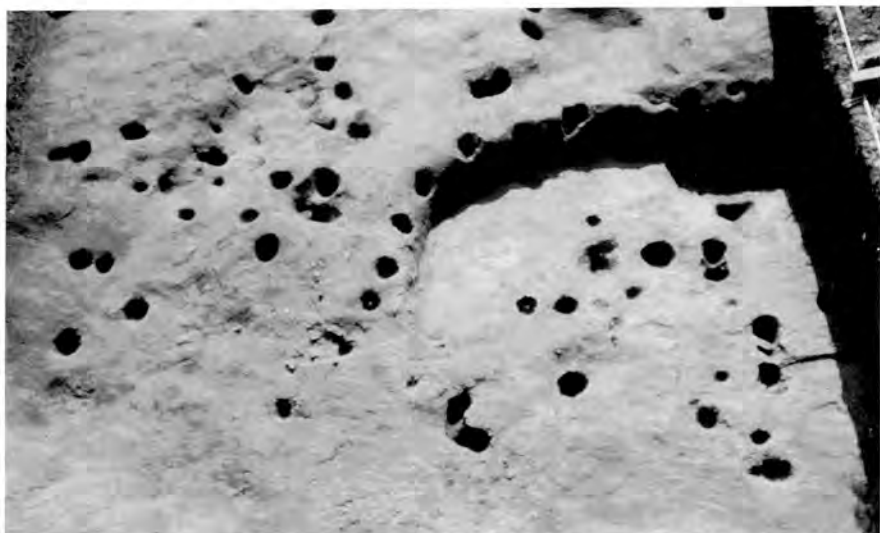
S I 4 号住居址と遺物出土状況



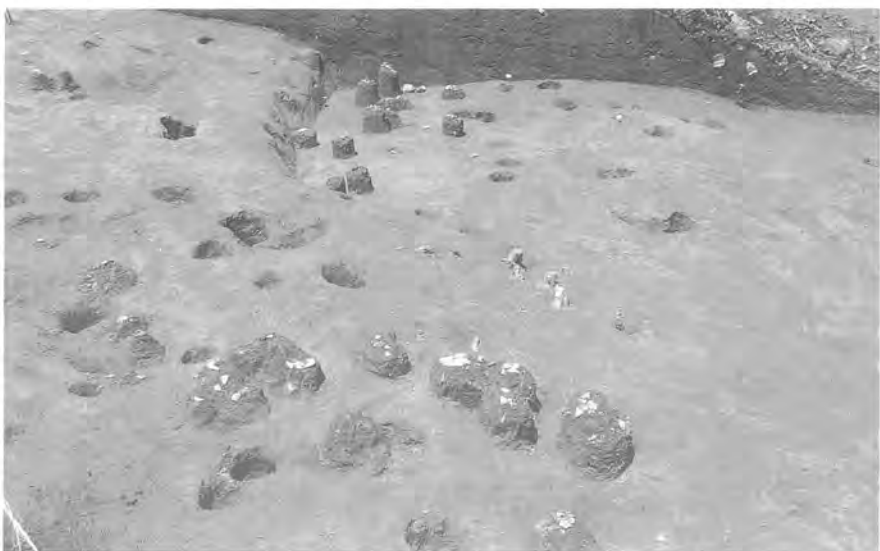
S I 5号住居址と遺物出土状況



住居址 1 S I 6・19号住居址 2 6号住居址出土遗物
3 S I 7号住居址



1



2



3

S I 8号住居址 1 住居址 2 遺物出土状況 3 貯蔵穴内の土器



1



2

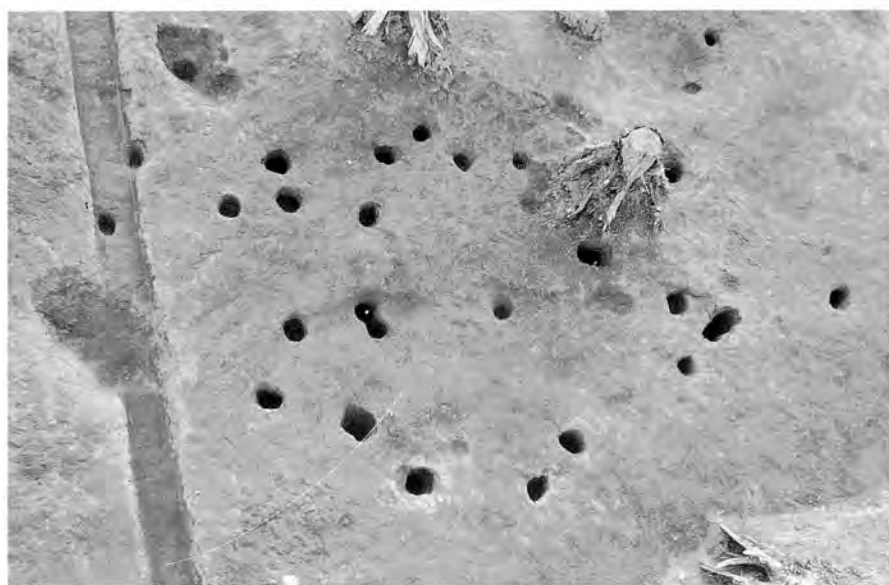


3

住居址 1 S I 9号住居址 2 9号住居址出土の石鏃 3 S I 11号住居址



1



2



3

住居址 1 S I 12号住居址 2 S I 13号住居址 3 S I 17号住居址周溝



1



2



3



4

住居址 1 S I 18号住居址 2 18号住居址遺物出土狀況 3 住居址群
4 S I 20号住居址



1



2



3

住居址 1 S I 20号住居址遺物出土状況 2 S I 21号住居址
3 21号住居址遺物出土状況



1

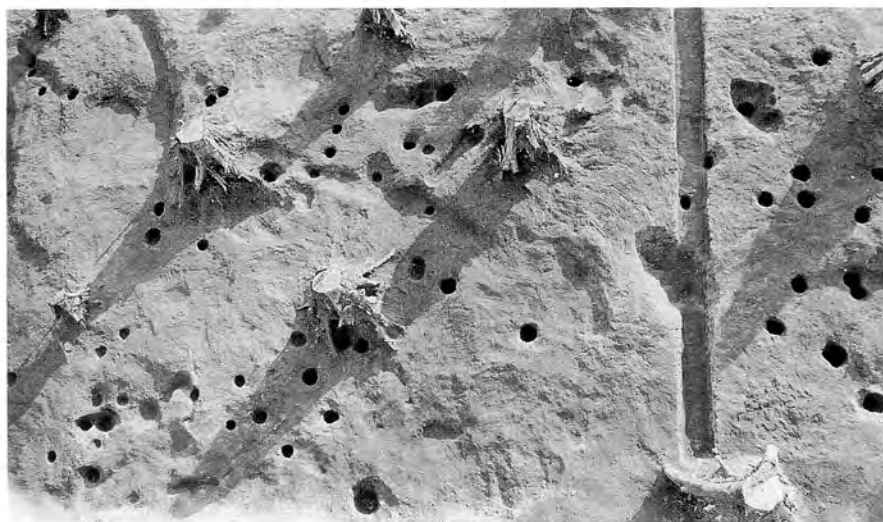


2



3

住居址 1 S I 22号住居址 2 S I 23号住居址 3 23号住居址遺物出土狀況



1



2



3

住居址 1 S I 24号住居址 2 S I 25号住居址 3 25号住居敷床



S I 26号住居址と遺物出土状況及び石鏃



1

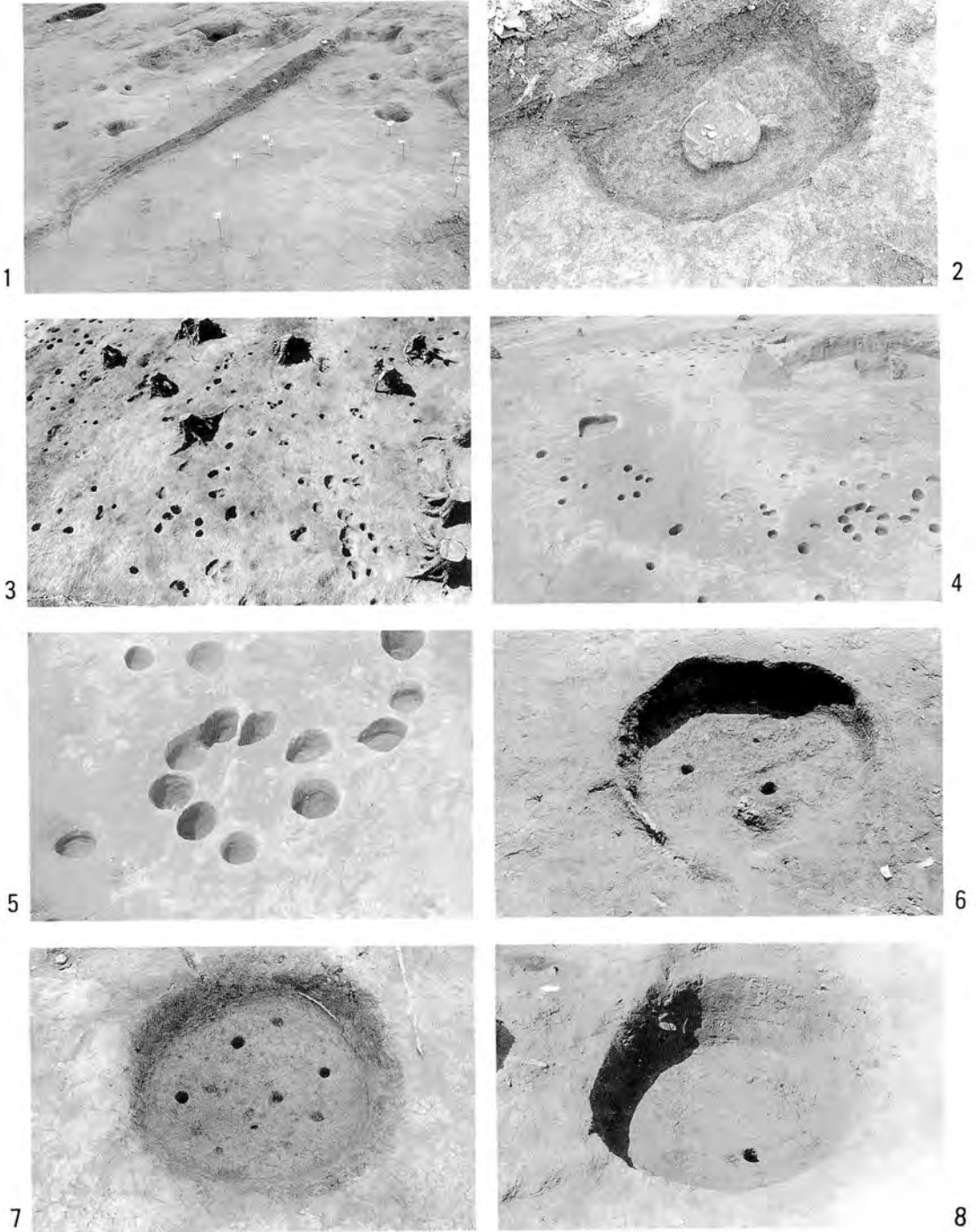


2



3

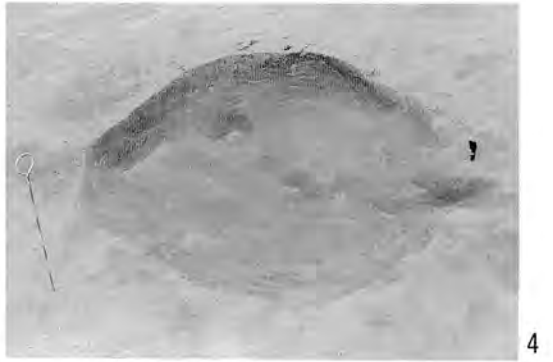
住居址 1 S I 27号住居址 2 27号住居址周溝内遺物出土状況
3 S I 28号住居址 (未完掘)



1 SB10号小型建物址 2 SK1号土坑と土器 3 Aトレンチピット群
4 南区ピット群 5 環状ピット遺構 6 SK2号焼土坑 7 SK3号焼土坑
8 SK4号焼土坑



前方後方墳



1 SX 1号遺構 2 SX 1号遺構出土土師器 3 SX 2号遺構出土土師器
4 SK 5号土坑 5 SK 11号焼土坑床面 6 SK 12号近世土壤



1



2



3

1,2 S X 3号遺構 (SD 5号環濠の中間層) 3 S X 3号遺構出土土師器

八 幡 山 遺 跡 I
遺 構 編

1994年3月31日印刷・発行

発行 新津市教育委員会
〒956 新津市大字程島2009番地
TEL 0250-24-2111

印刷 有限会社 亀田プリント社
新潟県中蒲原郡亀田町亀田工業団地1丁目2-5
TEL 025-382-4601 (代)